

河川水辺の国勢調査を行う上での
猪名川における補足事項 (案)

はじめに

平成9年の河川法改正により、治水・利水に加えて河川環境の整備と保全が新たに加わり、河川整備においては、当面の河川整備をまとめた河川設備計画の策定にあたり、学識経験者等の意見を聴く場として淀川水系流域委員会を設け、『治水・利水・利用事業においても「自然は自然にしか創れない」「川が川を創る」という自然の摂理を原理・原則として、計画段階から生態系の保全と回復を優先的かつ具体的に検討し、「河川や湖沼の環境保全と回復を重視した河川整備」に転換する必要がある。』との提言を受けた。

こうした課題や目標を踏まえ、「淀川水系河川整備計画」に示した河川環境に関する具体的な整備内容のうち、猪名川・藻川における自然環境の整備と保全について、必要な指導や助言を得ることを目的に猪名川自然環境委員会（以下「委員会」という。）を設立し、猪名川流域における自然環境の整備と保全に取り組んできたところである。

委員会では、「淀川水系猪名川自然再生計画」における河川環境の現状と課題や環境目標の設定をはじめ、課題となっている縦断方向の連続性確保として「猪名川魚がのぼりやすい川づくりマスタープラン（簡易魚道の検討）」、「河道掘削モニタリング」等の調査・分析・評価をそれぞれの特定の目的に応じて実施してきた。

一方、河川水辺の国勢調査[河川版]は、河川環境の整備と保全を適切に推進するため、河川の自然環境に関する基礎情報の定期的、継続的、統一的な収集整備を図るものである。本調査の結果は、河川環境情報図等各種環境基礎資料の作成、河川に関する各種計画の策定、事業の実施、河川環境の評価とモニタリング、その他河川管理の様々な局面における基本情報として活用されるとともに、河川環境及び河川における生物の生態の解明等のための各種調査研究の推進にも資するものとなっている。

「河川水辺の国勢調査を行う上での猪名川における補足事項（案）」（以下「補足事項」という。）は、「河川水辺の国勢調査基本調査マニュアル [河川版]」（以下「マニュアル」という。）に則り実施する業務（以下「水国業務」という。）の実施にあたり、猪名川の河川環境への理解を促すとともに、生物と河川環境に関する評価に使用するための基礎データ取得の継続性を保ち、活用するために必要な最小限の補足事項を取りまとめたもので、業務の実施にあたり技術提案等による品質の向上を妨げるものではない。

なお、「河川水辺の国勢調査入出力システム」等の全国データベースについては従来どおりマニュアルに従って実施するものである。

(以上)

<目次>

1. 猪名川の河川環境	1
1.1 現状と課題	1
1.1.1 猪名川・藻川の代表区間ごとの重要な環境	1
1.1.2 淀川水系猪名川自然再生計画	3
1.1.3 猪名川・藻川の課題に対する取り組み	6
1.2 河川環境の保全・整備と効果把握	7
1.2.1 これまでに実施した河道掘削モニタリング計画（案）	7
1.2.2 これまでに実施した簡易魚道モニタリング調査計画（案）	11
2. 「補足事項」の位置付け	13
2.1 河川水辺の国勢調査の活用に向けて	13
2.2 河川水辺の国勢調査 基本調査との関係	14
3. 河川水辺の国勢調査を実施する際の補足事項	15
3.1 全体調査計画への補足	15
3.1.1 調査地区の追加	15
3.1.2 河川環境の評価の視点と各調査の関係	17
3.2 魚類調査	18
3.2.1 補足の概要	18
3.2.2 【3.2 調査地区の設定】	20
3.2.3 【3.3 調査対象環境区分の設定】	20
3.2.4 【3.4 年間の調査時期及び回数設定】	21
3.2.5 【3.7 現地調査計画書の作成】	21
3.2.6 【4.1.17 蝟集調査】	22
3.2.7 【4.8 その他の生物の記録】	24
3.2.8 【5.2 調査結果のとりまとめ】	25
3.2.9 【6.2 魚類の生育と河川環境の関わりについて】	30
3.3 底生動物調査	31
3.3.1 補足の概要	31
3.3.2 【3.2 調査地区の設定】	32
3.3.3 【3.3 調査対象環境区分の設定】	32
3.3.4 【3.4 年間の調査時期及び回数設定】	32
3.3.5 【3.7 現地調査計画書の作成】	32
3.3.6 【6.2 調査結果のとりまとめ】	33
3.3.7 【7.2 底生動物の生息と河川環境の関わりについて】	37
3.4 植物調査	38
3.4.1 補足の概要	38
3.4.2 【3.2 調査地区の設定】	39
3.4.3 【3.3 年間の調査時期及び回数設定】	39
3.4.4 【3.7 現地調査計画書の作成】	39

3.4.5	【5.2 現地調査結果のとりまとめ】	39
3.4.6	【6.2 植物と河川環境の関わりについて】	40
3.5	鳥類調査	41
3.5.1	補足の概要	41
3.5.2	【3.2 調査箇所の設定】	42
3.5.3	【3.3 年間の調査時期及び回数設定】	42
3.5.4	【3.5 現地調査計画書の作成】	42
3.5.5	【5.2 調査結果のとりまとめ】	42
3.5.6	【6.2 鳥類の生息と河川環境の関わりについて】	45
3.6	両生類・爬虫類・哺乳類調査	46
3.6.1	補足の概要	46
3.6.2	【3.2 調査地区の設定】	47
3.6.3	【3.3 年間の調査時期及び回数設定】	47
3.6.4	【3.6 現地調査計画書の作成】	47
3.6.5	【5.2 現地調査結果のとりまとめ】	47
3.6.6	【6.2 両生類・爬虫類・哺乳類の生息と河川環境の関わりについて】	48
3.7	陸上昆虫類等調査	50
3.7.1	補足の概要	50
3.7.2	【2.2 聞き取り調査】	51
3.7.3	【3.2 調査地区の設定】	51
3.7.4	【3.3 年間の調査時期及び回数設定】	51
3.7.5	【3.6 現地調査計画書の作成】	51
3.7.6	【5.2 調査結果のとりまとめ】	51
3.8	河川環境基図作成調査	52
3.8.1	補足の概要	52
3.8.2	【3.2 調査地区の設定】	53
3.8.3	【3.3 年間の調査時期及び回数】	53
3.8.4	【3.5 現地調査計画書の作成】	53
3.8.5	【4.1.1 植生図作成調査】	53
3.8.6	【4.1.7 移動中等における確認種の記録】	53
3.8.7	【5.2 調査結果のとりまとめ】	54
4.	参考【2.2 聞き取り調査の参考】	62
4.1	植物（カワラナデシコ・ツルフジバカマ）	62
4.2	陸上昆虫類等(ヒメボタル)	63
5.	様式	64

※目次に示す【 】は、河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアルに記載されている目次の内容を記したものであり、河川水辺の国勢調査に対する補足事項を明確に把握できるようにした。

凡例

一重線 (例 一、) : 猪名川自然環境委員会 構造検討部会の指導・助言に基づく変更内容

二重線 (例 二、) : 猪名川自然環境委員会の指導・助言に基づく変更内容

赤文字 : 令和7年度猪名川・藻川全体計画に基づく変更内容

1. 猪名川の河川環境

1.1 現状と課題

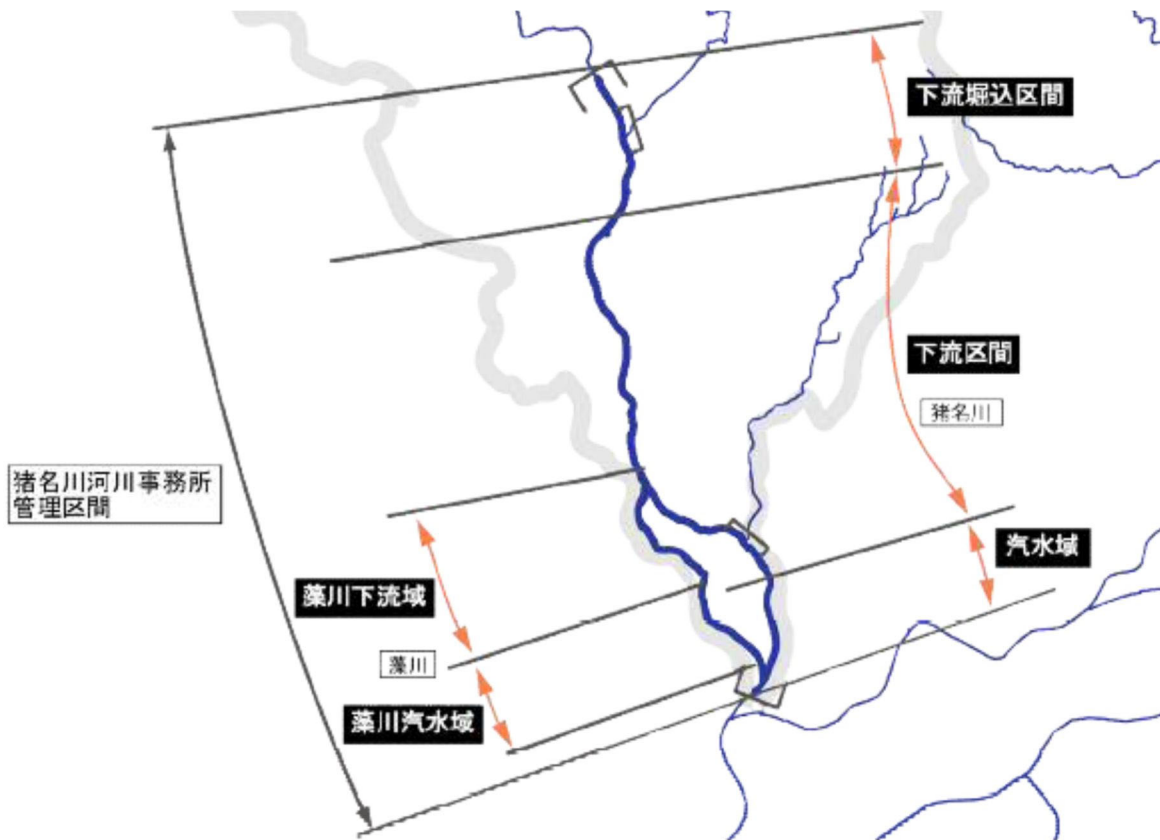
河川水辺の国勢調査は、河川環境の現状や課題を理解したうえで業務を実施することが必要であることから、猪名川・藻川の代表区間ごとの重要な環境と、「淀川水系猪名川自然再生計画書」の抜粋を以下に記載する。

1.1.1 猪名川・藻川の代表区間ごとの重要な環境

猪名川・藻川の縦断区分ごとの重要な環境を整理したものを図 1.1-1 に示す。主に猪名川・藻川分流地点の下流域では湿地群落・ワンド・たまりが、分流地点～中流域では河原環境が重要な環境である。湿地群落・河原環境・ワンド・たまりについてはこれまで河道掘削における環境配慮を行ってきた。また、河原環境については、北伊丹地区と桑津橋地区で自然再生事業を実施しており、今後も計画的実施する予定である。

猪名川の自然環境の特徴は、猪名川・藻川において感潮区間の汽水環境から淡水域へ連続していることであり、高水敷の割合が大きく比較的狭い河道の中に瀬と淵があり、洪水によって形を変える中洲・寄り洲が存在している。

その他の特徴的な環境として、猪名川 7.2k 付近の人工ワンド (ワイワイワンド)、堤防法面のチガヤ群落等が挙げられるほか、NPO 等によりカララナデシユ、ツルフジバカマ等の植物の保全活動も実施されている。



(出典：猪名川・藻川全体調査計画)

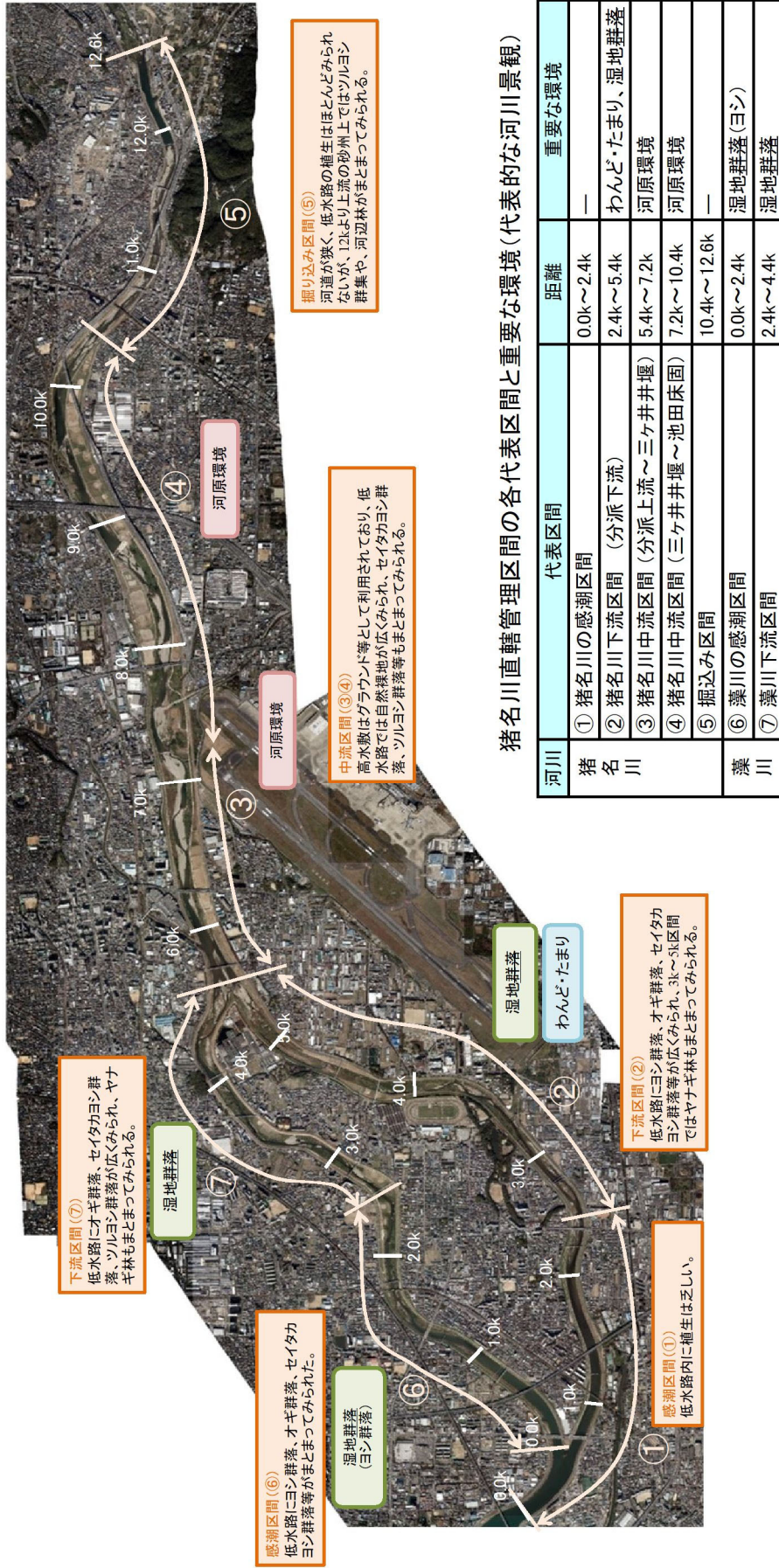


図 1.1-1 猪名川・藻川各代表区間の重要な環境

1 1.1.2 淀川水系猪名川自然再生計画

2 1.1.2.1 猪名川における河川環境の課題

3 (1) 横断連続性の分断

4 1) 水陸移行帯の減少

5 水位の変動によって水中に沈んだり、陸になったりする水陸移行帯は、水深や土の水分条件等が少
6 しずつ変化するため生物の活発な営みが繰り返され、その地域全体の生物多様性を高める上で重要
7 な役割を果たしている。

8 かつての猪名川では、洪水による攪乱作用により川の変動が繰り返され、それに伴い水域と陸域の
9 遷移区間である水陸移行帯も常に形成されていた。しかしながら近年、河川改修や高水敷の造成等に
10 伴い、滯筋が固定化し、水域・陸域の二極化が進んだことにより水陸移行帯が減少している。

11
12 2) 河原環境の減少

13 かつての猪名川は砂礫を主体とした交互砂州が広がっていたが、現在は干陸化が進み、砂州上に植
14 生が繁茂した状況となっている。

15 これに伴い、アレチウリ等の外来種の侵入やカワラナデシコ等の河原固有の生物の減少などが進行
16 し、河原を中心としたかつての河川生態系は従来とは異なる生態系へと変化しつつある。

17 また、河道内にはハリエンジュ、アキニレ、ジャヤナギ等の高木樹木が繁茂し、治水上、景観上の
18 問題となっている。

19
20 3) 湿地環境の減少

21 湿地環境は、動植物の生息・生育・繁殖にとって貴重な存在である。

22 かつて、猪名川及び藻川では分派点より下流の区間で湿地環境が形成され、そこには大規模なヨシ
23 群落が存在していた。

24 しかしながら、近年は河川改修や低水護岸整備、高水敷整備等に伴い湿地帯が干陸化し、ヨシ群落
25 が大幅に減少している。

26
27 (2) 縦断連続性の分断

28 猪名川の直轄管理区間には、8基の井堰・落差工がある。上流の井堰2基には魚道が設置されてい
29 るが、下流の6基には魚道が設置されていないため、魚類、カニ類等が川を自由に行き来することが
30 難しい状況となっている。また、余野川の合流部には落差が生じている。

31
32 (3) 河川流量の減少

33 近年の小雨傾向もあり、猪名川の河川流量は減少しており、渇水時には流水の連続性が途切れ河床
34 が露出する瀬切れが発生している。

35
36 (4) 水質改善の鈍化

37 猪名川の河川水質は、社会経済の発展及び都市化に伴い昭和40年代前半頃までが最も悪い状況(中
38 園橋のBOD値75%値100.0mg/l以上)にあったが、昭和44年に「水質汚濁対策連絡協議会」が発足
39 し、昭和50年頃より大幅に改善された。

40 現況の水質は、猪名川の中流域は基準値を満足し、比較的良好である。一方、原田処理場の下流域
41 では、処理水の影響で水質の環境基準(BOD)を満たしていない。このことから、猪名川の平均的な

1 水質は全国でワースト5位となっている。

3 (5) 外来生物の侵入

4 昭和55年頃から、オオクチバスやブルーギル等の外来種(魚類)が確認されはじめ、ウシガエル、
5 アカミミガメ(両生類)、カワラバト(鳥類)等の増加傾向が顕著である。

6 猪名川では、河川水辺の国勢調査(平成16年度)における植物全確認種数347種のうち、30%を超
7 える113種が外来種である。植生における外来種率(確認された全種類に占める外来種の割合)の全
8 国平均は11~19%であり、全国の一級河川の中で最も高い数字である。

9 特に分布面積では、セイタカアワダチソウ、セイバンモロコシ、アレチウリ等の割合が非常に高い。

10 また、外来種が優占する群落面積の割合では、全国の一級河川の平均が17%であるのに対して、猪
11 名川では50%以上となっており、全国の一級河川の上位5河川(中川・綾瀬川、猪名川、草津川、白
12 川、肝属川)の1つとなっている。

13 現状のままでは、外来種の優占により多くの在来種が駆逐されることが懸念され、不可逆な遷移に
14 より永久に失われる可能性もある。特に、特定外来種であるアレチウリの繁茂は驚異的である。

16 1.1.2.2 自然再生の目標

17 (1) 人と猪名川とのふれあい

18 昭和20年代~昭和60年頃の写真からも伺えるように、かつての猪名川は多くの人々が気軽に水
19 遊びや魚取りをし、都市の中に存在する数少ない自然環境として沿川住民に利用されてきた。特に昭
20 和40年代に入って、都市におけるオープンスペースの減少に伴い河川空間の利用が注目されるよう
21 になり、沿川住民の憩いの場として公園、緑地及び広場が整備され、利用されてきた。

22 現在においても、10.4km付近の親水公園では、休日などに親子がタモ網を使って小魚を追いかけ
23 る姿や、連れ立って川の中で遊ぶ子供らの姿が見られる。

24 このように、猪名川は都市部に残された身近で貴重な自然環境として、沿川の住民に親しまれ利用
25 されている。

27 (2) 猪名川における自然再生の必要性(自然再生の目標)

28 かつての猪名川は、河原や瀬・淵など多種多様な動植物の生育・生息・繁殖基盤が存在し、そこには
29 様々な生物が棲んでいた。多様な河川形状や、そこに生息・生育・繁殖する様々な生物は、変化に富
30 んだ美しい景観を形作るとともに、沿川の住民に安らぎの場や自然とのふれあいの場を提供していた。

31 しかしながら、昭和40年代後半から流域の宅地化が急進すると、猪名川を取り巻く環境は大きく
32 変化し、これに伴い河川に求められる機能も大きく変化した。流域における資産の集中、増加はより
33 高い治水安全度を求めることになり、それに伴い継続的な河川改修が実施された。また同時に、地元
34 の要望に応じて高水敷を造成し、運動公園などとしても利用されるようになった。

35 こうした猪名川を取り巻く環境の変化により、そこにあった河川環境もかつてとは異なる環境へと
36 遷移している。近年の猪名川では、河原の減少や湿地環境の減少、縦断連続性の分断による魚類の生
37 息域の減少などが進行し、生物の生息・生育・繁殖環境に大きな影響を及ぼしている。加えて、近年
38 では外来植物の繁茂も相まって、生物の多様性の喪失が懸念されている。

39 一方、猪名川は都市部に残された貴重な自然環境として利用されるとともに人々に潤いを与え、河
40 川環境に対する住民の関心も高く、その重要性が認識されている。

41 河川の自然再生とは、現在可能な対策を検討・実施し、河川環境の保全・再生を行い、川が川を作る

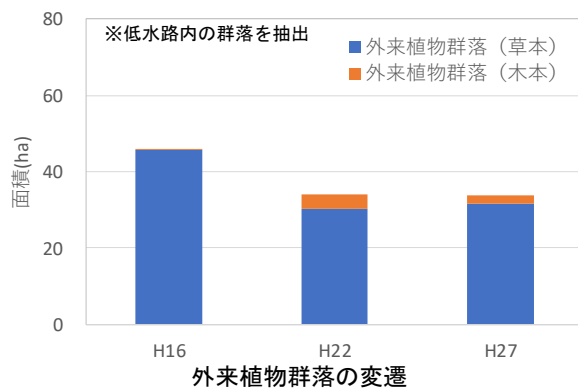
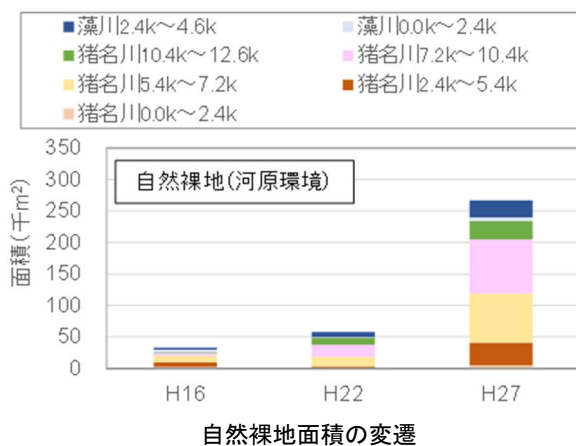
- 1 のを助けながら生物の多様性の回復を目指すものである。
- 2 このため猪名川の自然再生は、生物の生育・生息・繁殖の場を回復することによって生物の多様性
- 3 の回復を目指し、地域の生態系の質を高め、かつてどこでも見られた「身近な自然」を取り戻すこ
- 4 と、つまり「猪名川本来の姿を甦らせる川づくり」こそが、自然と共生する社会の実現を目指した都
- 5 市河川猪名川の目標である。
- 6

1.1.3 猪名川・藻川の課題に対する取り組み

「淀川水系猪名川自然再生計画書」に記載された猪名川・藻川の河川環境の課題に対するこれまでの取り組みや効果等を表 1.1-1 に示す。河原環境や湿地環境について、自然再生や河道掘削における環境配慮を実施した箇所において、良好な環境が維持されている。今後は、これらの環境が持続できるかどうか、工事等実施箇所以外の区間の環境がどのように変化するか等、猪名川・藻川全体の河川環境を継続的にモニタリングしていくことが重要である。

表 1.1-1 猪名川・藻川の河川環境の課題に対するこれまでの取り組みや効果等

項目	猪名川自然再生計画書の記載内容	猪名川河川事務所のこれまでの取り組み	取り組みによる効果等	
1. 横断連続性 (水陸移行帯)	河原環境	<ul style="list-style-type: none"> 干陸化の進行により砂洲上に植生が繁茂している アレチウリ等の外来種の侵入により、カワラナデシコ等の河原固有の生物が減少している 	<ul style="list-style-type: none"> 北伊丹地区において「北河原地区河原再生試験施工」及び「北伊丹地区レキ河原再生工事」を実施した。 平成22年以降、河道掘削工事の実施にあたっては、環境配慮として「礫河原の創出・再生」を実施してきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 河道掘削や洪水等の影響もあるが、河原環境の再生により自然裸地の面積は増加している。 今後も良好な河原環境が持続するかどうかを見ていく必要がある。
	湿地環境	<ul style="list-style-type: none"> 河川改修に伴い、湿地帯の干陸化及びヨシ群落の大幅な減少が進行している。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成22年以降、河道掘削工事の実施にあたっては、環境配慮として「湿地群落の創出・再生」の実施してきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 猪名川下流域では湿地群落の面積は維持されており、河道掘削における環境配慮の効果が見られている。 藻川下流域等では減少していることから、今後の変化についてモニタリングが必要である。
2. 縦断連続性	<ul style="list-style-type: none"> 猪名川の直轄管理区間の8基の井堰・落差工のうち、下流の6基には魚道が未設置であり、魚類等の縦断連続性が分断されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 大井井堰、三ヶ井井堰、高木井堰、久代北台井堰、池田床固、余野川落差工において、横断工作物の抜本的な改築を伴わない範囲で新たに簡易魚道を整備してきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 簡易魚道の設置により、一部で課題はみられるものの猪名川・藻川の河川縦断方向の連続性は改善されてきている。 アユは全地点で分布を確認 ウキゴリ類は、池田床固までの5地点で分布を確認 モクスガニ、テナガエビは池田井堰以外の全地点で分布を確認 	
3. 河川流量の変動	<ul style="list-style-type: none"> 猪名川の河川流量の変動により、渇水時には瀧切れが発生している。 	—	—	
4. 水質改善	<ul style="list-style-type: none"> 猪名川の中流域は環境基準を満足している。 原田処理場の下流の利倉地点では、処理水の影響で水質の環境基準(BOD)を満たしていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 住民と行政でつくる「神崎川水質汚濁対策連絡協議会猪名川分科会」において、目指すべき方向性(将来像)を「川とふれあい、人とふれあう、身近な川へ」とし、この将来像を実現するために3つの基本目標を掲げ、様々な水質改善に向けた取り組みを進めてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 猪名川の中流域は環境基準を継続的に満足している。 下流域の利倉地点においても平成29年のBOD75%値が2.5mg/Lと環境基準を満足するまで改善し、猪名川全域で環境基準を満足している。 	
5. 外来生物	<ul style="list-style-type: none"> 河川水辺の国勢調査(平成16年度)における植物全確認種数347種のうち、30%を超える113種が外来種であった。 侵略的外来種であるアレチウリの繁茂がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成22年以降、猪名川流域における地域住民や住民活動団体等との連携により、在来植物の植え戻し、外来植物の抜き取りを継続的に実施してきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域住民等との連携による対策、河道掘削工事、平成25年、平成26年の出水等の影響により、平成27年にかけて、主に河道内の外来植物群落の面積は減少した。 	



出典：河川水辺の国勢調査（河川環境基図作成調査）

1.2 河川環境の保全・整備と効果把握

河川環境の保全と整備のため、これまでに実施してきた取り組みに対する効果把握の概要を以下に示す。

なお、以下に示す「河道掘削モニタリング計画（案）」及び「簡易魚道モニタリング調査計画（案）」は、平成 27 年度第 25 回猪名川自然環境委員会資料から抜粋したものである。

1.2.1 これまでに実施した河道掘削モニタリング計画（案）

1.2.1.1 モニタリング目的

猪名川の河道掘削にあたっては、現況の自然環境を保全するだけでなく、猪名川の特徴的な自然環境を創出・再生することにも配慮して検討を行ってきた。その検討は、猪名川自然環境委員会及び構造検討部会に諮りながら進め、猪名川の河道掘削にあたっての環境目標として、以下の 4 項目を抽出した。

- ① 止水性魚類等の生息場となる「ワンド・たまりの保全」
- ② 湿地群落の形成、河原環境再生を期待した「水陸移行帯の創出・再生（湿地群落・河原環境）」
- ③ 河川環境景観を代表し、生物の生息基盤となる「ヨシ・ツルヨシ・オギ・チガヤ群落の保全・再生」
- ④ 地域のシンボルとなっている「ヒメボタル生息地の保全」

河道掘削のモニタリングは、これらの環境目標を踏まえ、河道掘削が生物とその生息・生育環境に影響を及ぼす事項に対し、その影響を評価し、影響に応じた維持管理対策を検討するための知見を得ることが目的である。

1.2.1.2 モニタリング方針

河道掘削の実施に当たっては実施箇所ごとの環境目標に応じた自然環境配慮がなされている。よって、モニタリングでは自然環境配慮を実施した工事実施箇所ごとに、その取り組みについての効果を検証し、評価する必要がある。

方針① 河道掘削工事における自然環境配慮事項の効果検証・評価

自然環境配慮として実施した取り組みについて、その効果を検証し、評価する。また、河道掘削の影響は、想定されていた項目以外にも及ぶ可能性があるため、河川環境がどのように変化するかを把握していく必要がある。さらに、工事実施箇所以外にも河道掘削の影響が及ぶ可能性もあることから、河川環境の変化は工事実施箇所のみでなく、猪名川全体でも把握し、評価する必要がある。

方針② 河道掘削による河川環境の変化の把握・評価

猪名川における動植物の生息生育環境が、河道を掘削することによって、どのように変化するかを把握し、河川環境の変化について評価する。

1.2.1.3 河道掘削工事における自然環境配慮事項の効果検証・評価

猪名川の河道掘削にあたっては、実施箇所ごとの環境特性から、環境目標の達成に向けた自然環境配慮が検討され実施されてきた。この環境目標に対応する自然環境配慮事項は、以下のとおりである。

1 (1) 「ワンド・たまりの保全」

2 猪名川のワンド・たまりは、流水性の河川環境の中で止水性の魚類等の生息場や産卵場などに利用
3 されており、水域の生物多様性に貢献する重要な環境要素となっている。河道掘削にあたっては、可
4 能な限り、ワンド・たまりを保全するようにしている。

6 (2) 「水陸移行帯の創出・再生（湿地群落・河原環境）」

7 猪名川は、出水による攪乱が少なくなったことにより河道が安定し、河川本来の攪乱環境に依存す
8 る水陸移行帯が少なくなっている。

9 水陸移行帯の創出・再生は、掘削高を年間 60 日程度冠水する高さとし、水辺に向かってなだらか
10 な勾配で切り下げることにより、水際の湿地植生の成立や河原環境再生に期待している。

12 (3) 「ヨシ・ツルヨシ・オギ・チガヤ群落の保全・再生」

13 ヨシ群落、ツルヨシ群集、オギ群落、チガヤ群落は、猪名川の河川環境景観を代表する植物群落で
14 あり、河川に依存する生物の生息基盤となる環境といえる。例えば、河川敷に生息するカヤネズミは
15 オギ群落等に巣をつくり、繁殖する。オギ群落やツルヨシ群集を早期に回復させることは、これらを
16 生活の場とする生物の回復にもつながる。また、チガヤ群落は河川沿いの刈取草原を代表する植生で
17 あり、多くの草原生植物の生育環境となっている。

18 河道掘削にあたっては、現況の対象群落を保全するとともに、改変区域の対象群落の表土を保全し、
19 掘削後にまきだすことで再生を図っている。



26 1.2.1.4 河道掘削による河川環境の変化の把握・評価

27 ~~河道掘削にあたっては、想定される影響について、工事実施箇所ごとに現地の状況に応じた環境配
28 慮が実施されてきた。しかし、河道掘削の影響予測は不確実性をともなうため、河道掘削箇所の環境
29 が、今後どのように変化するかについて、継続したモニタリングによって記録しておくことが重要で
30 ある。モニタリングに当たっては、猪名川全体の河川環境を対象に、河床形状等の物理環境と生物と
31 の関係から総合的に評価する必要がある。~~

32 ~~猪名川全体の物理環境の情報としては、5 年ごとに実施されている河川水辺の国勢調査（河川環境
33 基図作成調査）が利用できる。河川環境基図には植生分布だけでなく、瀬・淵の分布やワンド・たま
34 りの位置等の水域に関する情報も整理されている。これに定期横断測量による地形情報を加えること
35 により、物理環境と生物の生息基盤となる植生や水域環境の関係についての評価に活用できるものと
36 考えられる。~~

37 ~~調査結果の評価にあたっては、種類数や個体数の変化だけでなく、外来生物の侵入状況、生物の生
38 活型からも考察する必要がある。具体的には、生活型（植物：多年草、1・2 年草など、底生動物：造
39 網型、匍匐型、遊泳型など、魚類：汽水・海水魚、純淡水魚・回遊魚など）や生息環境（鳥類：樹林、
40 草地、水辺など）で分類して考察することにより、河道掘削実施箇所の河川環境の変化を評価でき
41 と考えられる。~~

1.2.1.4 自然環境配慮事項のモニタリング指標

河道掘削モニタリングでは、個々の生物種に着目するだけではなく、猪名川における生態系保全の観点から影響を評価することが重要である。そこで、生態系のシンボルとなるモニタリング指標を検討し、その調査結果をもとに評価する。

モニタリング方針で整理した自然環境配慮事項ごとに代表的なモニタリング指標を抽出し、設定した。

(1) ワンド・たまりの保全

猪名川のワンド・たまりは、止水性のミナミメダカなどや緩流～止水性のヤリタナゴなどの重要な魚類が生息するほか、コイ・フナ類をはじめとする多くのコイ科魚類の産卵場、稚魚の成育場としての機能を有する。また、出水時には小型魚類の避難場としても利用される重要な環境である。

ワンド・たまりは、出水による攪乱によって消長を繰り返す不安定な環境といえる。しかし、そのような環境に依存する生物種は少なくなく、自然の営力によって変化しながらも、複数個所が継続して存在していることが望ましいといえる。このため、河道掘削においては、極力、ワンド・たまりを残すように配慮している。

ワンド・たまりには、基本的に止水性魚類等が定着しており、これらの種類数や個体数がモニタリングの指標になると考えられる。ワンド・たまりに依存する止水性魚類は、既往成果で数多く確認されており、これらの既往成果で記録されているワンド・たまりの指標となる魚類が確認されることが望ましいと考えられる。

表 1.2-1 モニタリング指標種（ワンド・たまりの保全）

項目	評価の考え方	モニタリング指標
ワンド・たまりの保全	ワンド・たまり等の止水環境を利用する在来種が生息している。	【止水性魚類等】表 3.2-5 参照 【イシガイ科二枚貝】
	ワンド・たまりの構造が維持されている。	【水域環境】 ワンド・たまり面積

(2) 水陸移行帯の創出・再生（湿地群落・河原環境）

水陸移行帯は、年間 60 日程度冠水することにより湿潤な環境が確保され、また、適度に攪乱されることにより河川本来の水辺環境が再生する。

猪名川では「川自体の自然の復元力を利用しながら、かつての猪名川に存在した多様な生物がすむ身近な河川環境を回復させる」ことを目的として自然再生を実施している（淀川水系猪名川自然再生計画書）。そこで「かつての猪名川に存在した多様な生物」として、既往文献から猪名川において確認記録のある生物種を整理し、それらをもとにモニタリング指標を検討した。

猪名川の下流部および藻川では、湿潤な環境が成立することが期待され、河川環境としては特定の生物でなく、湿地群落がモニタリングの指標に適していると考えられる。湿地群落の形成を目的とした場所では、湿地群落で形成され覆われることが評価の判断となる。また、自然再生では「かつての猪名川に存在した多様な生物」がすむ環境の回復を目指しており、既往成果で確認されている湿地群落に生育・生息する生物が確認されることが望ましいと考えられる。

また、底生動物のヤゴ類は羽化する時に湿地に生育する植物群落を利用するため、ヤゴ類の種類数も指標になると考えられ、既往成果で確認されている種類が確認されることが望ましいと考えられる。

猪名川の中流部では、河原環境の再生を目指しており、自然裸地の面積や、河原環境に生育する植

1 物、自然裸地を餌場や繁殖地として利用するシギ・チドリ類がモニタリングの指標になると考えられ
 2 る。これらの種についても、湿地群落と同様に、既往成果で確認されている種類が確認されることが
 3 望ましいと考えられる。

5 表 1.2-2 モニタリング指標種（水陸移行帯の創出・再生（湿地・河原環境））

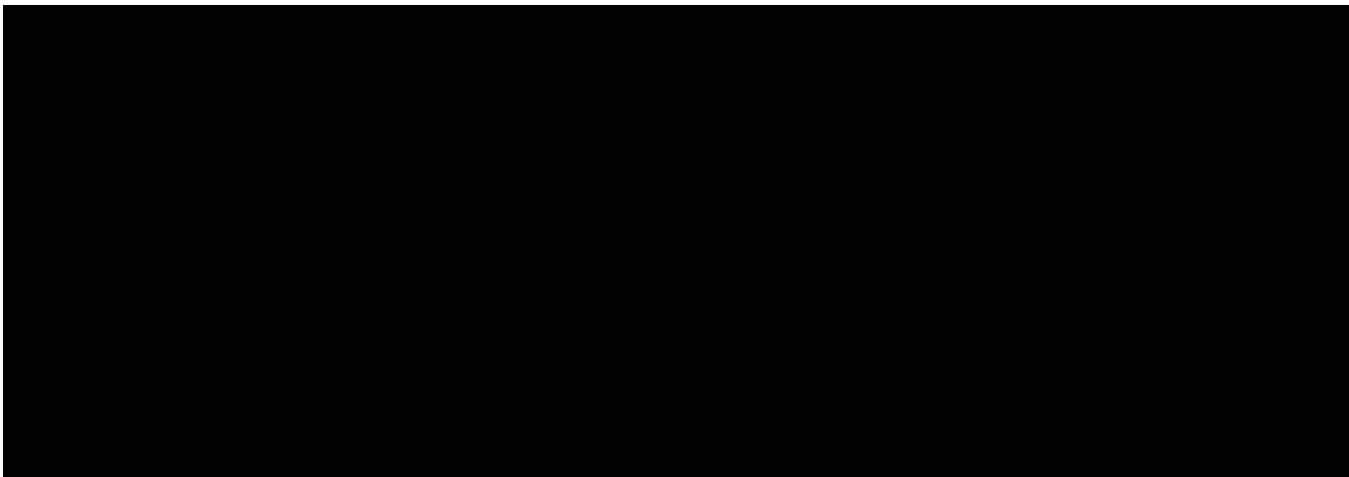
項目	評価の考え方	モニタリング指標
湿地群落	水辺に湿地群落が分布している。	【湿地群落面積】表 3.8-4 参照
	湿地に生育する植物群落を利用する底生動物（ヤゴ類、重要種）が生息している。	【ヤゴ類】表 3.3-3(1)参照 【底生動物重要種】表 3.3-3(2)参照
河原環境	水辺に河原環境が広く分布している。	【自然裸地面積】
	河原環境に特有な植物が生育している。	【河原環境の指標種（植物）】表 3.4-3 参照
	河原環境を利用する鳥類が生息している。	【河原環境の指標種（鳥類）】表 3.5-3 参照

6
 7 (3) ヨシ・ツルヨシ・オギ・チガヤ群落の保全・再生

8 ヨシ・ツルヨシ・オギ・チガヤ群落の保全・再生として、猪名川の河川環境景観を構成する代表種
 9 であるヨシ群落、ツルヨシ群集、オギ群落、チガヤ群落の地下茎を含む表土のまきだしが実施された。

10 河道掘削により裸地環境になると、一般的には工事後1年目に1年生草本が侵入し、2~3年目に
 11 多年生草本、そのまま安定すると低木林へと植生遷移が進行する。オギやツルヨシは、多年生草本で
 12 あり、表土のまきだしをしないと通常の場合は侵入するまでに2~3年はかかることになることから、
 13 ツルヨシ、ヨシ、オギ、チガヤの地下茎を含む表土をまきだすことにより、植生の早期回復が期待さ
 14 れる。

15 ヨシ・ツルヨシ・オギ・チガヤ群落の保全・再生の効果を把握する指標としては、ツルヨシ、ヨシ、
 16 オギ、チガヤの群落面積を基本とする。また、ヨシ群落、オギ群落に依存する生物の回復状況を示す
 17 指標としては、高茎のイネ科草本群落に依存するカヤネズミの営巣数が指標となる。



1.2.2 これまでに実施した簡易魚道モニタリング調査計画（案）

1.2.2.1 モニタリング方針

猪名川では、直轄管理区間に設定されている魚道の無い6箇所（堰・床固め）を対象として、魚類が遡上するきっかけとなる簡易な魚道を設置し、魚類の遡上改善を図る取り組みが進められてきた。魚道モニタリング調査では、設置された簡易魚道において遡上調査および蝸集調査、物理環境調査を実施し、簡易魚道および猪名川における縦断方向の河川連続性について評価することを目的とする。

(1) 簡易魚道の機能の評価

各簡易魚道について、遡上および蝸集の状況、魚道内の物理環境から、施設としての簡易魚道の機能を評価する。

(2) 河川縦断方向の連続性の評価

簡易魚道の設置によって、魚類が遡上しているのかを確認し、猪名川本川における河川縦断方向の連続性を評価する。

1.2.2.2 モニタリング指標

簡易魚道の機能の評価では、施設としての機能を評価するため、簡易魚道を魚類、エビ・カニ類が遡上していることを確認するとともに、堰下の蝸集が確認されなければ、魚道が正常に機能していると評価する。また、簡易魚道設計対象種の遡上に適した物理環境（水深、流速、水面落差等）が維持されているか否かもモニタリング指標とする。

河川縦断方向の連続性の評価では、遡上の有無だけでなく、モニタリング指標として、河川内移動を行う回遊魚の種が過去に確認された分布範囲以上に広がっていることを評価する。指標となる生物は、過去の調査で分布範囲が限られ、河川と海を行き来する回遊魚であるアユおよびウキゴリとする。これらは確認数が多く、かつ経年的に確認していることから、猪名川の連続性の指標になるものと考えられる。

表 1.2-3 モニタリング指標

項目	評価の考え方	モニタリング指標
指標1 簡易魚道の指標	魚道の遡上調査の結果に基づき、設置した簡易魚道を魚類、エビ・カニ類が遡上し、かつ堰下の蝸集がみられない。	【簡易魚道設計対象種】 アユ、ウキゴリ、モクズガニ
	魚道内の水深、流速、落差等が指標種の遡上に適した範囲で維持されている。	【物理環境】 水深、流速、水面落差等
指標2 連続性の指標	河川内移動を行う回遊魚の種が過去に確認された分布範囲以上に広がっている。	【回遊魚】アユ、ウキゴリ

出典) 第25回猪名川自然環境委員会、資料-2 簡易魚道モニタリング計画（案）

1.2.2.3 河川縦断方向の連続性の評価にあたっての留意事項

河川縦断方向の連続性の評価は、モニタリング指標によって行うが、魚類の生息環境（ハビタット）の縦断的な分布状況との関係についても確認する。

魚類の生息環境（ハビタット）の分布状況の確認は、河川水辺の国勢調査の「河川環境基図作成調査」における「水域調査」のデータを活用する。

「水域調査」で記録されている早瀬や淵、ワンド・たまりの数量や規模、早瀬の河床材料について、流程距離毎にそれらの経年変化から、魚類の生息環境の変化を把握する。

1 例えばアユの生息環境は、早瀬の数量、規模(面積)、河床材料の変化を確認することが考えられる。
 2 モクズガニについては、身を隠せる石～大石底の環境が、ウキゴリは淵やワンド・たまり環境の規模
 3 を確認することが考えられる。

4 「河川環境基図作成調査」は5年に一度実施されることから、経年的な環境の変化を把握すること
 5 ができる。

6 よって、簡易魚道モニタリング調査から得られる生物データと「水域調査」で得られる環境データ
 7 をあわせて整理することで、簡易魚道の機能の評価と魚類の生息環境（ハビタット）との関係を確認
 8 する。

9 簡易魚道の機能の評価と魚類の生息環境（ハビタット）との関係については、表 1.2-4 とする。

11 表 1.2-4 簡易魚道の評価と魚類の生息環境（ハビタット）との関係

ケース	1	2	3
魚道モニタリング調査より得られる情報	魚道が機能し、下流から上流まで幅広く生物が分布している。	遡上調査において生物の遡上は確認しているが、上流部での個体数が減少している。	魚道が機能せずある範囲までしか分布がみられない。
水域調査で得られる情報	各種が好む生息環境（ハビタット）は、規模の縮小等が無く、維持されている。	各種が好む生息環境（ハビタット）が出水による土砂の堆積により石礫底が砂礫底に変化およびわんど・たまりの消失等の劣	各種が好む生息環境（ハビタット）は維持されている。
関係性の確認	河川の連続性、生息環境はともに維持されており、良好な状態である	河川の連続性は確保されているが、河川内の生息環境（ハビタット）が劣化したことで個体数が減少していると推察される。	河川内の生息環境（ハビタット）は保たれているが、魚道機能が低下したため生息域が制限されている。

1 **2. 「補足事項」の位置付け**

2 **2.1 河川水辺の国勢調査の活用に向けて**

3 これまで、猪名川の河川環境の現状と課題を踏まえ、環境目標の達成に向けた取り組みを実施して
4 おり、実施に当たっては河道掘削モニタリングや簡易魚道（縦断連続性）モニタリング（以下「各モ
5 ニタリング」という。）を行い、河川環境への影響や効果を把握し、維持管理に反映させてきた。

6 今後は、各モニタリングにより実施してきた河川環境の保全と整備による影響や効果の把握を、河
7 川水辺の国勢調査を活用することにより実施するとともに、猪名川・藻川全体の環境変化の把握及び
8 評価を実施する新たな取り組みも行っていくこととした。

9 そのためには、河川水辺の国勢調査の実施に当たっては、猪名川・藻川の河川環境の現状と課題を
10 理解するとともに、調査成果の活用方法を理解したうえで実施することが必要である。

11 本補足事項は猪名川・藻川の河川環境の継続的なデータの把握のため、調査の目的、調査結果の整
12 理及び生物と河川環境との関わりについての考察等、調査結果を活用するために必要な事項を補足し
13 たものである。

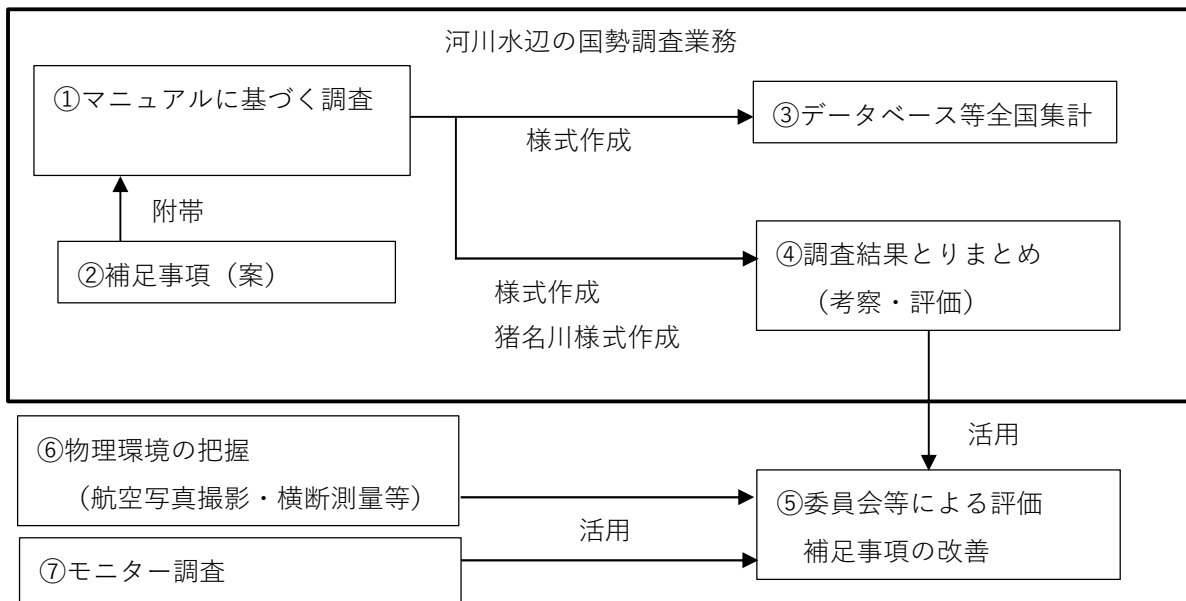
14

2.2 河川水辺の国勢調査 基本調査との関係

マニュアルによる全国的な調査と補足事項との関係を図 2.2-1 に示す。

本補足事項は、マニュアルや「淀川水系河川水辺の国勢調査全体調査計画書（令和8年3月）」（以下、「全体調査計画書」という。）に定められた調査方法やとりまとめを実施することを前提に、猪名川での河川水辺の国勢調査結果を活用するため、活用に必要な河川環境の把握に用いる視点等を踏まえた取りまとめ様式等を取りまとめたものである。

また、従来の河川水辺の国勢調査に補足した事項や補足地区（本資料の補足事項）の調査結果については、全国的な調査との関係に留意するものとし、補足事項の詳細は「3. 河川水辺の国勢調査を実施する際の補足事項」に示している。



- ① 河川水辺の国勢調査基本調査マニュアル〔河川版〕に基づく調査。
- ② 河川水辺の国勢調査実施時の補足(目的の共有・データの継続性確保等)
- ③ データベース入力等今までの全国集計等、様式等はマニュアルに従う。対象は調査地区とする。
- ④ 調査結果取りまとめは、マニュアルの様式に猪名川の独自様式を追加。
- ⑤ 猪名川自然環境委員会等での評価、河川水辺の国勢調査結果を活用するための補足事項の改善等。
- ⑥ 物理環境の把握;攪乱が生じるような洪水による地形変化が生じた場合、河川維持管理計画に基づき航空写真撮影・横断測量を実施することにより変化を把握し、⑤での評価等に使用。
- ⑦ モニター調査: 河川の生物の生息・生育状況等に関する情報の充実を目的として、流域の市民団体、学識経験者等からの調査協力、情報提供等により河川環境に関する基礎情報を収集整備する。


図 2.2-1 マニュアルによる全国的な調査と補足事項との関係

3. 河川水辺の国勢調査を実施する際の補足事項

3.1 全体調査計画への補足

「全体調査計画書」への補足を以下に示す。

3.1.1 調査地区の追加

各調査の調査地区を表 3.1-1、に示す。また、補足地区の追加理由を表 3.1-2 に示す。全体調査計画によって定められた調査地区に加え、魚類調査では補足地区①、補足地区②を追加する。補足地区①では、~~その他の調査地区と同様の内容で調査を実施する。~~補足地区②は、夏季に縦断連続性の指標種を対象とした蝸集調査を実施する。

~~底生動物調査では補足地区①を追加する。補足地区①では、その他の調査地区と同様の内容で調査を実施する。~~

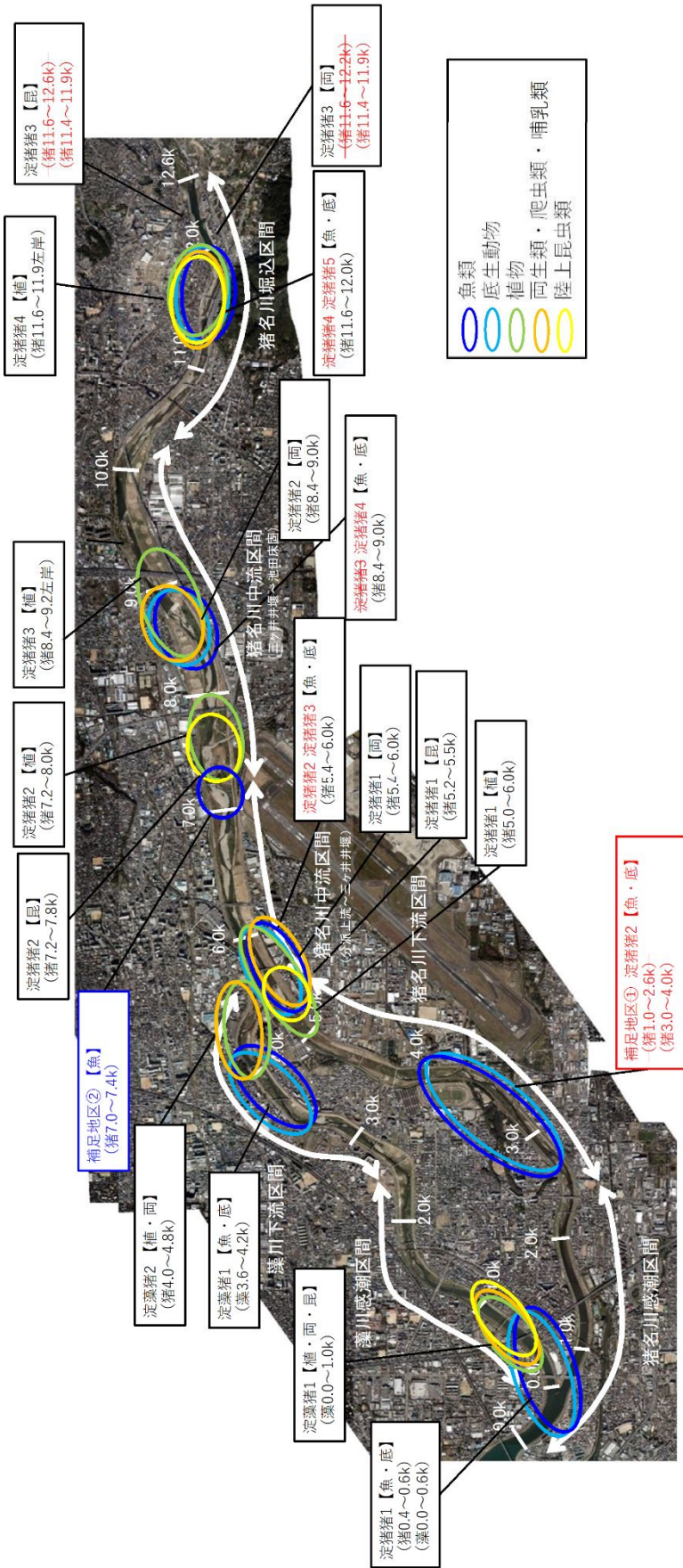
表 3.1-1 各調査の調査地区（追加を含む）

河川名	河川環境縦断区分	距離	調査地区				
			魚類	底生動物	植物	両生類・爬虫類・哺乳類	陸上昆虫類
猪名川 (直轄管理区間)	汽水域(低地)	0.0 ~ 2.2km	【淀猪猪 1】 0.4~0.6km(猪名川) 0.0~0.6km(藻川)	【淀猪猪 1】 0.4~0.6km(猪名川) 0.0~0.6km(藻川)	—	—	—
	下流区間(低地)	2.2 ~ 10.4km	【補足地区① 淀猪猪 2】 1.0~2.6km 3.0~4.0km	【補足地区① 淀猪猪 2】 1.0~2.6km 3.0~4.0km	—	—	—
			【淀猪猪 2 淀猪猪 3】 5.4~6.0km	【淀猪猪 2 淀猪猪 3】 5.4~6.0km	【淀猪猪 1】 5.0~5.7km 右岸	【淀猪猪 1】 5.4~6.0km 両岸	【淀猪猪 1】 5.2~5.5km 両岸
			【補足地区②】 7.0~7.4km	—	【淀猪猪 2】 7.2~8.0km 左岸	—	【淀猪猪 2】 7.2~7.8km 両岸
	【淀猪猪 3 淀猪猪 4】 8.4~9.0km	【淀猪猪 3 淀猪猪 4】 8.4~9.0km	【淀猪猪 3】 8.4~9.2m 左岸	【淀猪猪 2】 8.4~9.0km 左岸	—		
下流掘込区間(丘陵地)	10.4 ~ 14.1km	【淀猪猪 4 淀猪猪 5】 11.6~12.0km	【淀猪猪 4 淀猪猪 5】 11.6~12.0km	【淀猪猪 4】 11.6~11.9km 右岸	【淀猪猪 3】 11.6~12.6km 11.4~11.9km 右岸	【淀猪猪 3】 11.6~12.6km 11.4~11.9km 右岸	
(直轄藻川管理区)	藻川汽水域(低地)	0.0 ~ 2.2km	—	—	【淀藻猪 1】 0.0~1.0km 右岸	【淀藻猪 1】 0.0~1.0km 右岸	【淀藻猪 1】 0.0~1.0km 右岸
	藻川下流域(低地)	2.2 ~ 4.8km	【淀藻猪 1】 3.6~4.2km	【淀藻猪 1】 3.6~4.2km	【淀藻猪 2】 4.0~4.8km 左岸	【淀藻猪 2】 4.0~4.8km 左岸	—
地区数合計			7 地区	6地区	6 地区	5 地区	4 地区

(出典:全体調査計画書を基に補足地区を追記)

表 3.1-2 調査地区追加理由

名称	魚類調査	底生動物調査
補足地区①	藻川分派下流の猪名川は、 藻川下流域と同じセグメントであり全体調査計画では藻川のみに調査地区が設定されているが、河道掘削等の河川維持は猪名川においても行われることから、藻川分派～藻川合流間の猪名川でのランド・たまり及び汽水域～淡水域等の自然環境の状況を把握するため追加する。	
補足地区② (三ヶ井井堰)	簡易魚道モニタリングを実施していた箇所であり、モニタリング結果から河川縦断方向の連続性の分岐点となることが判明している。今後の河川縦断方向の連続性の評価に用いるデータを継続的に取得するため追加する。	(適用外)



(出典:全体調査計画書を基に補足地点を追記)

図 3.1-1 調査地区及び補足地区の位置

3.1.2 河川環境の評価の視点と各調査の関係

工事に伴う自然環境配慮の効果の把握及び猪名川・藻川の課題の現状把握を踏まえた環境目標と、各調査項目の関係を表 3.1-3 に示す。

表 3.1-3 環境目標と各調査項目の関係

環境目標	環境目標への対応										課題への対応※5				
	ワンド・たまりの保全			水陸移行帯の創出・再生					ヨシ・ツルヨシ・オギ・チガヤ群落の保全・再生	ヒメボタル生息地の保全	縦断連続性の分断	外来生物の侵入			
指標	止水性魚類	イシガイ科の二枚貝	ワンド・たまり	湿地群落		河原環境			チガヤ群落	ヨシ・ツルヨシ・オギ	カヤネズミ	ヒメボタル	ビュ、モクズガニ	アユ、ウキゴリ類、テナガエ	外来種
				湿地群落を利用する底生動物	湿地の面積	河原環境を利用する植物	河原環境を利用する鳥類	河原環境の面積※4							
数量	個体数	個体数	面積	種数	面積	種数	種数	面積	面積	巣数	個体数	個体数	種数		
魚類調査/魚類環境DNA調査	○	※1	※2										○	○	
底生動物調査		※1	※2	○										○	
植物調査						○								○	
鳥類調査							○							○	
両生類・爬虫類・哺乳類調査			※6							○				○	
陸上昆虫類調査											※3			○	
河川環境基図作成調査			○		○	○		○	○					○	

※1 これまでの調査で確認されていないが、生息が確認された場合はワンド・たまりの指標種として整理する。

※2 調査対象環境区分の設定の結果を用い、ワンド・たまりの有無を確認する。

※3 ヒメボタルについてはNPO等による観察会の結果により成虫の確認状況を整理する。

※4 河原環境として、植生図の自然裸地面積を用い評価する。

※5 猪名川・藻川の課題のうち、「河川流量の減少」、「水質改善の鈍化」については、河川水辺の国勢調査との関連が薄いため、対象としない。

※6 カエル類・カメ類はワンド・たまりの保全と関係する(第23回猪名川自然環境委員会構造検討部会(令和2年12月9日)での助言)。

1 3.2 魚類調査

2 3.2.1 補足の概要

3 河川水辺の国勢調査基本調査マニュアル「魚類調査」に対する補足を表 3.2-1 及び表 3.2-2 に示す。

4
5

表 3.2-1 補足の一覧（魚類調査）

河川水辺の国勢調査基本調査マニュアルの目次構成			補足の概要	
章	節	項		
1. 調査概要	1.1	調査目的	-	
	1.2	調査対象	-	
	1.3	調査区域(調査対象河川区間)	-	
	1.4	調査内容	-	
	1.5	調査頻度	-	
	1.6	調査手順	-	
	2. 事前調査	2.1	文献調査	-
2.2		聞き取り調査	-	
2.3 漁業実態等の整理		2.3.1	回遊性魚類の遡上・降河に関する情報の整理	-
		2.3.2	へい死事例の整理	-
		2.3.3	漁業実態の整理	-
	2.3.4	放流場所・産卵場所・禁漁区間等の整理	-	
3. 現地調査計画の策定	3.1	現地踏査	-	
	3.2	調査地区の設定	・調査地区を補足(補足地区①、補足地区②を追加)	
	3.3	調査対象環境区分の設定	・調査の継続性を補足	
	3.4	年間の調査時期及び回数設定	・全体調査計画に基づく調査時期、アユ遡上との関係を補足	
	3.5	調査方法の選定	-	
	3.6	現地調査に際し留意すべき法令等	-	
	3.7	現地調査計画書の作成	・猪名川・藻川の課題等を踏まえた計画書作成を補足	
4. 現地調査	4.1 調査方法	4.1.1	投網による捕獲	-
		4.1.2	タモ網による捕獲	-
		4.1.3	定置網による捕獲	-
		4.1.4	刺網による捕獲	-
		4.1.5	サデ網による捕獲	-
		4.1.6	はえなわによる捕獲	-
		4.1.7	どうによる捕獲	-
		4.1.8	地曳き網による捕獲	-
		4.1.9	玉網による捕獲	-
		4.1.10	カゴ網による捕獲	-
		4.1.11	セルびんによる捕獲	-
		4.1.12	潜水による捕獲	-
		4.1.13	電撃捕魚器による捕獲	-
		4.1.14	掘り返しによる捕獲	-
		4.1.15	潜水観察	-
		4.1.16	目視確認	-
		4.1.17	蟻集調査	・蟻集状況の確認のための実施を追加
	4.2	調査結果の記録	4.2.1 調査環境 4.2.2 調査結果	-
	4.3 同定	4.3.1	同定に際しての留意事項	-
		4.3.2	同定上特に留意すべき種	-
		4.3.3	同定文献の整理	-
	4.4 計測	4.4.1	計数	-
		4.4.2	計測	-
	4.5 写真撮影	4.5.1	写真撮影	-
		4.5.2	写真の整理	-
4.6 標本の作製及び保管	4.6.1	標本の作製	-	
	4.6.2	標本の保管	-	
4.7	移動中における確認種の記録	-		
4.8	その他の生物の記録	-		
4.9 集計の際の留意点	4.9.1	集計の際の留意点	・底生動物(イシガイ科)の記録を補足	
	4.9.2	整理番号の付け方	-	
4.10 調査概要の整理	4.10.1	調査実施状況の整理	-	
	4.10.2	調査地区位置図の作成	-	
	4.10.3	現地調査の結果の概要の整理	-	
5. 調査結果とりまとめ	5.1	調査結果の整理	-	
	5.2 調査結果のとりまとめ	5.2.1	重要種の経年確認状況の整理	-
		5.2.2	確認状況の整理	-
		5.2.3	経年確認状況の整理	-
		5.2.4	縦断確認状況の整理	-
		5.2.5	種名の変更状況の整理	-
		5.2.6	魚類流程分布状況の整理	-
		5.2.7	確認種目録の整理	-
5.2	「ワンド・たまり」及び「縦断連続性」の指標種等の整理を補足	-		
6. 考察・評価	6.1	現地調査確認種について	-	
	6.2	魚類の生息と河川環境の関わりについて	・河川環境として「ワンド・たまり」、「縦断連続性」及び「汽水域～淡水域」の考察を補足	
	6.3	今回の調査全般に対するアドバイザー等の所見	-	
7. 様式集			・猪名川様式を追加	

6
7

1
2

表 3.2-2 補足の一覧（魚類環境 DNA 調査）

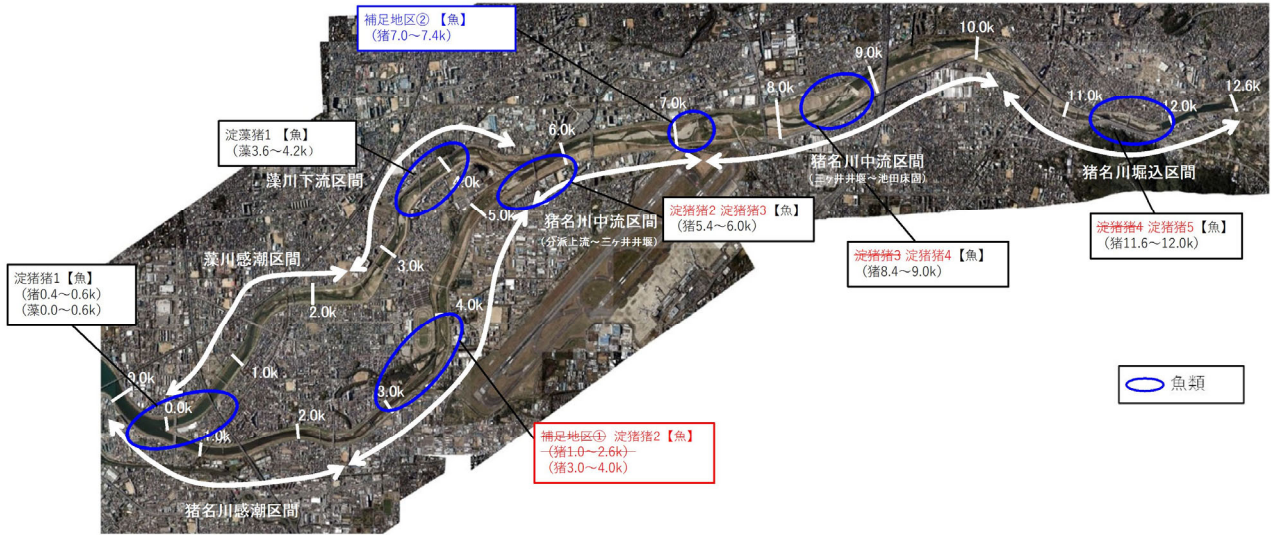
河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアルの目次構成			補足の概要	
章	節	項		
1. 調査概要	1.1	調査目的	-	
	1.2	調査対象	-	
	1.3	調査区域(調査対象河川区間)	-	
	1.4	調査内容	-	
	1.5	調査頻度	-	
	1.6	調査手順	-	
2. 現地調査計画の策定	2.1	現地踏査	-	
	2.2	調査地点の設定	-	
	2.3	年間の調査時期及び回数設定	-	
	2.4	現地調査に際し留意すべき法令等	-	
	2.5	現地調査計画書の作成	-	
3. 現地調査	3.1 調査方法	3.1.1	機材準備	-
		3.1.2	採水方法	-
	3.2 調査結果の記録	3.2.1	調査環境の記録	-
		3.2.2	試料に関する記録	-
		3.2.3	フィールドブランクに関する情報の記録	-
		3.2.4	採水地点の状況	-
	3.3 写真撮影	3.3.1	写真撮影	-
		3.3.2	写真の整理	-
	3.4	調査地点位置図の作成	-	
	3.5	試料の運搬	-	
	4. 分析	4.1ろ過	4.1.1	ディスクフィルターを用いたろ過
4.1.2			カートリッジ式フィルターを用いたろ過	-
4.2		DNAの抽出	-	
4.3 DNAの分析		4.3.1	環境DNAの分析条件	-
		4.3.2	環境DNAの分析条件の記録項目	-
		4.3.3	環境DNAの分析結果の記録項目	-
4.4	分析終了後の試料の取り扱い	-		
5. 調査結果とりまとめ	5.1 調査結果の整理	5.1.1	環境DNAメタバーコーディング解析	-
		5.1.2	解析結果の精査	-
		5.1.3	解析結果の登録	-
	5.2 調査結果のとりまとめ	5.2.1	検出種の整理	-
		5.2.2	経年確認状況の整理	-
5.2.3		調査結果の概要	-	
6. 様式集			-	

3
4

1 3.2.2 【3.2 調査地区の設定】

2 調査地区は全体調査計画の地点を基本とし、~~補足地区①~~、補足地区②を追加する。~~補足地区①では、~~
3 ~~その他の調査地区と同様の内容で調査を実施する。~~補足地区②は、夏季に縦断連続性の指標種を対象
4 とした蛸集調査を実施する。

5 環境が変化し、調査に適さない場合は適宜変更するものとする。
6



7
8 図 3.2-1 調査地区（魚類）
9

10 3.2.3 【3.3 調査対象環境区分の設定】

11 マニュアルに従い設定する。設定に当たっては調査の継続性に配慮し、前回の魚類調査や河川環境
12 基図作成業務を参考に適切に設定する。
13

1 **3.2.4 【3.4 年間の調査時期及び回数の設定】**

2 全体調査計画に基づき表 3.2-3 の時期に実施する。

3 なお、補足地区②は縦断連続性の指標種の遡上期である夏のみの調査とする。

4 夏季（5～6月）に実施する蝸集調査については、河川縦断方向の連続性をアユ等の遡上状況により
5 把握することを目的として実施するものである。猪名川におけるアユの遡上は、三ヶ井井堰周辺にお
6 いて、おおむね5月上旬以降にまとまって見られるようになる。調査の実施は、それらの遡上集団が
7 直轄管理区間上流端付近の加茂井堰まで到達する頃（6月上旬頃）が望ましい。

8 ただし、アユの遡上は水温や出水等に影響を受けることが指摘されていることから、水温の推移や
9 降雨の状況を踏まえると共に、近傍地点である淀川水系淀川に設置されている淀川大堰でのアユの遡
10 上状況も参考にし、アユの遡上集団の加茂井堰周辺への到達が予測されるタイミングで実施する。

11
12 表 3.2-3 調査時期（魚類調査）

季節	時期	設定根拠等
夏	5～6月	・水温が上昇し魚類の活動が活発になる。両側回遊魚の遡上期に当たり、これらの移動状況が把握できる。多くの魚類の稚魚期に当たり、これらの生息場所が確認できる。汽水・海水魚の稚魚が成長のために河口へ侵入し、確認できる。なお、これ以降の盛夏になると、水温が高温になり魚類の活性が低下するため、注意が必要である。
秋	10～11月	・秋産卵の魚類の生息状況が把握できる。稚魚が成長し、同定が確実になる。夏季調査との比較により、河川内の移動状況が把握できる。河口へ侵入する汽水・海水魚の種が夏と異なり、全体的な魚類相が把握できる。なお、これ以降は水温が低下し魚類の活性が低下するため、注意が必要である。 ・秋の調査時期は水温が15℃近辺になって、アユが海に降下する時期にずらし、回遊するアユの現状を把握するのがよい。

13
14
15 **3.2.5 【3.7 現地調査計画書の作成】**

16 マニュアルに定める他、自然環境配慮事項の実施状況や猪名川・藻川の課題を踏まえ、現地調査計
17 画書を作成する。

1 3.2.6 【4.1.17 蝟集調査】

2 表 3.2-4 に示す調査地区を対象として、夏季調査時に堰下流において蝟集調査を実施し、河川縦断
 3 連続性のモニタリングの指標種（アユ、ウキゴリ類）に留意し魚類の蝟集状況を確認する。蝟集状況
 4 を把握する範囲を図 3.2-2 に示す。

5 なお、蝟集調査結果は、縦断連続性の評価のみに使用し、河川水辺の国勢調査のとりまとめ（様式
 6 作成、入出力システム）の対象外とする。

- 7
- 8 ・調査方法：潜水観察により、分布範囲、種類、個体概数を記録する。また、補足的に投網により魚
 9 類を採捕する。採捕個体は、回収時単位で写真撮影後、堰の上流側に原則として放流す
 10 る。調査努力量は1調査地区あたり2人×30分程度を目安とする。
- 11 ・記録項目：潜水観察による分布範囲、種類、個体概数を記録。投網による種類、個体数、体長、写
 12 真撮影。
- 13 ・現地観測：魚道と滞筋の関係(写真及び概略図)、調査時の天候、気温、水温を記録。
- 14
- 15
- 16

表 3.2-4 蝟集調査の対象地区

調査地区名	調査時期		横断工作物
	夏季	秋季	
淀猪猪 1	マニュアル	/	マニュアル
補足地区① 淀猪猪 2	マニュアル	/	マニュアル
淀猪猪 2 淀猪猪 3	マニュアル	/	マニュアル
補足地区②	/	蝟集調査	/
淀猪猪 3 淀猪猪 4	マニュアル	蝟集調査	マニュアル
淀猪猪 4 淀猪猪 5	マニュアル	蝟集調査	マニュアル
淀藻猪 1	マニュアル	蝟集調査	マニュアル

17 マニュアル：河川水辺の国勢調査マニュアルによる調査

18 蝟集調査：本資料による補足事項であり、河川水辺の国勢調査とは別途とりまとめる

19 対象地区に関する誤植があり令和4年度の猪名川自然環境委員会の中で修正

20

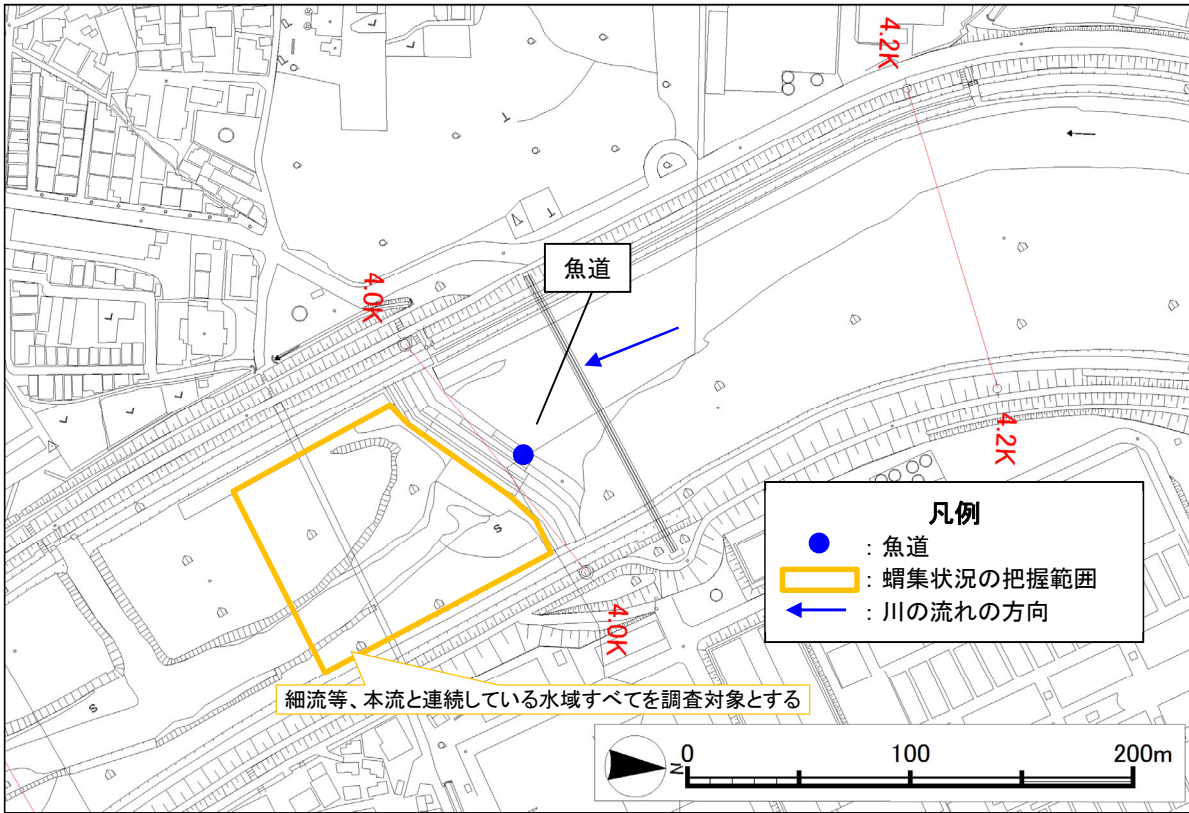


図 3.2-2 (1) 蛭集状況の把握範囲 [淀藻猪1 (大井井堰)]

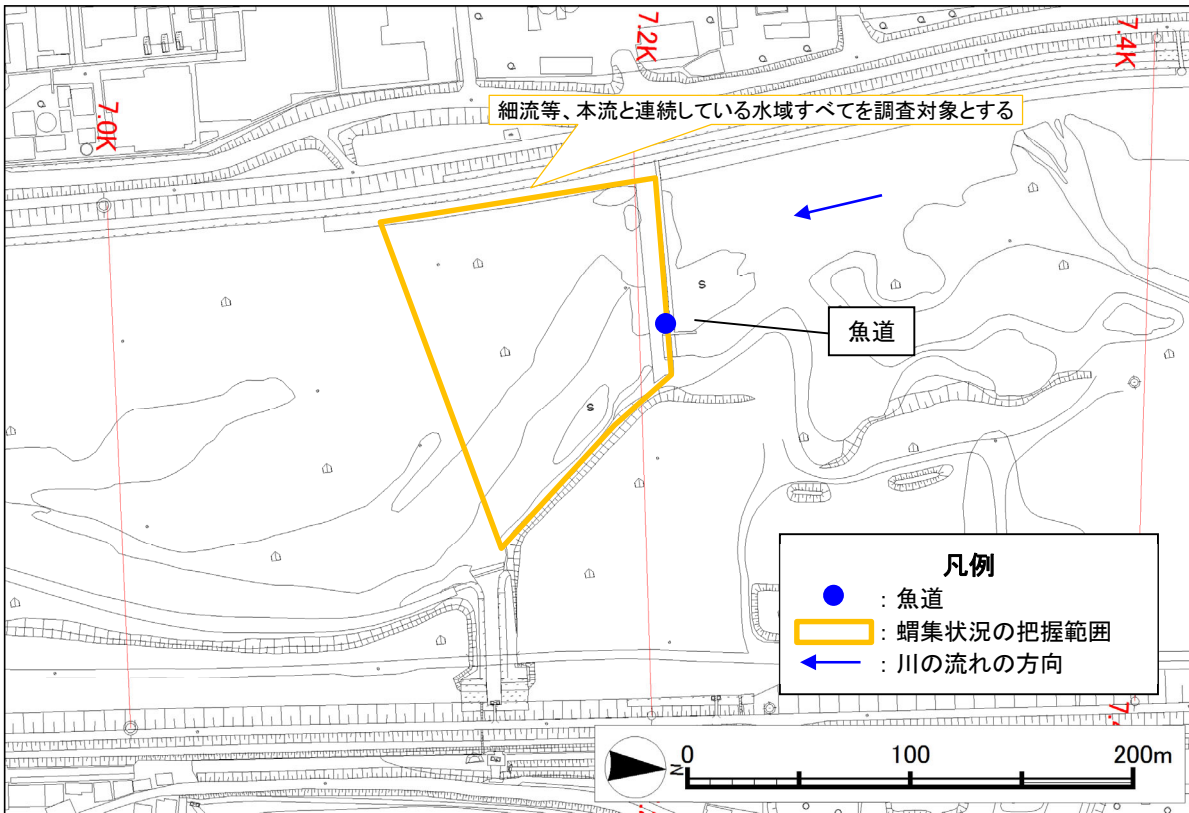


図 3.2-2 (2) 蛭集状況の把握範囲 [補足地区② (三ヶ井井堰)]

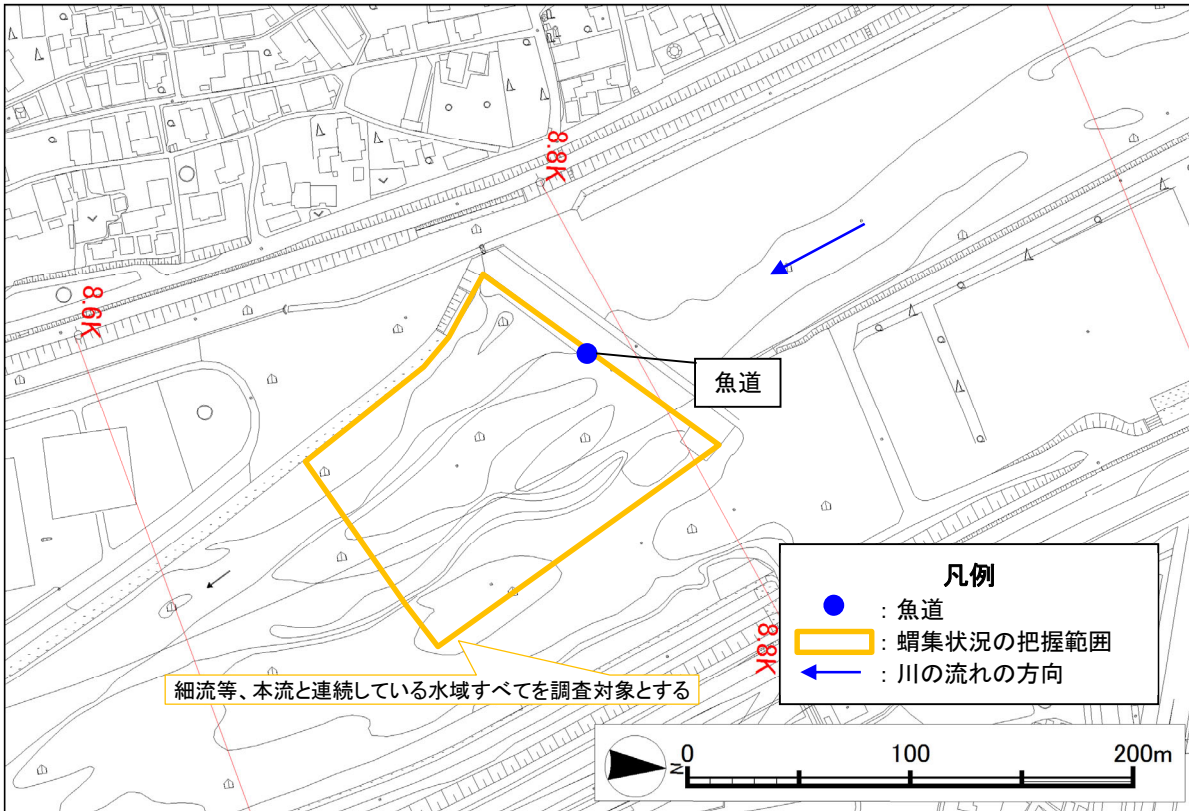


図 3.2-2 (3) 蛭集状況の把握範囲 [淀猪猪3 淀猪猪4 (高木井堰)]

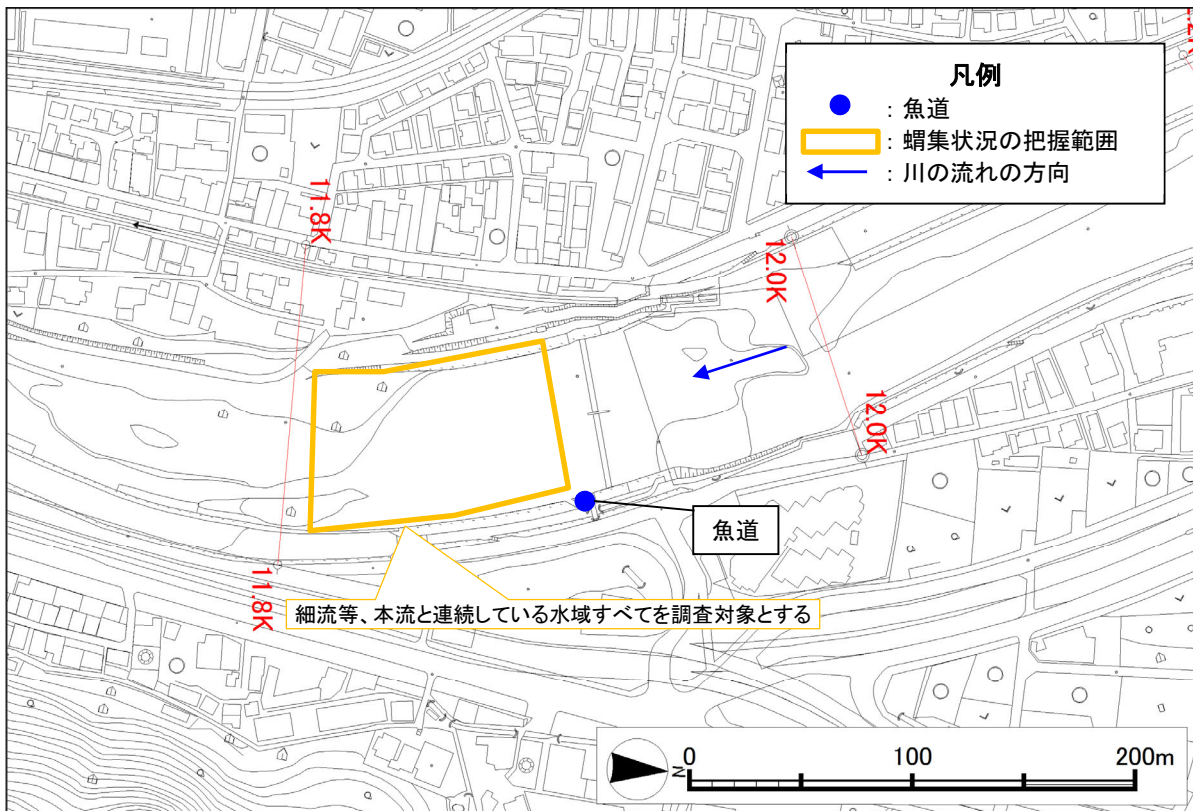


図 3.2-2 (4) 蛭集状況の把握範囲 [淀猪猪4 淀猪猪5 (加茂井堰)]

7 3.2.7 【4.8 その他の生物の記録】

8 過年度の調査において生息は確認されていないが、タナゴ類の産卵母貝となるイシガイ科の二枚貝
9 を確認した場合は確実に記録する。

3.2.8 【5.2 調査結果のとりまとめ】

マニュアルに定める他、「ワンド・たまり」、「縦断連続性」について、整理する。なお、とりまとめにあたっては、新たに追加された魚類 DNA 調査の結果も活用する。

3.2.8.1 ワンド・たまり

(1) 指標種

猪名川では、メダカやドジョウ、タナゴ類等の下流域の魚類は、かつては沖積平野の氾濫原に散在する一時的な水域間や本川との間を行き来して生息していた。また、主に水路に生息していたドジョウは、産卵のために新たに出現したたまりに侵入して産卵し、タナゴ類は二枚貝に産卵し、二枚貝は主に一時的な水域や本川との間の水路に生息していた。

現在、この一時的な水域の機能を維持できている箇所が、河道内に僅かに残されたワンド・たまり等の止水環境となっている。そのため、下流域の河川整備においては、ワンド・たまり等の止水環境の保全や再形成に努めることが重要である。

猪名川下流域の重要な環境である「ワンド・たまり」の機能を評価するための指標種を表 3.2-5 に示す。

ワンド・たまりの指標種は、過年度の調査において猪名川・藻川で確認された魚類の中から、ワンド・たまり等の止水環境一時的な水域や本川との間の水路を利用する在来種(以下、「ワンド・たまりの指標種」という。)を選定した。

過年度の調査において生息は確認されていないが、タナゴ類の産卵母貝となるイシガイ科の二枚貝についても、確認された場合は指標種として取り扱う。

表 3.2-5 ワンド・たまりの指標種(止水性魚類等)

No.	目名	科名	和名	学名	重要種								
					天然記念物	種の保存法	環境省 RL	海洋生物 RL	兵庫県 RL	大阪府 RL	伊丹市		
1	コイ目	コイ科	ゲンゴロウブナ	<i>Carassius cuvieri</i>			EN						
2			ギンブナ	<i>Carassius sp.</i>									
3			ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i>			NT		B	CR+EN			
4			ヌナムツ	<i>Candidia sieboldii</i>							VU		
5			モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>									
6			カフヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i>			NT		C	CR+EN			
7			タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>									
8			カマツカ	<i>Pseudogobio esocinus esocinus</i>							C		
9			コウライモロコ	<i>Squalidus chankaensis tsuchigae</i>							C		
10			イトモロコ	<i>Squalidus gracilis gracilis</i>							VU		
11			ドジョウ科	ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i>			DD		要注目	VU	B	
12				オオシマドジョウ	<i>Cobitis sp. BIWAE type A</i>							NT	
13				チュウガタスジシマドジョウ	<i>Cobitis striata striata</i>			VU				CR+EN	
14			ダツ目	メダカ科	ミナメダカ	<i>Oryzias latipes</i>			VU		要注目	VU	A
15			スズキ目	ドンコ科	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i>							C
16				ハゼ科	ウキゴリ	<i>Gymnogobius urotaenia</i>					C	NT	C
17					スミウキゴリ	<i>Gymnogobius petschiliensis</i>							
合計	3目	5科		17種	0種	0種	6種	0種	5種	10種	6種		

注)令和2年3月現在の確認種から整理したものであり、必要に応じて更新する。

※重要種

天然記念物：文化財保護法（昭和25年）・「大阪府文化財保護条例（昭和44年）」・「兵庫県文化財保護条例（昭和39年）」

種の保存法：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成4年法律第75号）」に基づき定められた希少野生動植物種

環境省 RL：環境省レッドリスト2017の公表について（環境省、平成29年3月）」に記載されている種

EX：絶滅種 EW：飼育・栽培下でのみ存続している種 CR：絶滅危惧ⅠA類 EN：絶滅危惧ⅠB類 VU：絶滅危惧Ⅱ類

NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群

兵庫県 RDB：「兵庫県版レッドリスト2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課、2017年10月）

Ex：絶滅 A：Aランク B：Bランク C：Cランク 要注目：要注目 要調査：要調査

大阪府 RL：「大阪府レッドリスト2014」（大阪府、2014年）」に記載されている種

EX：絶滅 CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足

海洋生物 RL：「環境省版海洋生物レッドリストの公表について（環境省、平成29年3月）」に記載されている種

伊丹市：「生物多様性いたみ戦略（伊丹市、2014）」「伊丹の貴重な自然」に記載のある種。

1
2 (2) 調査結果のとりまとめの補足

3 1) 物理環境

4 調査対象環境区分の設定の際に前回調査（魚類、底生動物、河川環境基図）と比較し、ワンド・た
5 まりが維持されているかを確認する。

6
7 2) 指標種

8 マニュアルに定められた各種様式の外、ワンド・たまりの指標種を整理した猪名川様式を作成する。
9 様式は全ての調査地区を対象に作成し、~~自然環境配慮事項としてワンド・たまりの保全を実施した~~
10 ~~猪名川中流区間（補足地区①）の全川における位置付けを明確に~~する。河川水辺の国勢調査以外のモ
11 ニタリングが実施されている調査地区では、合わせて経年変化を整理する。

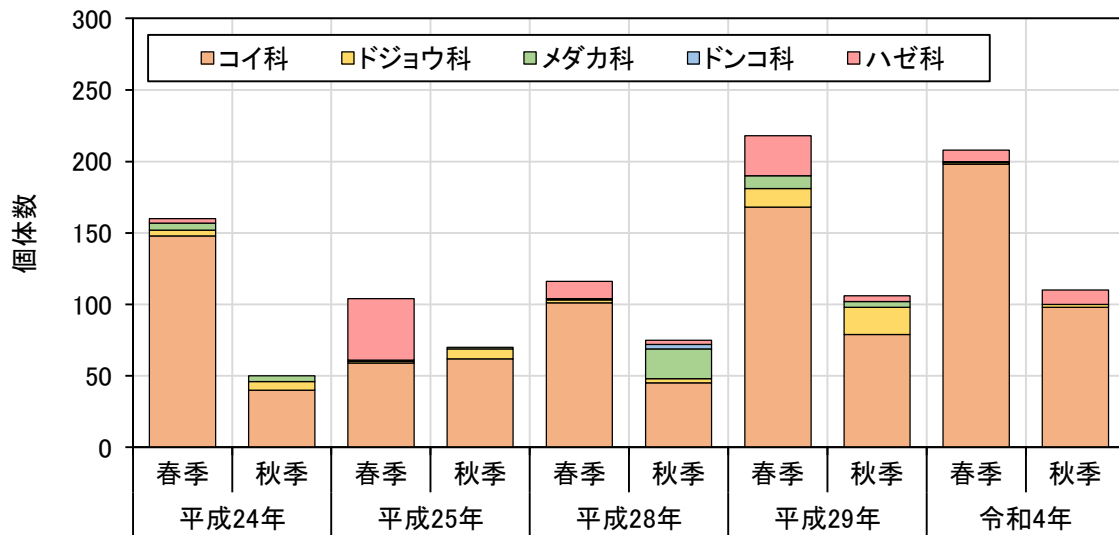
12
13 表 3.2-6 整理様式（魚類：ワンド・たまり、汽水域～淡水域）

様式名	様式番号
ワンド・たまりの を 指標種する止水性魚類の出現状況	猪名川様式(魚)-1
ワンド・たまりの を 指標種する止水性魚類の科別確認個体数の変遷	猪名川様式(魚)-2
イシガイ科の二枚貝の出現状況	猪名川様式(底)-4
汽水域～淡水域に生息する魚類の出現状況	猪名川様式(魚)-5
汽水域～淡水域に生息する底生動物の出現状況	猪名川様式(底)-5

14
15 表 3.2-7 ワンド・たまりの~~を~~指標種する止水性魚類の出現状況（猪名川(魚)-1）

No	目名	科名	和名	学名	H24		H25		H28		H29		R4		
					春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	
1	コイ目	コイ科	ゲンゴロウブナ	<i>Carassius cuvieri</i>					1					4	
2			ギンブナ	<i>Carassius sp.</i>	5	21	4	35	1	6	1	40	22		
-			フナ属	<i>Carassius sp.</i>	119	1	43	3	97	29	163	32	70	40	
3			ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i>											
4			ヌマムツ	<i>Candidia sieboldii</i>											
5			モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>			5	1	3		1		1	95	25
6			カワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i>											
7			タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>			15	2	4	12	1	4	6	2	8
8			カマツカ	<i>Pseudogobio esocinus</i>			6	8	5	9		8		8	18
9			イトモロコ	<i>Squalidus gracilis gracilis</i>											2
10			コウライモロコ	<i>Squalidus chankaensis tsuchigae</i>			3	3	2					1	1
-				スゴモロコ属	<i>Squalidus sp.</i>					2					
11			ダツ目	メダカ科	ドジョウ類	<i>Misgurnus anguillicaudatus sp.complex</i>	4	6	1	7	2	3	13	19	1
12	オオンマドジョウ	<i>Cobitis sp. BIWAE type A</i>													
13	チュウガタスジマドジョウ	<i>Cobitis striata striata</i>													
14	スズキ目	ドンコ科	ミナミメダカ	<i>Oryzias latipes</i>	5	4	1	1	1	21	9	4	1		
15	ハゼ科	ドジョウ科	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i>						3					
16			スミウキゴリ	<i>Gymnogobius petschiliensis</i>	3		5		12	2	28		7	3	
17			ウキゴリ	<i>Gymnogobius urotaenia</i>						1			4	1	7
-			ウキゴリ属	<i>Gymnogobius sp.</i>				38							
計	3目	5科	17種	合計個体数	160	50	104	70	116	75	218	106	208	110	
					210		174		191		324		318		
				合計種数	7種	7種	8種	6種	6種	9種	5種	6種	9種	9種	
				8種		8種		11種		7種		11種			
										11種					

16 備考：フナ属はギンブナ・ゲンゴロウブナ、スゴモロコ属はコウライモロコ・イトモロコ、ウキゴリ属はウキゴリ・スミウキゴリのいずれかである可能性が高いと考えられることから、表に含めた。
17 平成29年度、令和4年度の河川水辺の国勢調査（魚類）の結果は、補足地点①のうち、環境区分の早瀬1・ワンド・たまり・その他（平瀬）1・瀬1、漁法の投網・タモ網・定置網・セルびんの結果をそれぞれ抽出して使用した。
18



備考：フナ属はゲンブナ・ゲンゴロウブナ、スゴモロコ属はコウライモロコ・イトモロコ、ウキゴリ属はウキゴリ・スミウキゴリのいずれかかである可能性が高いと考えられることから、整理に含めた。
 平成29年度、令和4年度の河川水辺の国勢調査(魚類)の結果は、補足地点①のうち、環境区分の早瀬1・ワンドたまり・その他(平瀬)1・淵1、漁法の投網・タモ網・定置網・セルびんの結果をそれぞれ抽出して使用した。

1
2
3

図 3.2-3 ~~ワンド・たまりの~~を指標種する止水性魚類の科別確認個体数の変遷 (猪名川(魚)-2)

3.2.8.2 縦断連続性

(1) 指標種

簡易魚道（横断工作物本体に影響の無い範囲の魚道）の設計に当たり、回遊性の魚類やエビ・カニ類が遡上できるような流速や水深等の設計諸元を設定するため、猪名川において遊泳魚の代表となるアユ、底生魚の代表となるウキゴリおよびエビ・カニ類の代表となるモクズガニを設計対象種として設定し簡易魚道を設置した。

簡易魚道設置後は、簡易魚道の状況を把握するため、設計対象魚種を指標種としてモニタリングを実施してきたが、これまでの簡易魚道のモニタリングの結果、一定程度の改善が見られてきている。次の段階として留意すべきことは、魚類が移動し辿り着いた場所で、その種に適当な生息場所が確保できているのか、生息場所の拡大が見られているかどうかを確認していくことが重要である。

今後、河川縦断連続性のモニタリングにあたっては、アユ、ウキゴリ類（ウキゴリ、スミウキゴリ、ウキゴリ属）、モクズガニ、テナガエビ科及びヌマエビ科の 54種群を指標として整理する。

また、指標種ではないが、その他の着目する種として、汽水域～下流域に生息する魚類（ハゼ科魚類）や中流域に生息するドンコやカジカ類にも着目し、確認された場合には考察・評価で記載する。

表 3.2-8 縦断連続性の指標種

No.	指標種名	目名	科名	和名	学名	生活型
1	アユ	サケ目	アユ科	アユ	<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i>	回遊
2	ウキゴリ類	スズキ目	ハゼ科	スミウキゴリ	<i>Gymnogobius petschiliensis</i>	回遊
				ウキゴリ	<i>Gymnogobius urotaenia</i>	回遊
				ウキゴリ属	<i>Gymnogobius</i> sp.	回遊
3	ヌマエビ科	エビ目	ヌマエビ科	ヌマエビ科	Atyidae	回遊
4	テナガエビ科	エビ目	テナガエビ科	テナガエビ科	Palaemonidae	回遊
5	モクズガニ	エビ目	モクズガニ科	モクズガニ	<i>Eriocheir japonica</i>	回遊

備考1: ウキゴリ、スミウキゴリ、ウキゴリ属を合わせて指標種「ウキゴリ類」として扱う。

備考2: ヌマエビ科、テナガエビ科のうち、在来種で回遊性をもつものを指標種として扱う。

(2) 調査結果のとりまとめの補足

マニュアルに定められた各種様式の外、蝸集調査結果をとりまとめ、猪名川様式を作成する。

様式の作成は調査地区内に井堰を含む淀藻猪 1、補足地区②、~~淀猪猪 3~~淀猪猪 4、~~淀猪猪 4~~淀猪猪 5 を対象に作成する。

整理にあたっては、夏季調査時の河川の流況等を整理する。水位流量は「軍行橋水位流量観測所」の時刻水位を用いて整理する。また、水温は「軍行橋水質自動監視装置」の観測値を用いて整理する。

表 3.2-9 整理様式（魚類：縦断連続性）

様式名	様式番号
井堰直下流で確認された魚類等	猪名川様式(魚)-3
井堰直下における指標種の確認個体数	猪名川様式(魚)-4

※重要種ランク

天然記念物：文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）に基づき天然記念物に指定されている種。

種の保存法：絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年法律第 75 号）に基づき定められた希少野生動植物種

環境省 RL：「環境省レッドリスト 2020」（環境省、令和 2 年 3 月）に記載されている種および亜種。

EN：絶滅危惧 I B 類。I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種。

VU：絶滅危惧 II 類。絶滅の危険が増大している種。

NT：準絶滅危惧。存続基盤が脆弱な種。

DD：情報不足。評価するだけの情報が不足している種。

海洋生物 RL：「環境省版海洋生物レッドリスト」（環境省、平成 27 年）に記載されている種および亜種。

兵庫県 RL：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、2017 年）に記載されている種。

A：A ランク：絶滅危惧 I 類。兵庫県内において絶滅の危機に瀕している種など、緊急の保全対策、厳重な保全対策の必要な種。

B：B ランク：絶滅危惧 II 類。兵庫県内において絶滅の危険が増大している種など、極力生息環境や自生地等の保全が必要な種。

C：C ランク：準絶滅危惧。兵庫県内において存続基盤が脆弱な種。

要注：要注目種。最近減少の著しい種、優れた自然環境の指標となる種などの貴重種に準ずる種。

要調：要調査種。情報不足。兵庫県内での生息の実態がほとんどわからないことなどにより、現在の知見では貴重性の評価ができないが、今後の調査によっては貴重種となる可能性のある種。

大阪府 RL：「大阪府レッドリスト 2014」（大阪府、2014 年）に記載されている種。

CR+EN：絶滅危惧 I 類。大阪府内において絶滅の危機に瀕している種。

VU：絶滅危惧 II 類。大阪府内において絶滅の危険が増大している種。

NT：準絶滅危惧。大阪府内において存続基盤が脆弱な種。

DD：情報不足。評価するだけの情報が不足している種。

伊丹市：「伊丹市生物多様性みどりの基本計画 2021（伊丹市、2021 年）伊丹の貴重な野生生物リスト」に記載のある種。

A：A ランク。市内において消滅の危機に瀕している種。

B：B ランク。市内において消滅の危機が増大している種。

C：C ランク。市内において存続基盤が脆弱な種。

要注：要注目種。希少種に準ずる種。

要調：要調査種。市内において情報不足で評価が困難な種。

※外来種ランク

外来生物法：「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（平成 16 年法律第 78 号）、平成 25 年一部改正」で指定された種。

特定：特定外来生物

生態系被害防止：「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（環境省・農林水産省、平成 27 年）」で指定された種。

緊急(国外)：総合対策外来種のうち、緊急対策外来種(国外由来)

重点(国外)：総合対策外来種のうち、重点対策外来種(国外由来)

産業(国外)：産業管理外来種(国外由来)

兵庫県 BL：「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト）」（兵庫県、2010）で指定された種。

警戒：警戒種

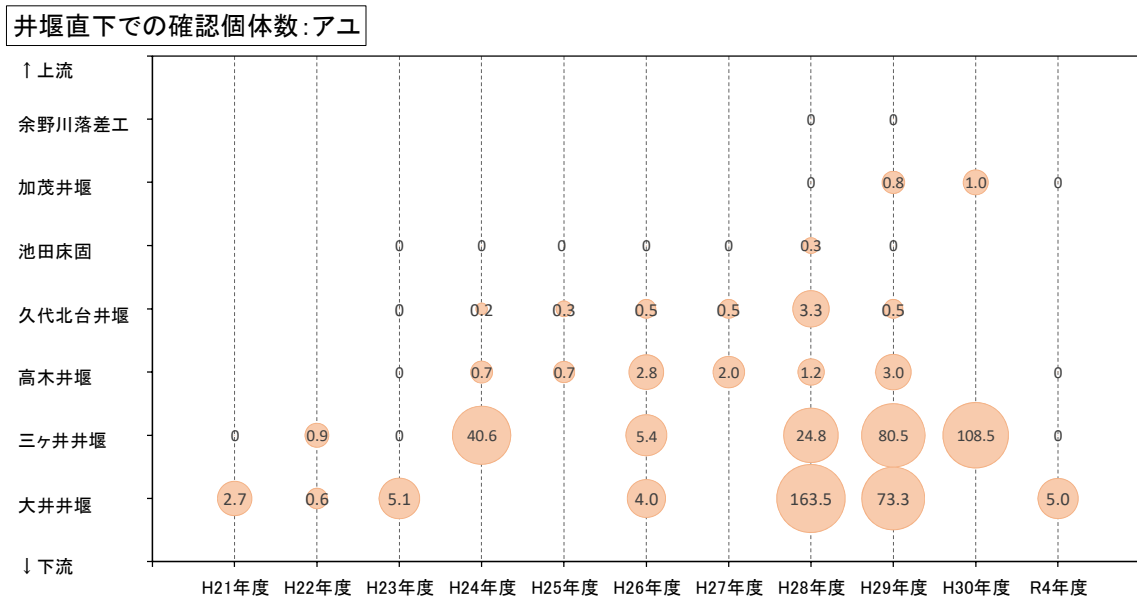
注意：注意種

伊丹市：「伊丹市生物多様性みどりの基本計画 2021（伊丹市、2021 年）地域の健全な生態系に重大な影響を及ぼす侵略的生物リスト」掲載種。

侵略：侵略的生物

その他：「外来種ハンドブック」（日本生態学会編、村上興正・鷲谷いづみ監修、2002）に記載された種および亜種。

国外：国外移動の外来種



2

3

図 3.2-4 井堰直下における指標種の確認個体数 (猪名川様式(魚)-4)

4

3.2.9 【6.2 魚類の生育と河川環境の関わりについて】

6

マニュアルに定める他、「ワンド・たまり」、「縦断連続性」及び「汽水域～淡水域」について、考察・評価を行う。

8

(1) ワンド・たまり

10

河道掘削工事等との関係を整理したうえ、指標種の確認状況の経年変化から河道掘削工事等の環境配慮の効果を検討・評価する。

12

(2) 縦断連続性

14

横断工作物の周辺状況(水筋や堰の状況)を踏まえた指標種の遡上状況やその他の着目する種の確認状況から、猪名川・藻川において河川の縦断連続性が維持されているかを考察・評価する。その際、河原環境の再生の取り組みによる瀬・淵の創出と、そのような環境を生息・繁殖環境として利用するアユをはじめとした魚類の生息状況との関係性にも着目する。

18

(3) 汽水域～淡水域

20

猪名川の自然環境の特徴は、猪名川・藻川において感潮区間の汽水環境から淡水域に連続していることであり、物理環境(潮間帯等の河床形状・形態等)を考慮する。

21

22

汽水域～淡水域に生息する魚類(トビハゼ、シロウオ、シラウオ等)に着目し、確認された場合には、考察・評価を行う。

23

24

また、汽水域～淡水域に生息する底生動物(クロベンケイガニ・モクズガニ・ヌマエビ科等)が確認された場合には考察・評価で記載する。

25

26

1 3.3 底生動物調査

2 3.3.1 補足の概要

3 河川水辺の国勢調査基本調査マニュアル「底生動物調査編」に対する補足を表 3.3-1 に示す。

4
5

表 3.3-1 補足の一覧(底生動物調査)

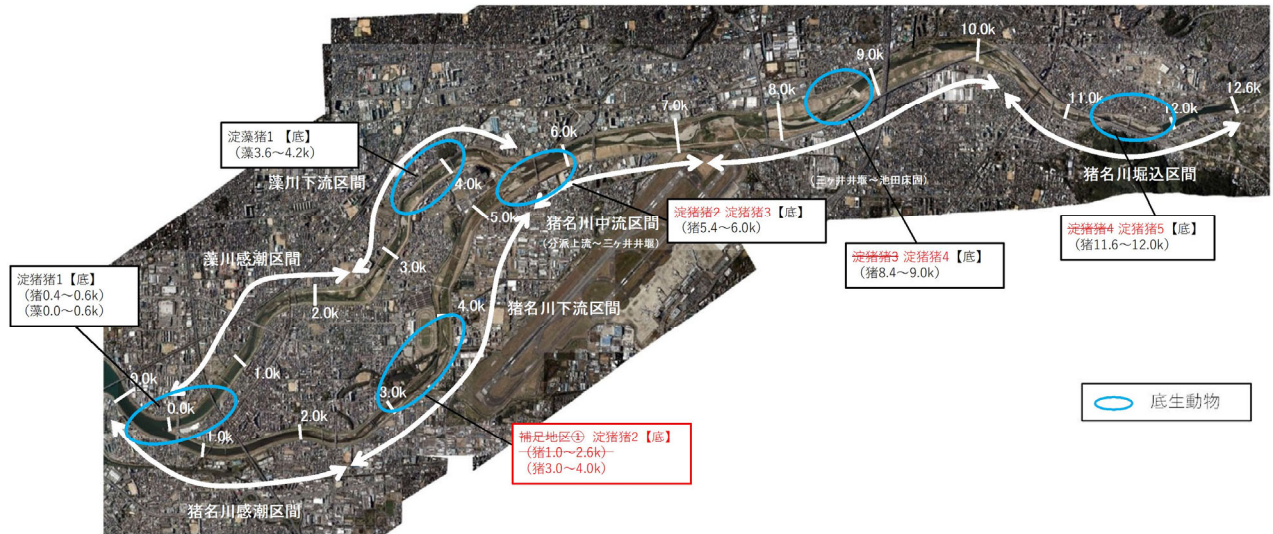
河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアルの目次構成			補足の概要	
章	節	項		
1. 調査概要	1.1	調査目的	-	
	1.2	調査対象	-	
	1.3	調査区域(調査対象河川区間)	-	
	1.4	調査内容	-	
	1.5	調査頻度	-	
	1.6	調査手順	-	
2. 事前調査	2.1	文献調査	-	
	2.2	聞き取り調査	-	
3. 現地調査 計画の策定	3.1	現地踏査	-	
	3.2	調査地区の設定	・調査地区の補足(補足地区①を追加)-	
	3.3	調査対象環境 区分の設定	3.3.1 淡水域 3.3.2 汽水域	・過年度成果を踏まえた設定を補足
		3.4	年間の調査時期及び回数 の設定	・全体調査計画に基づく調査時期を補足
	3.5	調査方法の選定	-	
	3.6	現地調査に際し留意すべき法令等	-	
	3.7	現地調査計画書の作成	・猪名川・藻川の課題等を踏まえた計画書作成を補足	
4. 現地調査	4.1	調査方法	4.1.1 淡水域 4.1.2 汽水域	-
		4.2	サンプルの整理	-
	4.3	サンプルの同定	-	
	4.4	現地調査結果 の記録	4.4.1 調査実施状況 4.4.2 調査環境	-
		4.5	移動中等における確認種	-
	4.6	その他の生物の記録	-	
	4.7	現地調査実施時の写真撮影	-	
	4.8	調査実施状況の整理	-	
	4.9	調査地区位置図の作成	-	
	5. 室内分析	5.1	ソーティング(生物の拾い出し)	-
5.2		同定	-	
5.3		計測	5.3.1 計数 5.3.2 計測	-
		5.4	集計の際の留意点	5.4.1 集計の際の留意点 5.4.2 整理番号の付け方
5.5			同定結果の整理	-
5.6		同定文献の整理	-	
5.7		標本の作製及び保管	5.7.1 標本の作製 5.7.2 標本情報の記録 5.7.3 標本の保管	-
		5.8	生物種の写真撮影	-
		5.9	写真の整理	-
5.10		現地調査の結果の概要の整理	-	
6. 調査結果 とりまとめ	6.1	調査結果の整理	-	
	6.2	調査結果のとりまとめ	・「湿地群落」、「ワンド・たまり」、「汽水域～淡水域」の整理を補足	
		6.2.1	重要種の経年確認状況の整理	-
		6.2.2	確認地区の整理	-
		6.2.3	調査地区別の確認状況の整理	-
		6.2.4	季節別調査地区別の確認状況の整理	-
		6.2.5	経年確認状況の整理	-
		6.2.6	種名の変更状況の整理	-
6.2.7	確認種目録の整理	-		
7. 考察・評価	7.1	現地調査確認種について	-	
	7.2	底生動物の生息と河川環境の関わりについて	・生育場として「湿地群落」、「ワンド・たまり」、「汽水域～淡水域」の考察を補足	
	7.3	今回の調査全般に対するアドバイザー等の所見	-	
8. 様式集			・猪名川様式を追加	

6
7
8

1 **3.3.2 【3.2 調査地区の設定】**

2 調査地区は全体調査計画の地点を基本とし、**補足地区④を追加**する。環境が変化し、調査に適さない
3 場合は適宜変更するものとする。

4



5

6

図 3.3-1 調査地区（底生動物）

7

8 **3.3.3 【3.3 調査対象環境区分の設定】**

9 マニュアルに従い設定する。設定に当たっては調査の継続性に配慮し、前回の底生動物調査や河川
10 環境基図作成業務を参考に適切に設定する。

11

12 **3.3.4 【3.4 年間の調査時期及び回数の設定】**

13 全体調査計画書に基づき表 3.3-2 の時期に実施する。

14

15 **表 3.3-2 調査時期（底生動物調査）**

季節	時期	設定根拠等
夏	7～8月	・猪名川の水生昆虫の主要な構成グループであるカゲロウ目、トビケラ目について、夏季から秋季に羽化する種の終齢幼虫が確認でき、同定が確実にできる。また、コウチュウ目やカメムシ目は成虫が出現し、同定が確実にできる。
早春	1～2月 12～2月	・水生昆虫の多くが幼虫あるいは蛹の時期であり、水中生活する。このため、最も多くの種が確認できる。春季に羽化する種については、終齢幼虫のため同定が確実にできる。 ・早春季調査（2～3月）は、同じ淀川水系の宇治川などに合わせて冬季調査として実施するとよい。

16

17 **3.3.5 【3.7 現地調査計画書の作成】**

18 マニュアルに定める他、自然環境配慮事項の実施状況や猪名川・藻川の課題を踏まえ、現地調査計
19 画書を作成する。

20

3.3.6 【6.2 調査結果のとりまとめ】

マニュアルに定める他、「湿地群落」、「ワンド・たまり」及び「汽水域～淡水域」について、整理する。

3.3.6.1 湿地群落

(1) 指標種

湿地群落の指標種は、羽化の時に植物を利用するトンボ目（ヤゴ類）とし、過年度の調査において猪名川・藻川で確認されたトンボ目（ヤゴ類）を選定した。また、トンボ目以外の底生動物の重要種も指標種とした。さらに、各指標種について、「平均スコア法※」に用いられる科レベルのスコアを用い、確認種の生態に留意した評価を実施する。

※ 水生生物による水質評価法マニュアル-日本版平均スコア法-（平成 29 年 3 月，環境省）

表 3.3-3(1) 湿地群落の指標種（ヤゴ類）

No.	綱名	目名	科名	和名	生息環境	河川水辺の国勢調査 実施年度							重要種	外来種	スコア				
						1995 H7	2000 H12	2005 H17	2008 H20	2013 H25	2018 H30	2023 R5							
1	昆虫綱	トンボ目(蜻蛉目)	イトトンボ科	コフキメイトトンボ	流水域・止水域	●											—		
2				アジアイトトンボ	流水域・止水域	●													—
3				アオモンイトトンボ	流水域・止水域	●	●	●											—
4				クロイトトンボ	流水域・止水域	●	●	●											—
5				セズジイトトンボ	止水域	●	●												—
6				ムスジイトトンボ	止水域	●													—
7				モノサシトンボ科	モノサシトンボ	止水域	●									●			—
8			カワトンボ科	ハグロトンボ	流水域	●	●	●	●						●	●		6	
9				ニホンカワトンボ	流水域										●	●		6	
10				アサヒナカワトンボ	流水域													6	
11			ヤンマ科	クロスジギンヤンマ	止水域			●							●			—	
12				ギンヤンマ	止水域			●							●			—	
13				コシボリヤンマ	流水域			●	●	●	●	●	●	●	●	●		—	
14			サナエトンボ科	ヤマサナエ	流水域										●			7	
15				キイロサナエ	流水域					●	●	●	●	●	●	●		7	
16				ダビドサナエ	流水域											●		7	
17				オナガサナエ	流水域				●	●	●	●	●	●	●	●		7	
18				アオサナエ	流水域				●	●	●	●	●	●	●	●		7	
19				コオニヤンマ	流水域・止水域	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		7	
20				オジロサナエ	流水域				●	●	●	●	●	●	●	●		7	
21			サナエトンボ科	サナエトンボ科	流水域または止水域または流水域・止水域								○					7	
22			トンボ科	コヤマトンボ	流水域・止水域	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			—	
23				コフキトンボ	流水域・止水域					●	●	●	●	●	●	●		—	
24				シオカラトンボ	止水域	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		—	
25				オシオカラトンボ	止水域										●	●		—	
26				ウスバキトンボ	流水域・止水域					●					●	●		—	
27				コシアキトンボ	流水域・止水域					●					●	●		—	
28				マユタテアカネ	止水域								●					—	
29	ナニワトンボ	止水域		●												—			
計	1綱	1目		7科	28種												—		
							11種	11種	10種	10種	10種	16種	16種	6種	0種		—		

※1) 出現種の種名および配列は、おもに「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和 5 年度生物リスト(水情報国土データ管理センター, 2023 年 12 月 5 日更新)」に従った。
 ※2) 表中のスコアは「平均スコア法」(水生生物による水質評価法マニュアル-日本版平均スコア法-, 平成 29 年 3 月, 環境省)に示された 1~10 の値であり、数が大きいほど河川環境が良好であることを示す。
 ※3) スコアが「-」となっているものは、上記文献にスコアが示されていない科であることを示す。
 ※4) サナエトンボ科を除く属止め、科止めの確認種は含めていない。

表 3.3-3(2)湿地群生の指標種（底生動物重要種）

No.	門名	綱名	目名	科名	和名	学名	重要種選定基準								スコア				
							天然記念物 法	種の保存 法	環境省RL 海洋生 物目	兵庫県RL	大阪府 目	伊丹市							
1	軟体動物 門	腹足綱	新生腹足目	カワニナ科	チリメンカワニナ	<i>Semistlosira reiniana</i>									要調査	8			
2				カワザンショウガイ科	ヒラドカワザンショウガイ	<i>Asiminea hiradoensis</i>						B	NT			-	-		
3				カワザンショウガイ	<i>Asiminea japonica</i>								NT				-	-	
4			汎有肺目	モリアラガイ科	コシダガヒモリアラガイ	<i>Galba cf. truncatula</i>				DD							3		
5					モリアラガイ	<i>Radix auriculata japonica</i>				NT					CR+E		3		
6					ヒラマキガイ科	ヒラマキガイ	<i>Gyraulus spirillus</i>				DD							2	
7					ヒラマキガイ	<i>Gyraulus tokyoensis</i>					DD							2	
8					ヒラマキガイモドキ	<i>Polynidius hemisphaerula</i>					NT							2	
9					カワコザラガイ科	カワコザラガイ	<i>Ferussia niponica</i>				CR+DD							2	
10			二枚貝綱	マルスタゲガイ目	シジミ科	ギマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>				NT		C	NT			-		
11					マシジミ	<i>Corbicula jeana</i>			VU		要注目		VU			-			
12	ヒメギマトカワゴカイ	<i>Helicostoma</i>								C	DD	DD			-				
13	環形動物 門	ゴカイ綱	ゴカイ目	ゴカイ科	ギマトカワゴカイ	<i>Helicostoma</i>					C	DD	DD		-				
14				ヒル綱	物蛭目	ヒラタビル科	ミドリビル	<i>Ancyrobdella smaragdina</i>				DD				2			
15	節足動物 門	軟甲綱	エビ目	ヌマエビ科	ミソノヌマエビ	<i>Caridina leucosticta</i>					B				-				
16					テナガエビ科	テナガエビ	<i>Macrathys tatanuensis</i>										要調査	-	
17					サワガニ科	サワガニ	<i>Geothelphusa dehaani</i>										B	8	
18					ベンケイガニ科	クロベンケイガニ	<i>Orsarma dehaani</i>							C				-	
19					昆虫綱	トンボ目(蜻蛉目)	イトトンボ科	セスジイトトンボ	<i>Paracercion hieroglyphicum</i>							NT			-
20								ムスジイトトンボ	<i>Paracercion melanotum</i>								要注目		要調査
21				サナエトンボ科			キイロサナエ	<i>Asiagomphus niveri</i>				NT		B	NT			7	
22				アオサナエ			<i>Nihonogomphus viridis</i>							C	NT		要調査	7	
23				トンボ科	コフキトンボ	<i>Deilephana</i>									NT		-		
24					ナニクトンボ	<i>Symptetrum gracile</i>				VU		C	VU		消滅		-		
25				カメシ目(半翅目)	コオイムシ科	コオイムシ	<i>Anosus japonicus</i>				NT				NT		要注目	-	
26						タイコウチ科	ヒメズカマキリ	<i>Ranatra unicolor</i>								NT		要注目	-
27						コウテウ目(鞘翅目)	ガムシ科	シジミガムシ	<i>Laccobius bedeli</i>				EN			要調査	DD		4
28				合計	3門	6綱	9目	19科	29種	0種	0種	15種	0種	13種	16種	8種	-	-	
29	ヒメシジミ科	ヒメシジミ	<i>Lentelmis gracilis</i>										VU		C	NT			8

※重要種

- ・文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）
- ・絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年法律第 75 号）
- ・環境省レッドリスト 2020」（環境省、令和 2 年）
- ・環境省版海洋生物レッドリスト（環境省、平成 27 年）
- ・兵庫県版レッドリスト 2014（兵庫県、2014）、兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）（兵庫県、2022）
- ・大阪府レッドリスト 2014（大阪府、2014 年）
- ・伊丹市生物多様性 みどりの基本計画 2021（伊丹市、2021 年）伊丹の貴重な野生生物リスト

1
2
3
4
5
6
7
8

(2) 調査結果のとりまとめの補足

マニュアルに定められた各種様式の外、ワンド・たまりの指標種を整理し、猪名川様式を作成する。

様式は全ての調査地区を対象に作成し、湿地群落が広くみられる猪名川下流区間（補足地区①）、藻川下流域（淀藻猪 1）の全川における位置付けを明確にする。河川水辺の国勢調査以外のモニタリングが実施されている調査地区では、合わせて経年変化を整理する。

表 3.3-4 整理様式（底生動物、魚類）

様式名	様式番号
湿地 <u>群落</u> を指標するトンボ目（ヤゴ類）の生息環境別確認種数の変遷	猪名川様式(底)-1
指標種（底生動物重要種）の出現状況の変遷	猪名川様式(底)-2
指標種（底生動物重要種）の水質スコア別の出現状況の変遷	猪名川様式(底)-3
イシガイ科二枚貝の出現状況	猪名川様式(底)-4
汽水域～淡水域に生息する底生動物の出現状況	猪名川様式(底)-5
汽水域～淡水域に生息する魚類の出現状況	猪名川様式(魚)-5

9

1

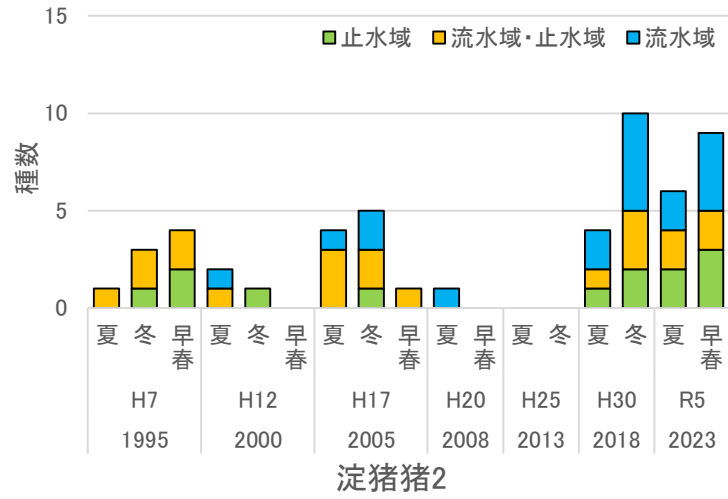


図 3.3-2 湿地群落を指標するトンボ目（ヤゴ類）の生息環境別確認種数の変遷（猪名川(底)-1）

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1 3.3.6.2 ワンド・たまり

2 タナゴ類の産卵母貝となるイシガイ科の二枚貝は、過年度の調査において生息は確認されていない
3 が、確認された場合はワンド・たまりの指標種として取り扱う。

4
5 3.3.7 【7.2 底生動物の生息と河川環境の関わりについて】

6 3.3.7.1 湿地群落

7 指標種の確認状況から、流水性・止水性等の生息環境、水質評価のスコア等、底生動物指標種・重
8 要種の生態特性を踏まえ、湿地群落の生息場としての機能を評価する。

9
10 3.3.7.2 ワンド・たまり

11 タナゴ類の産卵母貝となるイシガイ科の二枚貝は、過年度の調査において生息は確認されていない
12 が、確認された場合は確認状況を踏まえ、ワンド・たまりの生息場としての機能を評価する。

13
14 3.3.7.3 汽水域～淡水域

15 猪名川の自然環境の特徴は、猪名川・藻川において感潮区間の汽水環境から淡水域に連続している
16 ことであり、物理環境(潮間帯等の河床形状・形態等)を考慮する。

17 汽水域～淡水域に生息する底生動物(クロベンケイガニ・モクズガニ・ヌマエビ科等)に着目し、確
18 認された場合には考察・評価で記載する。

19 また、汽水域～淡水域に生息する魚類(トビハゼ、シロウオ、シラウオ等)が確認された場合には、
20 考察・評価を行う。

1 3.4 植物調査
2 3.4.1 補足の概要

3 河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアル「植物調査編」に対する補足を表 3.4-1 に示す。

5 表 3.4-1 補足の一覧（植物調査）

河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアルの目次構成			補足事項の概要		
章	節	項			
1. 調査概要	1.1	調査目的			
	1.2	調査対象	-		
	1.3	調査区域(調査対象河川区間)	-		
	1.4	調査内容	-		
	1.5	調査頻度	-		
	1.6	調査手順	-		
2. 事前調査	2.1	文献調査	-		
	2.2	聞き取り調査	-		
3. 現地調査計画の策定	3.1	現地踏査	-		
	3.2	調査地区の設定	・全体調査計画に基づく補足		
	3.3	年間の調査時期及び回数設定	・全体調査計画に基づく調査時期等を補足		
	3.4	現地調査に際し留意すべき法令等	-		
	3.5	現地調査計画書の作成	・猪名川・藻川の課題等を踏まえた計画書作成を補足		
4. 現地調査	4.1	調査方法	-		
	4.2	調査結果の記録	4.2.1	調査時の状況	-
			4.2.2	確認状況	-
	4.3	同定	4.3.1	同定に際しての留意事項	-
			4.3.2	同定上特に留意すべき種	-
			4.3.3	同定文献の整理	-
	4.4	写真撮影	4.4.1	写真撮影	-
			4.4.2	写真の整理	-
	4.5	標本の作製及び保管	4.5.1	標本の作製	-
			4.5.2	標本の保管	-
	4.6	移動中等における確認種の記録	-		
	4.7	その他の生物の記録	-		
	4.8	集計の際の留意点	4.8.1	集計の際の留意点	-
			4.8.2	整理番号の付け方	-
	4.9	調査概要の整理	4.9.1	調査実施状況の整理	-
			4.9.2	調査地区位置図の作成	-
			4.9.3	現地調査の結果の概要の整理	-
5. 調査結果とりまとめ	5.1	調査結果の整理	-		
	5.2	調査結果のとりまとめ	5.2.1	重要種の経年確認状況の整理	・「河原環境」の指標種の整理を補足
			5.2.2	確認状況の整理	-
			5.2.3	経年確認状況の整理	-
			5.2.4	種名の変更状況の整理	-
			5.2.5	植物確認種目録の整理	-
6. 考察・評価	6.1	現地調査確認種について	-		
	6.2	植物の生育と河川環境の関わりについて	・「河原環境」の考察・評価を追加		
	6.3	今回の調査全般に対するアドバイザー等の所見	-		
7. 様式集			・猪名川様式を追加		

6
7

3.4.2 【3.2 調査地区の設定】

全体調査計画を基本とする。環境が変化し調査に適さない場合は適宜変更するものとする。

3.4.3 【3.3 年間の調査時期及び回数の設定】

全体調査計画に基づき表 3.4-2 の時期に実施する。

表 3.4-2 調査時期（植物）

季節	時期	設定根拠等
春	5月 4～5月	・春季植物相の確認適期であり、特に河川に多く見られる春咲きのイネ科植物の同定が確実にできる。
秋	10月	・秋季植物相の確認適期であり、特に河川に多く見られる秋咲きのイネ科植物やカヤツリグサ科植物の同定が確実にできる。

なお、調査においてゴキヅルを確認した際には、ゴキヅルの茎や果実内で幼虫が育つアシナガモモブトスカシバが猪名川に生息している可能もあるため、本種の生息にも留意する。

3.4.4 【3.7 現地調査計画書の作成】

マニュアルに定める他、自然環境配慮事項の実施状況や猪名川・藻川の課題を踏まえ、現地調査計画書を作成する。

3.4.5 【5.2 現地調査結果のとりまとめ】

3.4.5.1 河原環境

(1) 指標種

河原環境の指標種である植物の一覧を表 3.4-3 に示す。指標種は過年度調査に猪名川で確認された植物の中から、主に河原環境に生育する在来種を選定した。

表 3.4-3 河原環境の指標種（植物）の一覧

No.	科名	種名	重要種	選定基準						
				天然記念物	種の保存法	環境省 RL	近畿 RDB	兵庫県 RL	大阪府 RL	伊丹市
1	マメ科	カワラケツメイ	○						NT	
2	バラ科	カワラサイコ	○				A	B	EX	B
3	ナデシコ科	カワラナデシコ	○							B
4	アカネ科	カワラマツバ								
5	キク科	カワラヨモギ								
合計	5科	5種	3	0	0	0	1	1	2	2

※重要種

天然記念物：文化財保護法（昭和 25 年）・「大阪府文化財保護条例（昭和 44 年）」・「兵庫県文化財保護条例（昭和 39 年）」
種の保存法：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年法律第 75 号）」に基づき定められた希少野生動植物種
環境省 RL：環境省レッドリスト 2025 の公表について（環境省、令和 7 年 3 月）」に記載されている種

EX：絶滅種 EW：飼育・栽培下でのみ存続している種 CR：絶滅危惧 I A 類 EN：絶滅危惧 I B 類 VU：絶滅危惧 II 類

NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群

近畿 RDB：「改訂・近畿地方の保護上重要な植物—レッドデータブック近畿 2001—」（レッドデータブック近畿研究会編 2001）に記載された種。

A：絶滅危惧種 A B：絶滅危惧種 B C：絶滅危惧種 C 準：準絶滅危惧種

情報不足：近畿での分布情報があるが、標本資料が確認できず、「情報不足」として扱った種類

兵庫県 RL2020：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年）

Ex：絶滅 A：A ランク B：B ランク C：C ランク 要注目：要注目 要調査：要調査

大阪府 RL：「大阪府レッドリスト 2014」（大阪府、2014 年）に記載されている種

EX：絶滅 CR+EN：絶滅危惧 I 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足

伊丹市：「生物多様性いたみ戦略（伊丹市、2014）」「伊丹の貴重な自然」に記載のある種。

A：A ランク B：B ランク C：C ランク 要注目：要注目種 要調査：要調査種

消滅：市内において野生で消滅したと判断される種。

1 (2) 調査結果のとりまとめの補足

2 マニュアルに定められた各種様式の外、河原環境の指標種を整理し、猪名川様式を作成する。

3 様式は全ての調査地区を対象に作成し、河原環境が広くみられる猪名川中流域（淀猪猪 2、淀猪猪
4 3) の全川における位置付けを明確にする。河川水辺の国勢調査以外のモニタリングが実施されてい
5 る調査地区では、合わせて経年変化を整理する。

7 表 3.4-4 整理様式（植物：河原環境）

様式名	様式番号
河原環境を指標する植物の変遷	猪名川様式(植)-1

9 表 3.4-5 河原環境を指標する植物の変遷（猪名川(植)-1）

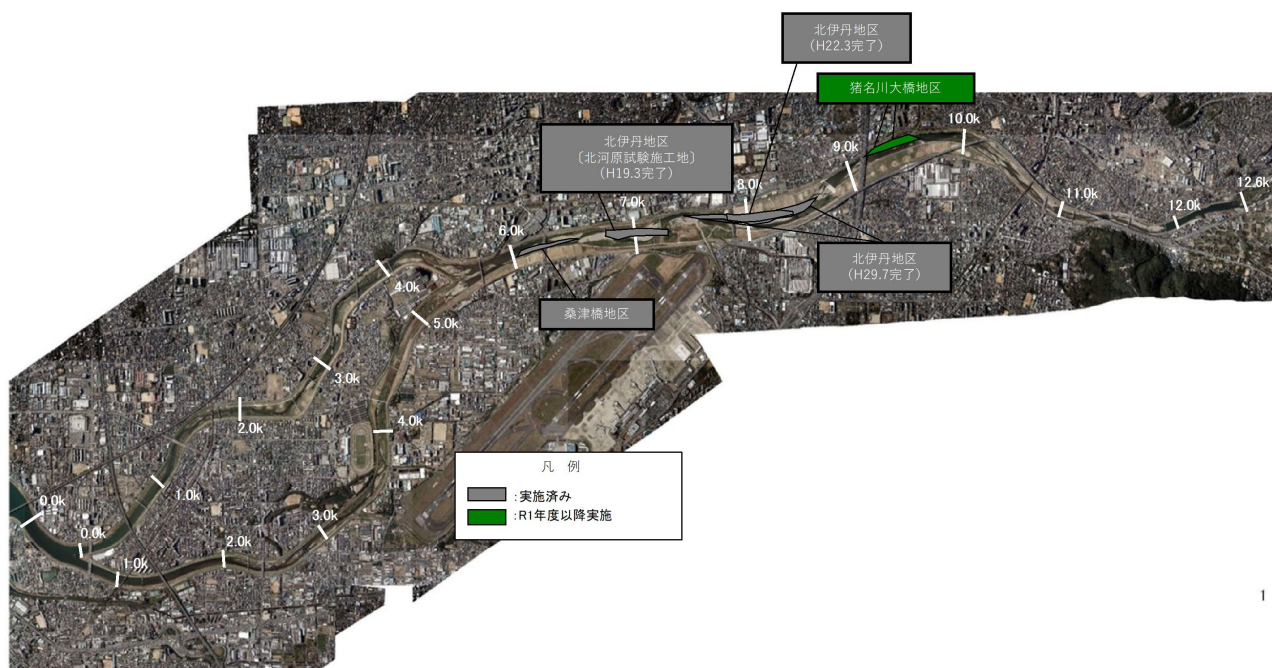
No	科名	和名	事前	事後		
			2013	2014	2016	2020
1	マメ	カワラケツメイ				
2	バラ	カワラサイコ				
3	ナデシコ	カワラナデシコ	○		○	○
4	アカネ	カワラマツバ	○	○	○	○
5	キク	カワラヨモギ				
計			2	1	2	2

11 3.4.6 【6.2 植物と河川環境の関わりについて】

12 3.4.6.1 河原環境

13 上記のとりまとめ結果を踏まえ、河原環境の植物の生育環境としての機能を考察・評価する。

14 また、河原環境再生事業実施箇所及びその周辺では、事業の効果についても考察・評価する。



16 図 3.4-1 河原環境再生事業実施箇所

1 3.5 鳥類調査
2 3.5.1 補足の概要

3 河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアル「鳥類調査編」に対する補足を表 3.5-1 に示す。

5 表 3.5-1 補足の一覧(鳥類調査)

河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアルの目次構成			補足の概要	
章	節	項		
1. 調査概要	1.1	調査目的		
	1.2	調査対象	-	
	1.3	調査区域(調査対象河川区間)	-	
	1.4	調査内容	-	
	1.5	調査頻度	-	
	1.6	調査手順	-	
2. 事前調査	2.1	文献調査	-	
	2.2	聞き取り調査	-	
3. 現地調査 計画の策定	3.1	現地踏査	-	
	3.2	調査箇所の設定	・全体調査計画に基づく補足	
	3.3	年間の調査時期及び回数の設定	・全体調査計画に基づく調査時期を補足	
	3.4	現地調査に際し留意すべき法令等	-	
	3.5	現地調査計画書の作成	・猪名川・藻川の課題等を踏まえた計画作成を補足	
4. 現地調査	4.1 現地調査の実 施	4.1.1	スポットセンサス法	-
		4.1.2	集団分布地調査の調査方法	-
	4.2 調査結果の記 録	4.2.1	調査環境	-
		4.2.2	調査結果	-
	4.3 同定	4.3.1	記録対象種	-
		4.3.2	亜種の記録	-
		4.3.3	記録が少ない種や新分布地、新繁殖地等の記録	-
		4.3.4	同定文献の整理	-
	4.4	写真撮影	4.4.1 写真撮影	-
			4.4.2 写真の整理	-
	4.5	移動中等における確認種の記録	-	
	4.6	その他の生物の記録	-	
	4.7	集計の際の留意点	-	
	4.8 調査概要の整 理	4.8.1	スポットセンサス法	-
			集団分布地調査	-
調査時期			-	
調査機器			-	
現地調査の結果の概要の整理			-	
5. 調査結果 とりまとめ	5.1	調査結果の整理	-	
	5.2 調査結果のと りまとめ	5.2.1	重要種の経年確認状況の整理	-
		5.2.2	集団分布地の経年確認状況の整理	-
		5.2.3	経年確認状況の整理	-
		5.2.4	種名の変更状況の整理	-
		5.2.5	河川の流程ごとの整理	-
		5.2.6	確認種目録の整理	-
6. 考察・評 価	6.1	現地調査確認種について	-	
	6.2	鳥類の生息と河川環境の関わりについて	・生息環境として「河原環境」の考察・評価を補足	
	6.3	今回の調査全般に対するアドバイザー等の所見	-	
7. 様式集			・猪名川様式を追加	

6
7

1 **3.5.2 【3.2 調査箇所の設定】**

2 全体調査計画を基本とする。環境が変化し調査に適さない場合は適宜変更するものとする。

3
4 **3.5.3 【3.3 年間の調査時期及び回数の設定】**

5 全体調査計画に基づき表 3.5-2 の時期に実施する。

6
7 **表 3.5-2 調査時期（鳥類）**

季節	時期	設定根拠等
繁殖期	5 月下旬～ 6 月	・渡りのための移動が完了し、調査地区における鳥類の繁殖状況が確認できる。テリトリー誇示のための囀り、雛へ給餌するための餌運び、巣立ち雛の確認などで繁殖状況を把握する。
越冬期	12 月下旬 ～1 月下旬	・越冬地に定住する時期であり、調査地区における鳥類の越冬状況が把握できる。猪名川直轄管理区間では、緩やかな流れを反映し全域でカモ類が越冬する。

8
9 **3.5.4 【3.5 現地調査計画書の作成】**

10 マニュアルに定める他、自然環境配慮事項の実施状況や猪名川・藻川の課題を踏まえ、現地調査計
11 画書を作成する。

12
13 **3.5.5 【5.2 調査結果のとりまとめ】**

14 **3.5.5.1 河原環境**

15 **(1) 指標種**

16 猪名川において着目すべき環境である「河原環境」の状況を把握するための指標種を表 3.5-3 に示
17 す。河原環境を餌場や繁殖地として利用しているシギ・チドリ類等を指標種とし、過年度の調査にお
18 いて猪名川・藻川で確認された鳥類から選定した。

1
2

表 3.5-3 河原環境の指標種（鳥類）の一覧

No.	目名	科名	種名	学名	重要種	選定基準								
						天然記念物	種の保存法	環境省 RL	近畿版 RDB	兵庫県 RDB	大阪府 RL	伊丹市		
1	チドリ目	チドリ科	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	○							NT	C	
2			イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	○					ランク3(繁殖)	B(繁殖)、要調査(通過)	VU	B	
3			シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	○			VU		ランク3(繁殖)	A(繁殖)、C(越冬)、要調査(通過)	VU	A	
4			ダイゼン	<i>Pluvialis squatarola</i>	○					ランク2(通過)	C(通過)	VU		
5		シギ科	ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>	○			NT		ランク3(越冬)	C(越冬・通過)		C	
6			アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>	○					ランク3(通過)	B(通過)	VU	B	
7			キアシシギ	<i>Heteroscelus brevipes</i>	○					ランク3(通過)		NT		
8			イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>	○					ランク2(繁殖)	C(繁殖)、要調査(通過)	NT	C	
9		カモメ科	コアシサシ	<i>Sterna albifrons</i>	○		II	VU		ランク2(繁殖)	B(繁殖)、要調査(通過)	CR+EN	A	
10		スズメ目	セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>									
11				ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	○					ランク4(繁殖)			
12				セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>									
計 2目4科12種					10	0	1	3	10		7	8	7	

3

※重要種

4

天然記念物：文化財保護法（昭和 25 年）・「大阪府文化財保護条例（昭和 44 年）」・「兵庫県文化財保護条例（昭和 39 年）」
種の保存法：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年法律第 75 号）」に基づき定められた希少野生動植物種

5

6

環境省 RL：環境省レッドリスト 2017 の公表について（環境省、平成 29 年 3 月）に記載されている種

7

EX：絶滅種 EW：飼育・栽培下でのみ存続している種 CR：絶滅危惧 I A 類 EN：絶滅危惧 I B 類 VU：絶滅危惧 II 類
NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群

8

近畿 RDB：「近畿地区・鳥類レッドデータブック-絶滅危惧種判定システムの開発（京都大学学術出版会、山岸哲監修、江崎保男・和田岳編著,2002 年）」に記載されている種

9

ランク 1：危機的絶滅危惧 ランク 2：絶滅危惧 ランク 3：準絶滅危惧 ランク 4：特に危険なし 要注目種：要注目種
兵庫県 RDB：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課,2017 年 10 月）

10

Ex：絶滅 A：A ランク B：B ランク C：C ランク 要注目：要注目 要調査：要調査

11

大阪府 RL：「大阪府レッドリスト 2014」（大阪府、2014 年）に記載されている種

12

EX：絶滅 CR+EN：絶滅危惧 I 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足

13

伊丹市：「生物多様性いたみ戦略（伊丹市、2014）「伊丹の貴重な自然」に記載のある種。

14

A：A ランク B：B ランク C：C ランク 要注目：要注目種 要調査：要調査種

15

消滅：市内において野生で消滅したと判断される種。

16

(2) 調査結果の整理の補足

17

マニュアルに定められた各種様式その他、代表区間ごとに河原環境の指標種を整理し、猪名川様式を作成する。様式は全ての代表区間を対象に作成し、河原環境が広くみられる猪名川中流域の全川における位置付けを明確にする。河川水辺の国勢調査以外のモニタリングが実施されている調査地区では、合わせて経年変化を整理する。

21

22

表 3.5-4 整理様式（鳥類：河原環境）

様式名	様式番号
河原環境を指標する鳥類の変遷	猪名川様式(鳥)-1

23

1

2

表 3.5-5 代表区間

河川	代表区間	距離	分割理由	重要な環境
猪 名 川	① 猪名川の感潮区間	0.0k~2.4k	猪名川の汽水域で分割	—
	② 猪名川下流区間 (分派下流)	2.4k~5.4k	猪名川の汽水域との境界とセグメント変化地点で分割	わんど・たまり 湿地群落
	③ 猪名川中流区間 (分派上流~三ヶ井井堰)	5.4k~7.2k	セグメント変化地点と河川特性 (井堰の連続性)の境界で分割	河原環境
	④ 猪名川中流区間 (三ヶ井井堰~池田床固)	7.2k~10.4k	河川特性(井堰の連続性)の境 界とセグメント変化地点で分割	河原環境
	⑤ 掘込み区間	10.4k~12.6k	掘込み区間で分割	—
藻 川	⑥ 藻川の感潮区間	0.0k~2.4k	猪名川の汽水域で分割	湿地群落 (ヨシ)
	⑦ 藻川下流区間	2.4k~4.4k	猪名川の汽水域との境界とセグメント変化地点で分割	湿地群落

3

4

5

表 3.5-6 河原環境を指標する鳥類の変遷(猪名川(鳥)-1)

No	目名	科名	和名	H25		H26		H28		
				春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	
1	チドリ目	チドリ科	コチドリ	○		○	○			
2			イカルチドリ		○			○		
3			シロチドリ							
4			ダイゼン							
5		シギ科	ハマシギ				○			
6			アオアシギ							
7			キアシギ							
8			イソシギ		○		○			
9		カモメ科	コアジサシ							
10		スズメ目	セキレイ科	キセキレイ				○		
11				ハクセキレイ	○	○	○	○	○	○
12				セグロセキレイ	○	○	○	○	○	○
合計				3	4	3	6	3	2	

6

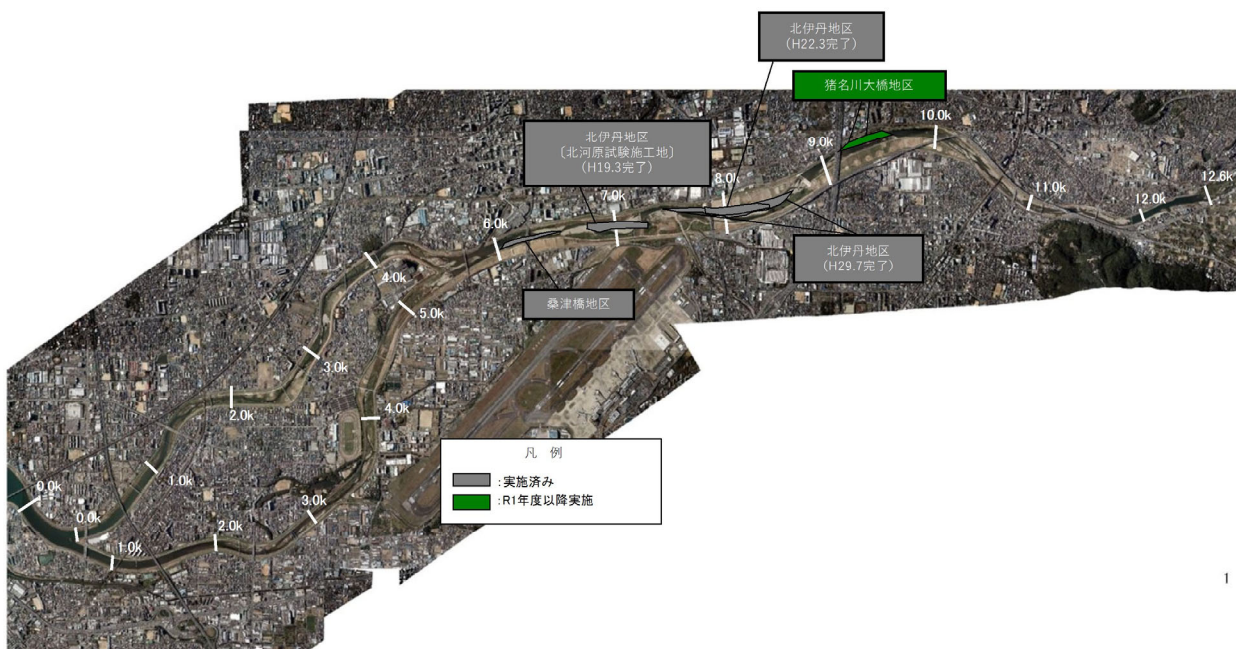
7

1 3.5.6 【6.2 鳥類の生息と河川環境の関わりについて】

2 3.5.6.1 河原環境

3 上記のとりまとめ結果を踏まえ、河原環境が鳥類の生息環境とし機能しているかを考察・評価する。

4 また、河原環境再生事業実施箇所及びその周辺では、事業の効果についても考察・評価する。



5 図 3.5-1 河原環境再生事業実施箇所（参考）

7

1 3.6 両生類・爬虫類・哺乳類調査

2 3.6.1 補足の概要

3 河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアル「両生類・爬虫類・哺乳類調査編」に対する補足を表 3.6-1
4 に示す。

5 表 3.6-1 補足の一覧(両生類・爬虫類・哺乳類調査)

河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアルの目次構成			補足の概要	
章	節	項		
1. 調査概要	1.1	調査目的	-	
	1.2	調査対象	-	
	1.3	調査区域(調査対象河川区間)	-	
	1.4	調査内容	-	
	1.5	調査頻度	-	
	1.6	調査手順	-	
2. 事前調査	2.1	文献調査	-	
	2.2	聞き取り調査	-	
3. 現地調査 計画の策定	3.1	現地踏査	-	
	3.2	調査地区の設定	・全体調査計画に基づく補足	
	3.3	年間の調査時期及び回数設定	・全体調査計画に基づく調査時期を補足	
	3.4	調査方法の選定	-	
	3.5	現地調査に際し留意すべき法令等	-	
	3.6	現地調査計画書の作成	・猪名川・藻川の課題等を踏まえた計画作成を補足	
4. 現地調査	4.1 調査方法	4.1.1	両生類	-
		4.1.2	爬虫類	-
		4.1.3	哺乳類	-
	4.2 調査結果の記録	4.2.1	調査環境	-
		4.2.2	調査結果	-
	4.3 同定	4.3.1	同定に際しての留意事項	-
		4.3.2	同定上特に留意すべき種	-
		4.3.3	同定文献の整理	-
	4.4	計測	-	
	4.5 写真撮影	4.5.1	写真撮影	-
		4.5.2	写真の整理	-
	4.6 標本の作製及び保管	4.6.1	標本の作製	-
		4.6.2	標本の保管	-
	4.7	移動中等における確認種の記録	-	
	4.8	その他の生物の記録	-	
	4.9 集計の際の留意点	4.9.1	集計の際の留意点	-
4.9.2		整理番号の付け方	-	
4.10 調査概要の整理	4.10.1	調査実施状況の整理	-	
	4.10.2	調査地区位置図の作成	-	
	4.10.3	現地調査の結果の概要の整理	-	
5. 調査結果 とりまとめ	5.1	調査結果の整理	-	
	5.2 調査結果のとりまとめ	5.2.1	重要種の経年確認状況の整理	・カヤネズミ(指標種)及びカエル類・カメ類、アカネズミの整理を補足
		5.2.2	確認状況の整理	-
		5.2.3	経年確認状況の整理	-
		5.2.4	種名変更状況の整理	-
		5.2.5	確認種目録の整理	-
6. 考察・評価	6.1	現地調査確認種について	-	
	6.2	両生類・爬虫類・哺乳類の生息と河川環境の関わりについて	・カヤネズミ(指標種)及びカエル類・カメ類、アカネズミと生育環境の考察を補足	
	6.3	今回の調査全般に対するアドバイザー等の所見	-	
7. 様式集			・猪名川様式を追加	

7

8

1 3.6.2 【3.2 調査地区の設定】

2 全体調査計画書を基本とする。環境が変化し調査に適さない場合は適宜変更するものとする。

4 3.6.3 【3.3 年間の調査時期及び回数の設定】

5 全体調査計画書に基づき表 3.6-2 の時期に実施する。

7 表 3.6-2 調査時期（両生類・爬虫類・哺乳類）

季節	時期	設定根拠等
春	5～6月	・気候が温暖で、小動物の活動が活発になる時期である。両生類は繁殖時期にあたり、鳴き声により生息確認できる。また、卵や幼生の確認により繁殖場所が把握できる。ネズミ類の春の繁殖期であることから、トラップ調査を実施する。
夏	7～8月	・カエル類の変態時期に当たり、幼体の調査地区の利用状況が把握できる。 カメ類は活動が活発になり、確認しやすい。カメ類およびヘビ類は活動が活発になり、確認しやすい。なお、猛暑のため小動物の活動が鈍る盛夏を避ける。 なお、エサが昆虫類等に食べられ、無効罠が発生することから、哺乳類の捕獲トラップ調査は実施しない。
秋	10～11月	・夏と比べ気候が温暖になり、小動物の活動が活発になる時期である。トカゲ類は幼体の出現で個体数が増し確認しやすい。ネズミ類の秋の繁殖期であることから、トラップ調査を実施する。

9 3.6.4 【3.6 現地調査計画書の作成】

10 マニュアルに定める他、自然環境配慮事項の実施状況や猪名川・藻川の課題を踏まえ、現地調査計画書を作成する。

13 3.6.5 【5.2 現地調査結果のとりまとめ】

14 3.6.5.1 カヤネズミ(指標種)

15 (1) 指標種の整理

16 ヨシ群落、ツルヨシ群集、オギ群落等の高茎のイネ科草本は、カヤネズミの営巣地として利用されることが期待される。そのため、カヤネズミを指標種として選定した。

18 なお、チガヤ群落については草丈が低く、また、堤防法面に主に分布することから、カヤネズミの営巣地としての利用は少ないと考えられる。

21 (2) 調査結果の整理の補足

22 マニュアルに定められた各種様式の外、ヨシ群落、ツルヨシ群集、オギ群落の指標種であるカヤネズミの確認状況を整理し、猪名川様式を作成する。様式は全ての調査地区を対象に作成する。河川水辺の国勢調査以外のモニタリングが実施されている調査地区では、合わせて経年変化を整理する。

26 表 3.6-3 整理様式（両生・爬虫・哺乳類）

様式名	様式番号
カヤネズミの営巣数の変遷	猪名川様式(哺)-1

表 3.6-4 カヤネズミの営巣数の変遷（猪名川様式(喃)-1）

項目	H23				H26				H28				R3				
	春季	初夏季	秋季	総計	春季	初夏季	秋季	総計	春季	初夏季	秋季	総計	春季	初夏季	秋季	総計	
カヤネズミの巣数	右岸	3	4	8	15	0	0	0	0	0	0	4	4	1	18	24	43
	左岸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	3	6	9

3.6.5.2 カエル類・カメ類及びアカネズミ

第 23 回猪名川自然環境委員会構造検討部会(令和 2 年 12 月 9 日)の助言により、以下を整理する。

(1) カエル類・カメ類

ワンド環境は両生類・爬虫類の産卵場所や成長場所となっていることから、ワンドに係るカエル類・カメ類について整理するとともに、外来種についても併せて整理する。

表 3.6-5 カエル類・カメ類の確認状況(猪名川様式(両・爬)-1)

(○は確認した場合、－は確認しなかった場合)

分類		種名	H5(1993)	H10(1998)	H15(2003)	H23(2011)	R03(2021)
両生類	カエル類	在来種	ニホンアマガエル	○	○	○	○
			トノサマガエル	○	○	○	○
			ツチガエル	○	○	－	－
			ヌマガエル	○	○	○	○
	外来種	ウシガエル	○	○	○	○	
爬虫類	カメ類	在来種	ニホンイシガメ	○	○	○	－
			ニホンスッポン	○	－	－	－
	外来種	クサガメ	○	○	○	○	
		ミシシippアカミミガメ	○	○	○	○	

(2) アカネズミ

アカネズミは日本で一番分布が広く優占種であり、どこの河川でも必ず見るのが特徴だが、猪名川ではかつては確認されたが、最近では確認されていないことから注目すべき種とする。

表 3.6-6 アカネズミの確認状況(猪名川様式(喃)-2)

(○は確認した場合、－は確認しなかった場合)

種名	H5(1993)	H10(1998)	H15(2003)	H23(2011)	R03(2021)
アカネズミ	○	－	－	－	－

注)H5 年の確認はネズミトラップによる捕獲

3.6.6 【6.2 両生類・爬虫類・哺乳類の生息と河川環境の関わりについて】

3.6.6.1 カヤネズミ

上記のとりまとめ結果を踏まえ、ヨシ群落、ツルヨシ群集、オギ群落がカヤネズミの生息環境とし機能しているかを考察・評価する。

1 3.6.6.2 カエル類・カメ類

2 上記のとりまとめ結果を踏まえ、ワンドとの関係を考察・評価する。

3

1 3.7 陸上昆虫類等調査

2 3.7.1 補足の概要

3 河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアル「陸上昆虫類等調査編」に対する補足を表 3.7-1 に示す。

4
5 表 3.7-1 補足の一覧(陸上昆虫類等調査)

河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアルの目次構成			補足の概要	
章	節	項		
1. 調査概要	1.1	調査目的	-	
	1.2	調査対象	-	
	1.3	調査区域(調査対象河川区間)	-	
	1.4	調査内容	-	
	1.5	調査頻度	-	
	1.6	調査手順	-	
2. 事前調査	2.1	文献調査	-	
	2.2	聞き取り調査	・NPO等へのヒメボタルの聞き取りを追加	
3. 現地調査 計画の策定	3.1	現地踏査	-	
	3.2	調査地区の設定	・全体調査計画に基づく補足	
	3.3	年間の調査時期及び回数	・全体調査計画に基づく調査時期を追加	
	3.4	調査方法の選定	-	
	3.5	現地調査に際し留意すべき法令等	-	
	3.6	現地調査計画書の作成	・猪名川・藻川の課題等を踏まえた計画書作成を補足	
4. 現地調査	4.1 調査方法	4.1.1	任意採集法	-
		4.1.2	ライトトラップ法(灯火採集法)	-
		4.1.3	ビットフォールトラップ法	-
		4.1.4	目撃法	-
		4.1.5	その他の採集法	-
	4.2 調査結果の記録	4.2.1	調査環境	-
		4.2.2	調査実施状況	-
	4.3 同定	4.3.1	同定に際しての留意事項	-
		4.3.2	同定上特に留意すべき種	-
		4.3.3	同定結果の整理	-
		4.3.4	同定文献の整理	-
	4.4 写真撮影	4.4.1	写真撮影	-
		4.4.2	写真の整理	-
	4.5 標本の作製及び保管	4.5.1	標本の作製	-
		4.5.2	標本の保管	-
	4.6	移動中等における確認種の記録	-	
	4.7	その他の生物の記録	-	
4.8 集計の際の留意点	4.8.1	集計の際の留意点	-	
	4.8.2	整理番号の付け方	-	
4.9 調査概要の整理	4.9.1	調査実施状況の整理	-	
	4.9.2	調査地区位置図の作成	-	
	4.9.3	現地調査結果の概要の整理	-	
5. 調査結果 とりまとめ	5.1	調査結果の整理	-	
	5.2 調査結果のとりまとめ		シロピアンジミの各調査地区における経年確認状況(確認地点や確認個体数の経年変化等)にも留意して結果を整理する。 また、調査地区における草刈りの実施状況及びミヤコグサの有無を記録することが望ましい(可能な範囲でミヤコグサ(在来)とセイヨウミヤコグサ(外来)を分けて記録)。	
		5.2.1	重要種の確認状況の整理	-
		5.2.2	確認状況の整理	-
		5.2.3	経年確認状況の整理	-
		5.2.4	種名の変更状況の整理	-
5.2.5	確認種目録の整理	-		
6. 考察・評価	6.1	現地調査確認種について	-	
	6.2	陸上昆虫類等の生息と河川環境の関わりについて	-	
	6.3	今回の調査全般に対するアドバイザー等の所見の整理	-	
7. 様式集			-	

6
7
8

1 3.7.2 【2.2 聞き取り調査】

2 NPO 等を対象に、ヒメボタルの生息状況の聞き取りを実施する。

4 3.7.3 【3.2 調査地区の設定】

5 全体調査計画を基本とする。環境が変化し調査に適さない場合は適宜変更するものとする。

7 3.7.4 【3.3 年間の調査時期及び回数の設定】

8 全体調査計画に基づき表 3.7-2 の時期に実施する。当初の全体調査計画の秋季の実施時期は 9～10
9 月となっていたが、当初の補足事項(案)では 10～11 月となっていた。令和 7 年度の全体調査計画で
10 は 9～11 月という期間が定められているため、留意する必要がある。

12 表 3.7-2 調査時期（陸上昆虫類）

季節	時期	設定根拠等
春	5～6 月	・春季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。開花する植物が多く、訪花性の昆虫類が多い。サナエトンボ類やヒメハナバチ類などはこの時期に出現する種が多い。
夏	7～8 月	・夏季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。梅雨明け後の時期で、陸上昆虫類等の活動が活発になる。カメムシ目はこの時期に出現する種が多い。
秋	10～11 月 9～11 月	・秋季に活動する代表的な陸上昆虫類等相が把握できる。盛夏が去り、夏眠していた種や秋季に成虫となる種（バッタ目やゴキムシ類等）が確認できる。

13
14 なお、調査においてゴキヅルを確認した際には、ゴキヅルの茎や果実内で幼虫が育つアシナガモモ
15 ブトスカシバが猪名川に生息している可能もあるため、本種の生息にも留意する。

17 3.7.5 【3.6 現地調査計画書の作成】

18 マニュアルに定める他、自然環境配慮事項の実施状況や猪名川・藻川の課題を踏まえ、現地調査計
19 画書を作成する。

21 3.7.6 【5.2 調査結果のとりまとめ】

22 シルビアシジミの各調査地区における経年確認状況（確認地点や確認個体数の経年変化等）にも留
23 意して結果を整理する。

24 また、調査地区における草刈りの実施状況及びミヤコグサの有無を記録することが望ましい（可能
25 な範囲でミヤコグサ（在来）とセイヨウミヤコグサ（外来）を分けて記録）。

1 3.8 河川環境基図作成調査

2 3.8.1 補足の概要

3 河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアル「河川環境基図作成調査編」に対する補足を表 3.8-1 に示
4 す。

6 表 3.8-1 補足の一覧(河川環境基図作成調査)

河川水辺の国勢調査 基本調査マニュアルの目次構成			補足の概要	
章	節	項		
1. 調査概要	1.1	調査目的	-	
	1.2	調査区域(調査対象河川区間)	-	
	1.3	調査内容	-	
	1.4	調査頻度	-	
	1.5	調査手順	-	
2. 事前調査	2.1	文献調査	-	
	2.2	聞き取り調査	-	
3. 現地調査 計画の策定	3.1	現地踏査	-	
	3.2	調査地区の設定	・全体調査計画に基づく補足	
	3.3	年間の調査時期及び回数設定	・マニュアルに基づく調査時期を追加	
	3.4	現地調査に際し留意すべき法令等	-	
	3.5	現地調査計画書の作成	・猪名川・藻川の課題等を踏まえた計画書作成を補足	
4. 現地調査	4.1 陸域調査	4.1.1	植生図作成調査	・群落区分の留意点を補足
		4.1.2	群落組成調査	-
		4.1.3	植生断面調査	-
		4.1.4	同定	-
		4.1.5	写真撮影	-
		4.1.6	標本の作製及び保管	-
		4.1.7	移動中等における確認種の記録	・河原環境の指標種を補足
		4.1.8	集計の際の留意点	-
	4.2 水域調査	4.2.1	判読素図の作成	-
		4.2.2	現地調査	-
		4.2.3	調査結果の記録	-
		4.2.4	写真撮影	-
	4.3	その他の生物の記録	-	
	4.4 調査概要の整理	4.4.1	調査実施状況の整理	-
		4.4.2	調査地区位置図の作成	-
4.4.3		現地調査の結果の概要の整理	-	
5. 調査結果 とりまとめ	5.1	調査結果の整理	-	
	5.2 調査結果のとりまとめ	5.2.1	河川環境基図	・「陸域環境(低水路)」、「水域環境」、「堤防植生(チガヤ群落)」の整理を補足
		5.2.2	重要種の確認状況の整理	-
		5.2.3	確認状況の整理	-
		5.2.4	植物確認種目録の整理	-
		5.2.5	1kmピッチ植生面積集計一覧表	-
		5.2.6	区間別植生面積変動状況一覧表	-
6. 考察・評価	6.1	現地調査確認植物群落等について	-	
	6.2	植生と河川環境の関わりについて	・「陸域環境(低水路)」、「水域環境」、「堤防植生(チガヤ群落)」の考察を補足	
	6.3	今回の調査全般に対するアドバイザー等の所見	-	
7. 様式集			・猪名川様式を追加	

7
8
9

1 3.8.2 【3.2 調査地区の設定】

2 全体調査計画を基本とする。環境が変化し調査に適さない場合は適宜変更するものとする。

4 3.8.3 【3.3 年間の調査時期及び回数】

5 調査時期及び回数はマニュアルに基づくものとし、陸域調査の現地調査は基本的に植物の色調に変
6 化の出やすい秋に1回以上実施する。水域調査についても、陸域調査と同時期で水位の安定した時期
7 に実施する。

9 3.8.4 【3.5 現地調査計画書の作成】

10 マニュアルに定める他、自然環境配慮事項の実施状況や猪名川・藻川の課題を踏まえ、現地調査計
11 画書を作成する。

13 3.8.5 【4.1.1 植生図作成調査】

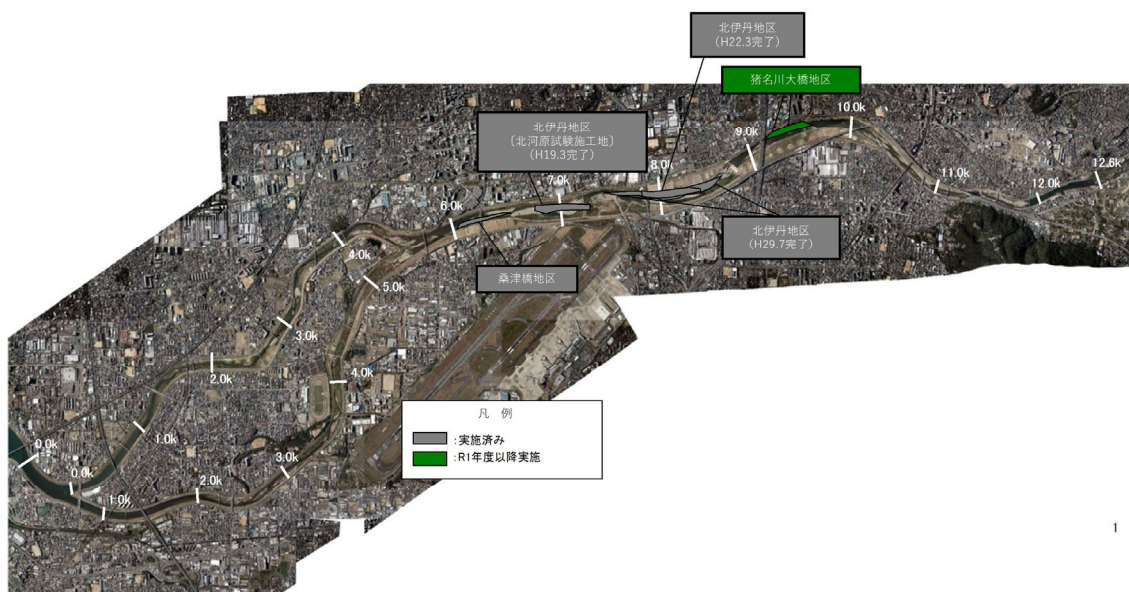
14 調査手法はマニュアルに定めるとおりとする。

15 ただし、植生図作成調査の群落区分において下記に留意すること。

- 16 ・ 河道掘削、河原環境再生工事等、低水路において工事により一時的に生じた裸地については「人
17 工裸地」ではなく「自然裸地」を使用する。

19 3.8.6 【4.1.7 移動中等における確認種の記録】

20 移動中等における確認種の記録として、マニュアルに記載した種の外、河原環境の指標種（植物）
21 （表 3.4-3）の生育が確認された場合は確実に記録する。猪名川の河原再生箇所では、河原環境の指標
22 種（植物）確認に留意して実施する。



24 25 26 27 28 29 図 3.8-1 、河原環境再生事業実施箇所（参考）

1 3.8.7 【5.2 調査結果のとりまとめ】

2 3.8.7.1 陸域環境(低水路)の整理

3 植生図作成調査において確認された植物群落を表 3.8-4 に示した生息場環境に集約し、表 3.8-3 に
 4 示す代表区間ごとに面積を集計する。集計は低水路を対象に実施する。重要な環境（河原環境、湿地
 5 群落、ヨシ群落・ツルヨシ群集・オギ群落）の変遷の他、水域・陸域の構成割合、外来植物群落等の構
 6 成割合についても整理し、変化状況を把握する。

7 また、「移動中における確認種の記録」による河原環境の指標となる植物（表 3.4-3）の確認種数を
 8 整理する。

10 表 3.8-2 整理様式（河川環境基図：陸域調査）

様式名	様式番号
生息場環境面積の変遷	猪名川様式(基)-1
河原環境面積の変遷	猪名川様式(基)-2
湿地 <u>群落</u> 面積の変遷	猪名川様式(基)-3
ヨシ群落・ツルヨシ群集・オギ群落面積の変遷	猪名川様式(基)-4
河原環境を指標する植物の変遷	猪名川様式(植)-1

11

12 表 3.8-3 猪名川直轄管理区間の各代表区間と重要な環境（代表的な河川環境景観）

河川	代表区間	距離	重要な環境
猪 名 川	① 猪名川の感潮区間	0.0k～2.4k	—
	② 猪名川下流区間（分派下流）	2.4k～5.4k	わんど・たまり、湿地 <u>群落</u>
	③ 猪名川中流区間（分派上流～三ヶ井井堰）	5.4k～7.2k	河原環境
	④ 猪名川中流区間（三ヶ井井堰～池田床固）	7.2k～10.4k	河原環境
	⑤ 掘込み区間	10.4k～12.6k	—
藻 川	⑥ 藻川の感潮区間	0.0k～2.4k	湿地 <u>群落</u> (ヨシ)
	⑦ 藻川下流区間	2.4k～4.4k	湿地 <u>群落</u>

13

14

表 3.8-4 植物群落と生息場環境の対応

地物コード	群落名	2004	2010	2015	2020	2025	生息場環境	色見本	群落区分
27000	自然裸地	○	○	○	○	○	自然裸地		自然裸地
6003	カワラモギーカワラハハコ群落	○					河原植物群落		多年生草本群落
65011	ヨモギーカワラマツハ群落	○					河原植物群落		多年生草本群落
5008	ミソハ群落	○	○	○	○	○	湿地群落		一年生草本群落
5009	ヤナギタテ群落	○	○	○	○	○	湿地群落		一年生草本群落
7001	ヨシ群落	○	○	○	○	○	湿地群落		多年生草本群落
80011	ツルヨシ群集	○	○	○	○	○	湿地群落		多年生草本群落
10001	ウキヤガラーマコモ群集	○	○				湿地群落		多年生草本群落
10004	ヒメガマ群落	○	○	○	○	○	湿地群落		多年生草本群落
10010	セリークサヨシ群集	○	○	○	○	○	湿地群落		多年生草本群落
10021	イ群落	○					湿地群落		多年生草本群落
5010	オオイトナデーオオクサキビ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		一年生草本群落
5014	ヒシパーエノコログサ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		一年生草本群落
5023	オヒシパーアキメシハ群集	○	○	○	○	○	その他草本群落		一年生草本群落
5025	カナムグラ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		一年生草本群落
6002	オオヨモギーオオイタドリ群落	○					その他草本群落		多年生草本群落
6004	ヨモギーメドハギ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
6005	イタドリ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
6006	カラムシ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
6010	ヤブガラシ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
7003	セイタカヨシ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
9001	オギ群落	○	○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
10003	カンガレイ群落	○					その他草本群落		多年生草本群落
10039	シバ群落		○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
10041	ススキ群落			○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
10042	チガヤ群落		○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
10060	シズダマ群落		○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
10501	チガヤーヒメジョオン群落	○					その他草本群落		多年生草本群落
10502	キウギシバ群落		○	○	○	○	その他草本群落		多年生草本群落
1003	ホザキノフサモ群落	○	○				その他草本群落		浮葉・沈水植物群落
1004	エビモ群落	○					その他草本群落		浮葉・沈水植物群落
1007	クロモ群落					○	その他草本群落		浮葉・沈水植物群落
2002	ヒシ群落	○					その他草本群落		浮葉・沈水植物群落
2501	コウキクサ群落				○	○	その他草本群落		浮葉・沈水植物群落
11002	ノコヤナギ群集	○	○	○	○	○	樹林		ヤナギ林
12005	タチヤナギ群集	○	○				樹林		ヤナギ林
12007	ジャヤナギーアカメヤナギ群集	○	○	○	○	○	樹林		ヤナギ林
12008	ジャヤナギーアカメヤナギ群集(低木林)	○	○	○	○	○	樹林		ヤナギ林
12015	オノエヤナギ群落				○	○	樹林		ヤナギ林
12017	カワヤナギ群落		○	○	○	○	樹林		ヤナギ林
12018	カワヤナギ群落(低木林)	○					樹林		ヤナギ林
12019	オオタチヤナギ群落				○	○	樹林		ヤナギ林
13006	クコ群落			○	○	○	樹林		低木林
13009	メダケ群集	○	○	○	○	○	樹林		低木林
13013	ネザサ群落				○	○	樹林		低木林
13015	クス群落	○	○	○	○	○	樹林		低木林
13016	ノイバラ群落	○	○	○	○	○	樹林		低木林
14023	アキニレ群落	○	○	○	○	○	樹林		樹林地
14024	アキニレ群落(低木林)				○	○	樹林		樹林地
14029	ヌルデーアカメガシワ群落	○					樹林		樹林地
14030	ヌルデーアカメガシワ群落(低木林)				○	○	樹林		樹林地
14031	ヤマグワ群落			○			樹林		樹林地
14035	ムクノキーエノキ群集	○	○	○	○	○	樹林		樹林地
18002	マダケ植林	○	○	○	○	○	樹林		樹林地
1001	オオカナダモ群落	○	○	○			外来種群落		浮葉・沈水植物群落
1020	ハゴロモモ群落	○	○				外来種群落		浮葉・沈水植物群落
3016	シトウ群落	○					外来種群落		浮葉・沈水植物群落
5012	オオオナモミ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		一年生草本群落
5013	コセンダングサ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		一年生草本群落
5015	ヒメムカヨモギーオオアレチノギク群落	○	○	○	○	○	外来種群落		一年生草本群落
5016	オオバクサ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		一年生草本群落
5036	ホシアサガオ群落	○					外来種群落		一年生草本群落
5040	シヤクチリソバ群落		○				外来種群落		一年生草本群落
5502	ノゲイトウ群落					○	外来種群落		一年生草本群落
6043	シヤクチリソバ群落					○	外来種群落		一年生草本群落
65011	シヤクチリソバ群落			○	○		外来種群落		一年生草本群落
6007	アレチハナガサ群落		○	○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
6008	セイタカアワダチソウ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
6020	イヌキイモーキイモ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
6502	オカタイトコム群落			○	○		外来種群落		多年生草本群落
10020	キシウスズメノヒエ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
10028	セイハンモロコシ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
10031	タチスズメノヒエ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
10032	シマスズメノヒエ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
10034	ネズミギ群落			○	○		外来種群落		多年生草本群落
10037	オニシノケグサ群落		○				外来種群落		多年生草本群落
10038	シナダレスズメガヤ群落	○	○	○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
10049	アメリカスズメノヒエ群落				○	○	外来種群落		多年生草本群落
10069	コゴメイ群落						外来種群落		多年生草本群落
10070	コゴメイ群落		○				外来種群落		多年生草本群落
10501	コゴメイ群落			○	○	○	外来種群落		多年生草本群落
10502	ヒロハホウキギク群落	○					外来種群落		多年生草本群落
12501	シダレヤナギーウツリユウヤナギ群落	○					外来種群落		ヤナギ林
13007	イタチハギ群落					○	外来種群落		低木林
13501	コノウゼンカズラ群落			○			外来種群落		低木林
13501	コノウゼンカズラ群落				○	○	外来種群落		低木林
14501	シナサワグルミ群落	○					外来種群落		樹林地
14502	ハリエンジュ群落	○					外来種群落		樹林地
14503	トウネズミモチーセンダン群落	○					外来種群落		樹林地
20004	シダレヤナギ植林		○	○	○	○	外来種群落		樹林地
20006	センダン群落		○	○	○	○	外来種群落		樹林地
20007	ナンキンハゼ群落			○	○	○	外来種群落		樹林地
20008	シンジュ群落		○	○			外来種群落		樹林地
20009	ハリエンジュ群落		○	○	○	○	外来種群落		樹林地
20010	植栽樹林群	○	○	○	○	○	外来種群落		樹林地
20017	シナサワグルミ植林		○	○	○	○	外来種群落		樹林地
5024	アレチウリ群落	○	○	○	○	○	外来種群落(特定外来種)		一年生草本群落
6044	ナガエツルノゲイトウ群落					○	外来種群落(特定外来種)		多年生草本群落
25003	人工裸地	○	○	○	○	○	人工裸地		その他

河原環境

ヨシ群落
ツルヨシ群集

湿地群落

オギ群落

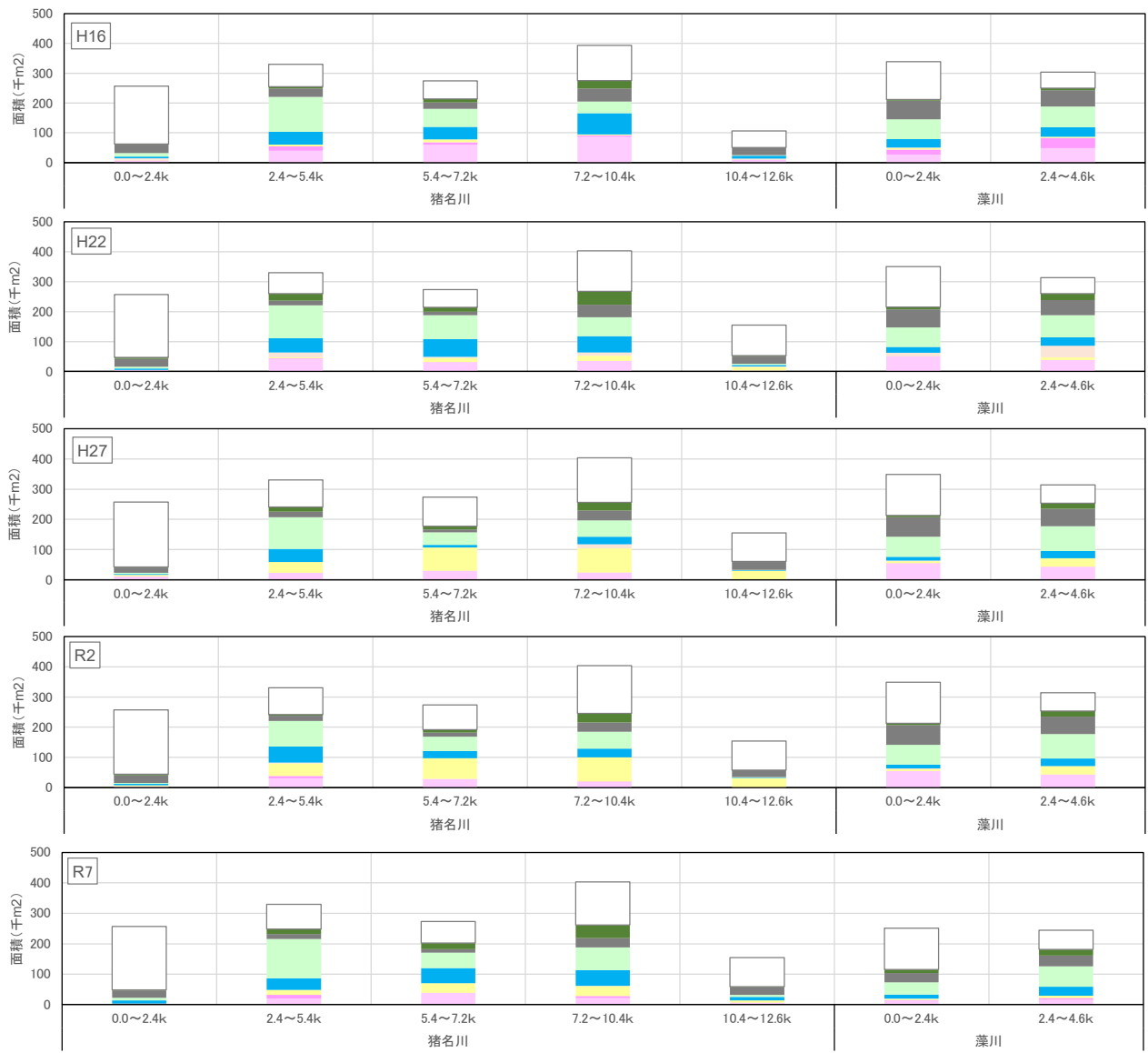
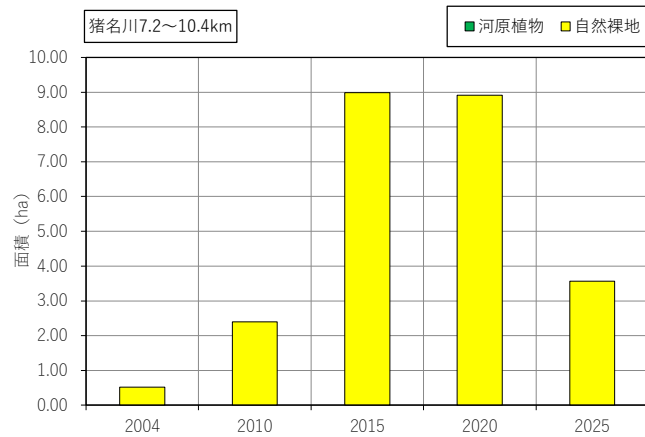


図 3.8-2 生息場環境の変遷（猪名川様式(基)-1）

1
2
3
4

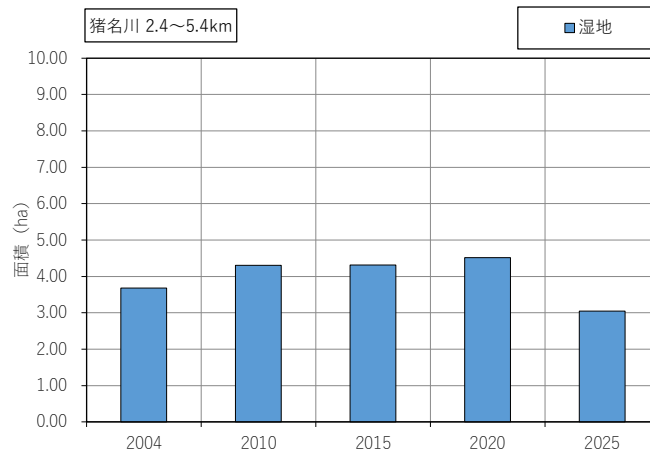
1



2

3

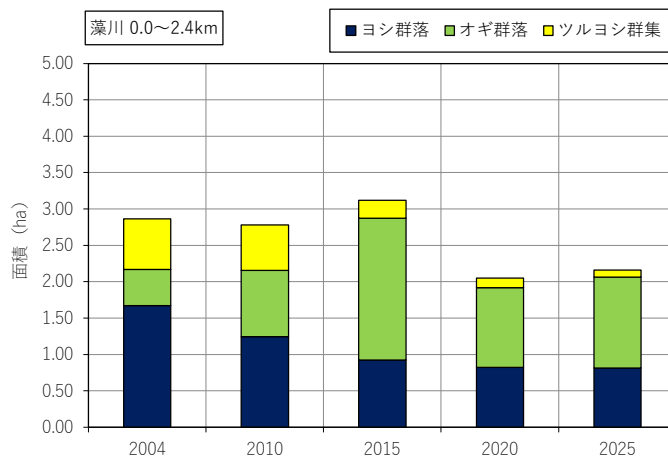
図 3.8-3 河原環境面積の変遷 (猪名川様式(基)-2)



4

5

図 3.8-4 湿地群落面積の変遷 (猪名川様式(基)-3)



6

7

8

図 3.8-5 ヨシ群落・ツルヨシ群集・オギ群落面積の変遷 (猪名川様式(基)-4)

1
2
3
4
5
6

3.8.7.2 水域環境の整理

水域環境調査結果を用い、表 3.8-3 に示す代表区間ごとに水域環境（早瀬、淵等）の面積を集計する。

表 3.8-5 整理様式（河川環境基図：陸域調査）

様式名	様式番号
水域環境面積の変遷	猪名川様式(基)-5
ワンド・たまり面積の変遷	猪名川様式(基)-6

7

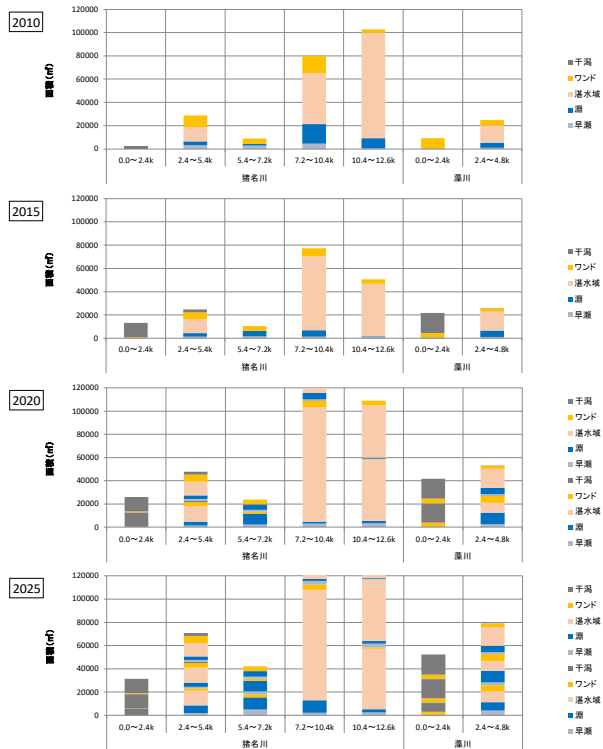


図 3.8-6 水域環境面積の変遷（猪名川様式(基)-5）

8
9
10

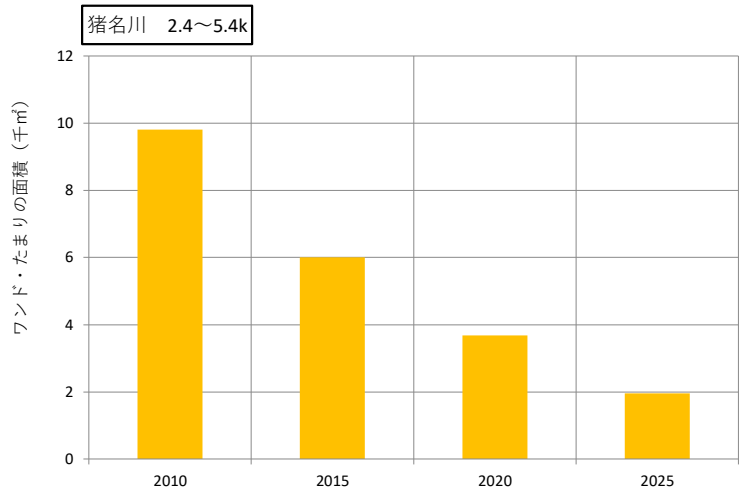


図 3.8-7 ワンド・たまり面積の変遷（猪名川様式(基)-6）

11
12
13

1

2 3.8.7.3 堤防植生(チガヤ群落)の整理

3 チガヤ群落は在来種であり、土壌緊縛力が強いことから表層崩壊防止効果が高く、種多様性に富み、
4 季節相が顕著である等の特徴がある。これらの特徴は堤防植生として望ましいと考えられることから、
5 チガヤ群落の状況に着目して堤防植生の現状を把握する。

6 維持管理での利用を想定し、堤防法面上の植物群落を 200m 間隔で面積を集計し、優占する植物群
7 落を表 3.8-7 に示す堤防植生区分と合わせ整理する。

8

9

表 3.8-6 整理様式(河川環境基図：堤防植生)

様式名	様式番号
堤防植生区分の変遷	猪名川様式(基)-7

10

11

表 3.8-7 堤防植生区分

堤防植生区分	群落名	基本分類
1 シバタイプ	シバ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
2 チガヤタイプ	チガヤ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
3 外来種タイプ	コセンダングサ群落	一年生草本群落
	ヒメムカシヨモギ-オオアレチノギク群落	一年生草本群落
	セイタカアワダチソウ群落	多年生広葉草本群落
	セダムsp.群落	多年生広葉草本群落
	セイハンモロコシ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
	タヌズメルヒメ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
	ネズミギ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
	オニウシノクダサ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
	シナダレスズメガヤ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
	アリカスズメルヒメ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
4 広葉タイプ	オオイスタデーオオササキ群落	一年生草本群落
	ヨモギ-ドハギ群落	多年生広葉草本群落
	イワリ群落	多年生広葉草本群落
	カラムシ群落	多年生広葉草本群落
	クズ群落	その他の低木林
5 オキ・ススキタイプ	オキ群落	単子葉植物群落(オキ群落)
	ススキ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
	オガルカヤ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
6 ツルヨシタイプ	ツルヨシ群集	単子葉植物群落(ツルヨシ群集)
7 在来イネ科タイプ	ヒシパーエノログサ群落	一年生草本群落
	オヒシパーアキメシバ群集	一年生草本群落
	ジュズダマ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
	ギョウギシバ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)
8 樹林	ジャヤナギ-アカメヤナギ群集	ヤナギ高木林
	ジャヤナギ-アカメヤナギ群集(低木林)	ヤナギ高木林
	メダケ群集	その他の低木林
	ノイバラ群落	その他の低木林
	アキニレ群落	落葉広葉樹林
	スルデーアカメガシワ群落(低木林)	落葉広葉樹林
	ムクノキ-エノキ群集	落葉広葉樹林
	マダケ植林	植林地(竹林)
	センダン群落	植林地(その他)
	植栽樹林群	植林地(その他)
	シナサワグルミ植林	植林地(その他)
	9 その他	果樹園
	畑地(畑地雑草群落)	畑

12

13

1 3.8.7.4 【6.2 植生と河川の関わりについて】

2 1) 陸域環境

3 湿地群落の面積変化から、猪名川・藻川下流域の重要な環境である湿地群落が維持されているかを
4 評価する。

5 河原環境（自然裸地）の面積変化及び、移動中に確認された河原環境の指標種（植物）の種数から、
6 猪名川中流域の重要な環境である河原環境が維持されているかを評価する。また、河原環境再生事業
7 実施箇所及びその周辺では、事業の効果についても評価する。

8 ヨシ群落・ツルヨシ群集・オギ群落の面積変化からこれらの群落が維持されているかを評価する。

9 陸域環境については、重要な環境だけではなく水域・陸域の割合、外来植物群落等の構成割合も併
10 せて総合的に評価する。

11
12 2) 水域環境

13 ワンド・たまりの面積変化から、工事後もワンド・たまりが維持されているかを確認し、保全対策
14 の効果を評価する。

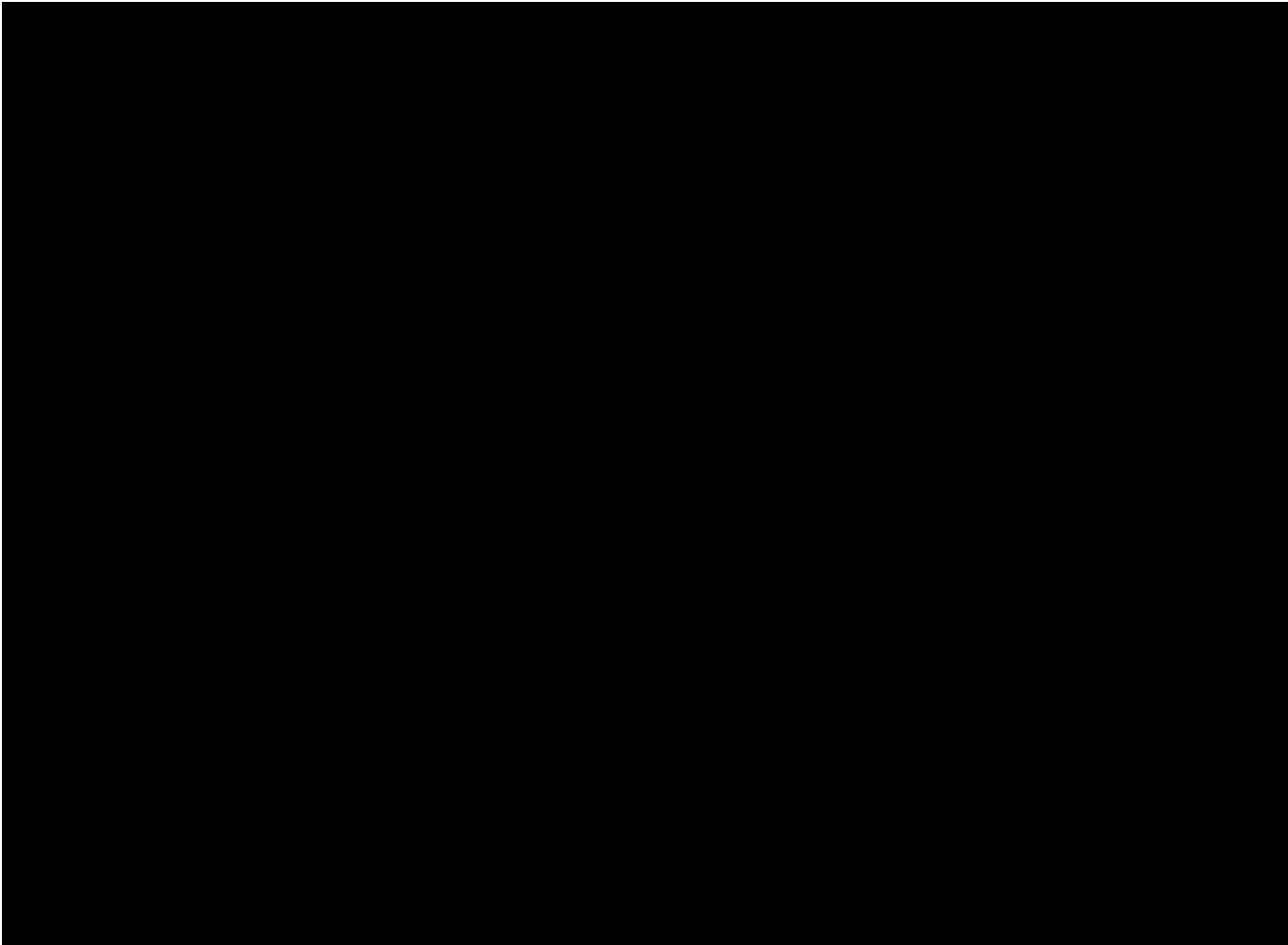
15
16 3) 堤防植生(チガヤ群落)

17 堤防植生の現況を、チガヤ群落、外来植物群落の変遷に着目して評価する。
18
19

1 **4. 参考【2.2 聞き取り調査の参考】**

2 マニュアルでは、聞き取り相手の選定に当たっては、「既往の聞き取り先を参考に、河川水辺の国勢
3 調査アドバイザー等学識経験者等の助言を得るようにし、調査区域周辺の実態に詳しい機関や個人(博
4 物館、動植物園、大学、専門家、学校の教員、各種愛好会・同好会等)を対象にする。」とされており
5 聞き取り調査実施時の参考として、愛好会・同好会等(以下「NPO 等」という。)の活動状況の例を以
6 下に示す。

7 なお、NPO 等の活動は、紹介する事例以外にも考えられることに留意すること。
8



9
10
11
12
13
14
15
16
17

18
19
20
21

1
2
3
4
5
6
7

8
9
10

11
12
13

1 **5. 様式**

2 猪名川整理様式を表 5-1 に示す。

3

4

表 5-1 猪名川整理様式

様式名	様式番号
ワンド・たまりの を 指標種する止水性魚類の出現状況	猪名川様式(魚)-1
ワンド・たまりの を 指標種する止水性魚類の科別確認個体数の変遷	猪名川様式(魚)-2
井堰直下流で確認された魚類等	猪名川様式(魚)-3
井堰直下における指標種の確認個体数	猪名川様式(魚)-4
汽水域～淡水域に生息する魚類の出現状況	猪名川様式(魚)-5
湿地群落を指標するトンボ目（ヤゴ類）の生息環境別確認種数の変遷	猪名川様式(底)-1
指標種（底生動物重要種）の出現状況の変遷	猪名川様式(底)-2
指標種（底生動物重要種）の水質スコア別の出現状況の変遷	猪名川様式(底)-3
イシガイ科二枚貝の出現状況	猪名川様式(底)-4
汽水域～淡水域に生息する底生動物の出現状況	猪名川様式(底)-5
河原環境を指標する植物の変遷	猪名川様式(植)-1
河原環境を指標する鳥類の変遷	猪名川様式(鳥)-1
カヤネズミの営巣数の変遷	猪名川様式(哺)-1
カエル類・カメ類の確認状況	猪名川様式(両・爬)-1
アカネズミの確認状況	猪名川様式(哺)-2
生息場環境面積の変遷	猪名川様式(基)-1
河原環境面積の変遷	猪名川様式(基)-2
湿地群落面積の変遷	猪名川様式(基)-3
ヨシ群落面積の変遷	猪名川様式(基)-4
水域環境面積の変遷	猪名川様式(基)-5
ワンド・たまり面積の変遷	猪名川様式(基)-6
堤防植生区分の変遷	猪名川様式(基)-7

5

6

猪名川様式(魚)-1

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2022

ワンド・たまりのを指標種する止水性魚類の出現状況 (猪名川(魚)-1)

No	目名	科名	和名	学名	H24		H25		H28		H29		R4			
					春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季		
1	コイ目	コイ科	ゲンゴロウブナ	<i>Carassius cuvieri</i>					1					4		
2			ギンブナ	<i>Carassius sp.</i>	5	21	4	35	1	6	1	40	22	4		
-			フナ属	<i>Carassius sp.</i>	119	1	43	3	97	29	163	32	70	40		
3			ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i>												
4			ヌマムツ	<i>Candidia sieboldii</i>												
5			モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>		5	1	3		1		1	95	25		
6			カワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i>												
7			タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>												
8			カマツカ	<i>Pseudogobio esocinus</i>		15	2	4	12		1	4	6	2	8	
9			イトモロコ	<i>Squalidus gracilis gracilis</i>		6	8	5	9		8			8	18	
10			コウライモロコ	<i>Squalidus chankaensis tsuchigae</i>		3	3	2						1	1	
-				スゴモロコ属	<i>Squalidus sp.</i>					2						
11				ドジョウ科	ドジョウ類	<i>Misgurnus anguillicaudatus sp.complex</i>	4	6	1	7	2	3	13	19	1	2
12					オオシマドジョウ	<i>Cobitis sp. BIWAE type A</i>										
13					チュウガタスジシマドジョウ	<i>Cobitis striata striata</i>										
14			ダツ目	メダカ科	ミナミメダカ	<i>Oryzias latipes</i>	5	4	1	1	1	21	9	4	1	
15			スズキ目	ドンコ科	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i>					3					
16	ハゼ科	スミウキゴリ			<i>Gymnogobius petschiliensis</i>	3		5		12	2	28		7		
17		ウキゴリ			<i>Gymnogobius urotaenia</i>						1		4	1		
-		ウキゴリ属			<i>Gymnogobius sp.</i>				38							
計	3目	5科	17種	合計個体数	160	50	104	70	116	75	218	106	208	110		
					210		174		191		324		318			
				合計種数	7種	7種	8種	6種	6種	9種	5種	6種	9種	9種		
					8種		8種		11種		7種		11種			

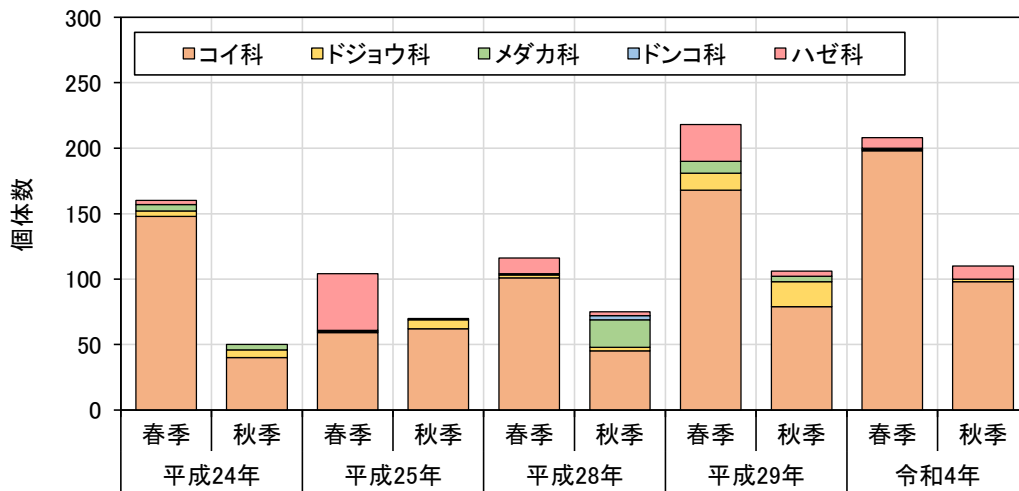
備考：フナ属はギンブナ・ゲンゴロウブナ、スゴモロコ属はコウライモロコ・イトモロコ、ウキゴリ属はウキゴリ・スミウキゴリのいずれかである可能性が高いと考えられることから、表に含めた。
 平成29年度、令和4年度の河川水辺の国勢調査(魚類)の結果は、補足地点①のうち、環境区分の早瀬1・ワンドたまり・その他(平瀬)1・瀬1、漁法の投網・タモ網・定置網・セルびんの結果をそれぞれ抽出して使用した。

猪名川様式(魚)-2

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2022

個体数

指標種	平成24年		平成25年		平成28年		平成29年		令和4年	
	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季
コイ科	148	40	59	62	101	45	168	79	198	98
ドジョウ科	4	6	1	7	2	3	13	19	1	2
メダカ科	5	4	1	1	1	21	9	4	1	0
ドンコ科	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0
ハゼ科	3	0	43	0	12	3	28	4	8	10

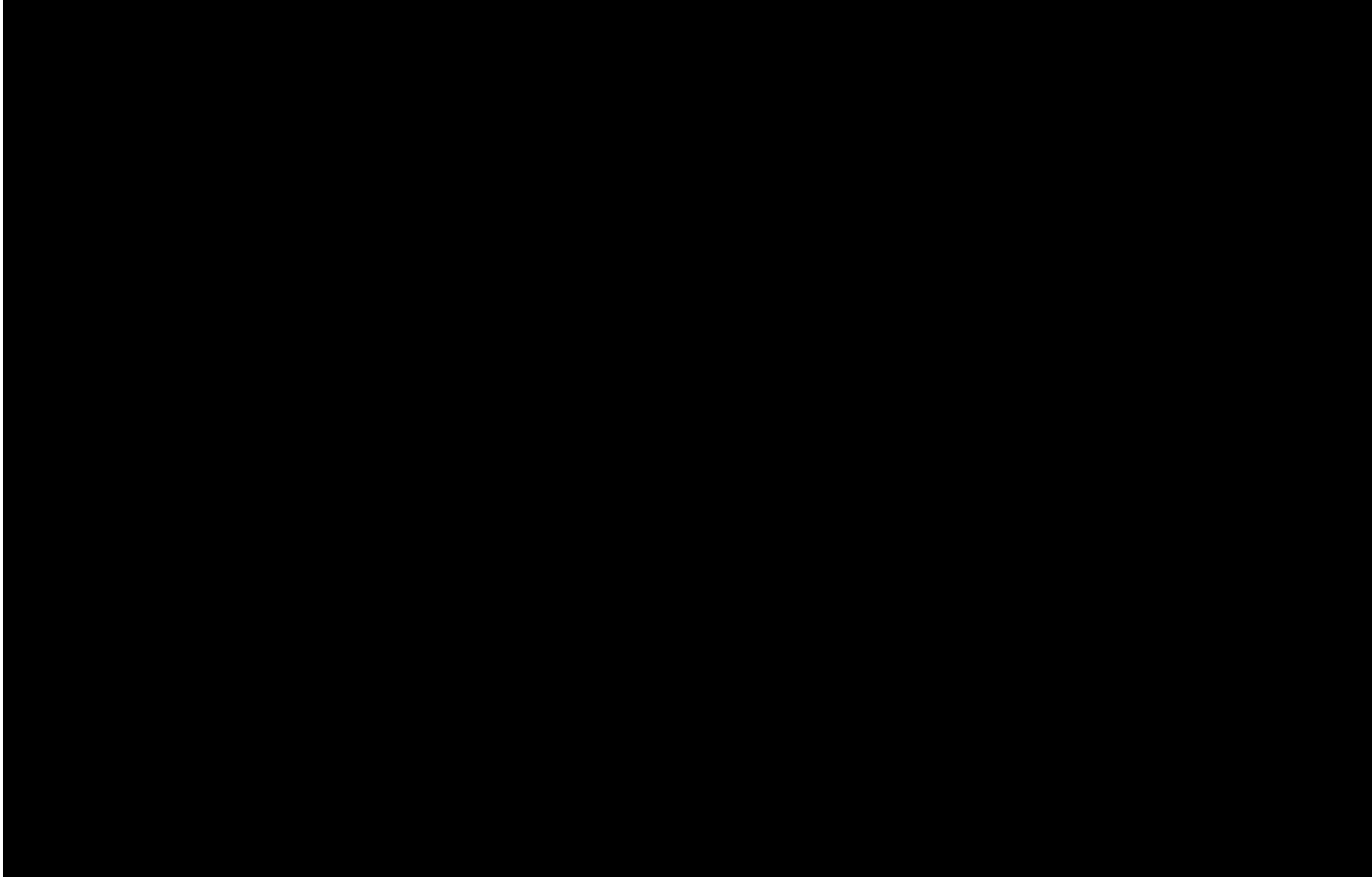


備考:フナ属はギンブナ・ゲンゴロウブナ、スゴモロコ属はコウライモロコ・イトモロコ、ウキゴリ属はウキゴリ・スミウキゴリのいずれかかである可能性が高いと考えられることから、整理に含めた。
平成29年度、令和4年度の河川水辺の国勢調査(魚類)の結果は、補足地点①のうち、環境区分の早瀬1・ワンドたまり・その他(平瀬)1・淵1、漁法の投網・タモ網・定置網・セルびんの結果をそれぞれ抽出して使用した。

ワンド・たまりのを指標種する止水性魚類の科別確認個体数の変遷 (猪名川(魚)-2)

猪名川様式(魚)-3

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2022



※重要種ランク

天然記念物：文化財保護法（昭和 25 年法律第 214 号）に基づき天然記念物に指定されている種。

種の保存法：絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成 4 年法律第 75 号）に基づき定められた希少野生動植物種

環境省 RL：「環境省レッドリスト 2020」（環境省、令和 2 年 3 月）に記載されている種および亜種。

EN：絶滅危惧ⅠB 類。ⅠA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種。

VU：絶滅危惧Ⅱ類。絶滅の危険が増大している種。

NT：準絶滅危惧。存続基盤が脆弱な種。

DD：情報不足。評価するだけの情報が不足している種。

海洋生物 RL：「環境省版海洋生物レッドリスト」（環境省、平成 27 年）に記載されている種および亜種。

兵庫県 RL：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、2017 年）に記載されている種。

A：A ランク：絶滅危惧Ⅰ類。兵庫県内において絶滅の危機に瀕している種など、緊急の保全対策、厳重な保全対策の必要な種。

B：B ランク：絶滅危惧Ⅱ類。兵庫県内において絶滅の危険が増大している種など、極力生息環境や自生地等の保全が必要な種。

C：C ランク：準絶滅危惧。兵庫県内において存続基盤が脆弱な種。

要注：要注目種。最近減少の著しい種、優れた自然環境の指標となる種などの貴重種に準ずる種。

要調：要調査種。情報不足。兵庫県内での生息の実態がほとんどわからないことなどにより、現在の知見では貴重性の評価ができないが、今後の調査によっては貴重種となる可能性のある種。

大阪府 RL：「大阪府レッドリスト 2014」（大阪府、2014 年）に記載されている種。

CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類。大阪府内において絶滅の危機に瀕している種。

VU：絶滅危惧Ⅱ類。大阪府内において絶滅の危険が増大している種。

NT：準絶滅危惧。大阪府内において存続基盤が脆弱な種。

DD：情報不足。評価するだけの情報が不足している種。

伊丹市：「伊丹市生物多様性みどりの基本計画 2021（伊丹市、2021 年）伊丹の貴重な野生生物リスト」に記載のある種。

A：A ランク。市内において消滅の危機に瀕している種。

B：B ランク。市内において消滅の危機が増大している種。

C：C ランク。市内において存続基盤が脆弱な種。

要注：要注目種。希少種に準ずる種。

要調：要調査種。市内において情報不足で評価が困難な種。

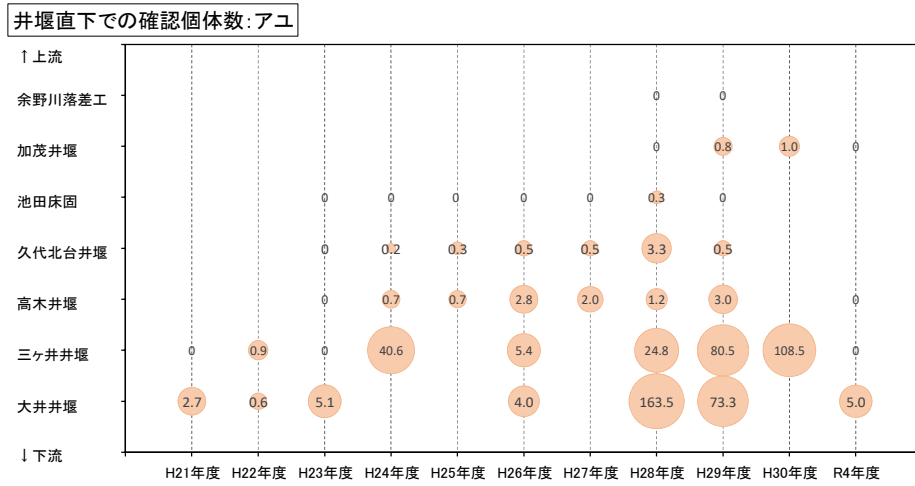
1

2

猪名川様式(魚)-4

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2022

3



注) 円の大きさと円の内側の数値は、井堰直下における潜水目視+投網による調査1回あたりの確認個体数を表す。

4

井堰直下における指標種の確認個体数

5

※円の大きさと数値は、井堰直下における潜水目視+投網による調査1回あたりの平均個体数を示す。

6

7

8

1
2
3
4
5
6
7

猪名川様式(魚)-5

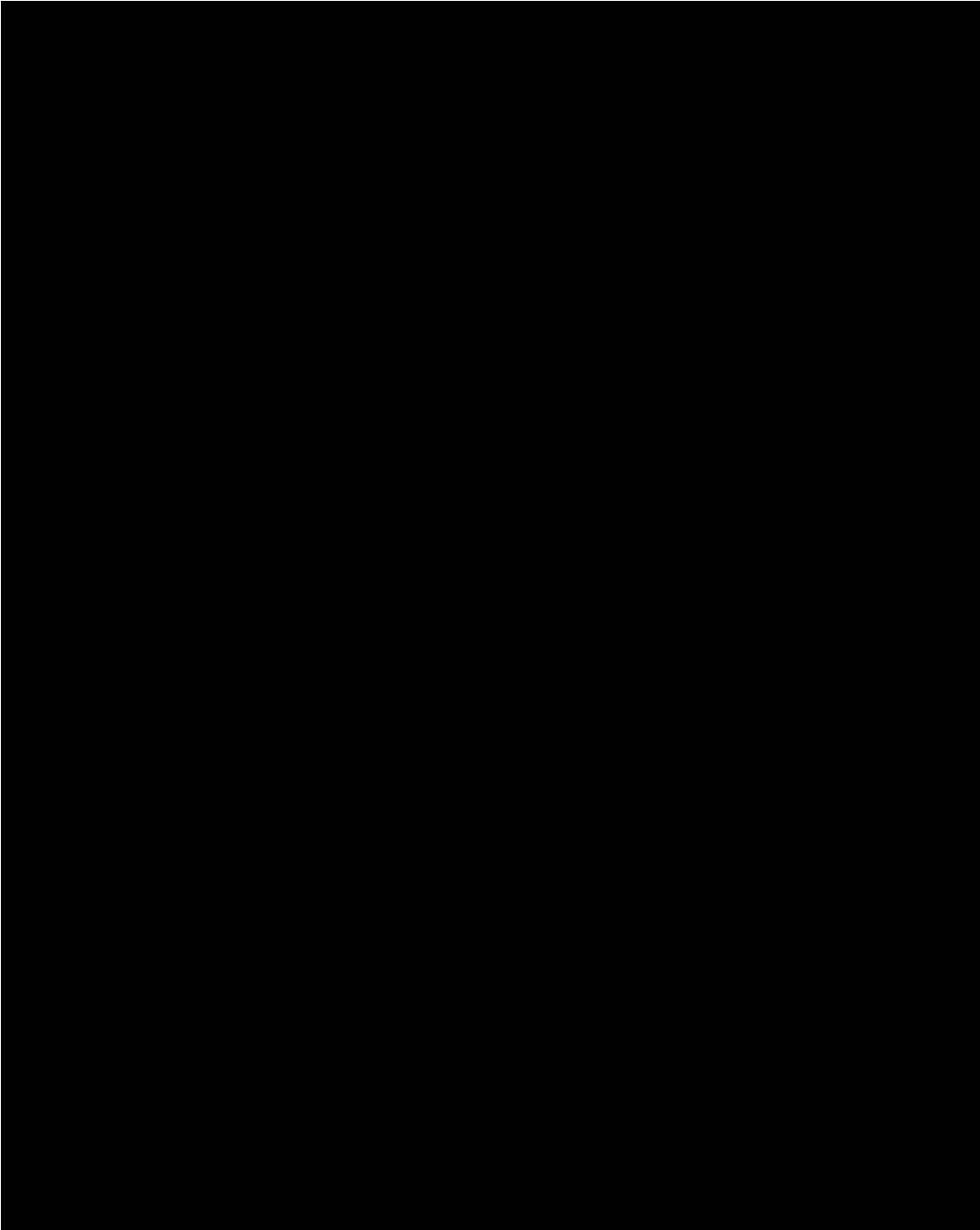
地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2023

汽水域～淡水域に生息する魚類(トビハゼ、シロウオ、シラウオ等)は2023年には確認されなかった。確認された場合には、出現状況を整理する。

1
2
3
4
5
6
7
8
9

猪名川様式(底)-2

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2023



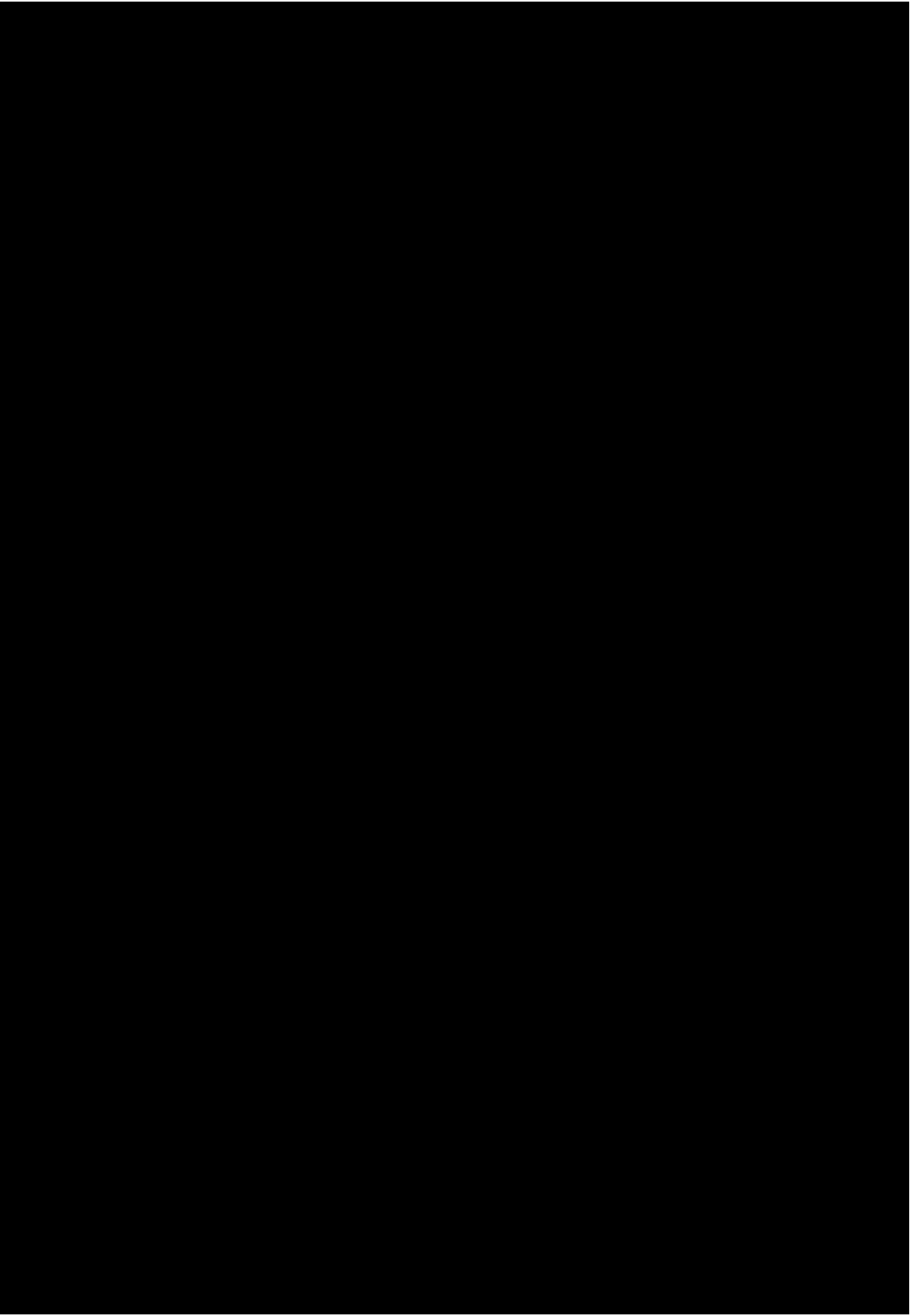
1

2

3

4

5



1
2
3

猪名川様式(底)-3

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2023



底生動物重要種の水質スコア別の出現状況の変遷

4
5
6

1
2
3
4
5
6
7

猪名川様式(底)-4

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2023

タナゴ類の産卵母貝となるイシガイ科の二枚貝は、R5年度の調査において生息は確認されていないが、確認された場合は確認状況を踏まえ、ワンド・たまりの生息場としての機能を評価する。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

猪名川様式(底)-5

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2023

汽水域～淡水域に生息する底生動物(クロベンケイガニ・モクズガニ・ヌマエビ科等)の出現状況を整理を記載する。

1
2
3
4
5
6

猪名川様式(植)-1

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2025

河原環境を指標する植物の変遷

No	科名	和名	事前	事後		
			2013	2014	2016	2020
1	マメ	カワラケツメイ				
2	バラ	カワラサイコ				
3	ナデシコ	カワラナデシコ	○		○	○
4	アカネ	カワラマツバ	○	○	○	○
5	キク	カワラヨモギ				
計			2	1	2	2

1
2
3
4
5
6
7

猪名川様式(鳥)-1

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2016

河原環境を指標する鳥類の変遷

No	目名	科名	和名	H25		H26		H28	
				春季	秋季	春季	秋季	春季	秋季
1	チドリ目	チドリ科	コチドリ	○		○	○		
2			イカルチドリ		○			○	
3			シロチドリ						
4			ダイゼン						
5	シギ科	シギ科	ハマシギ				○		
6			アオアシシギ						
7			キアシシギ						
8			イソシギ		○		○		
9	カモメ科	カモメ科	コアジサシ						
10	スズメ目	セキレイ科	キセキレイ				○		
11			ハクセキレイ	○	○	○	○	○	○
12			セグロセキレイ	○	○	○	○	○	○
合計				3	4	3	6	3	2

1
2
3
4
5
6
7

猪名川様式(哺)-1

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2021

カヤネズミの営巣数の変遷

項目		H23				H26				H28				R3			
		春季	初夏季	秋季	総計	春季	初夏季	秋季	総計	春季	初夏季	秋季	総計	春季	初夏季	秋季	総計
カヤネズミの巣数	右岸	3	4	8	15	0	0	0	0	0	0	4	4	1	18	24	43
	左岸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	3	6	9

1
2
3
4
5
6
7

猪名川様式(両・爬)-1

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2021

カエル類・カメ類の確認状況

(○は確認した場合、－は確認しなかった場合)

分類		種名	H5(1993)	H10(1998)	H15(2003)	H23(2011)	R03(2021)	
両生類	カエル類	在来種	ニホンアマガエル	○	○	○	○	○
			トノサマガエル	○	○	○	○	○
			ツチガエル	○	○	－	－	－
			ヌマガエル	○	○	○	○	○
	外来種	ウシガエル	○	○	○	○	○	
爬虫類	カメ類	在来種	ニホンイシガメ	○	○	○	○	－
			ニホンスッポン	○	－	－	－	－
	外来種	クサガメ	○	○	○	○	○	
		ミシシippiaアカミミガメ	○	○	○	○	○	

1
2
3
4
5
6
7

猪名川様式(哺)-2

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2021

アカネズミの確認状況

(○は確認した場合、－は確認しなかった場合)

種名	H5(1993)	H10(1998)	H15(2003)	H23(2011)	R03(2021)
アカネズミ	○	－	－	－	－

猪名川様式(基)-1

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2025

生息場環境の変遷

単位：面積(m²)

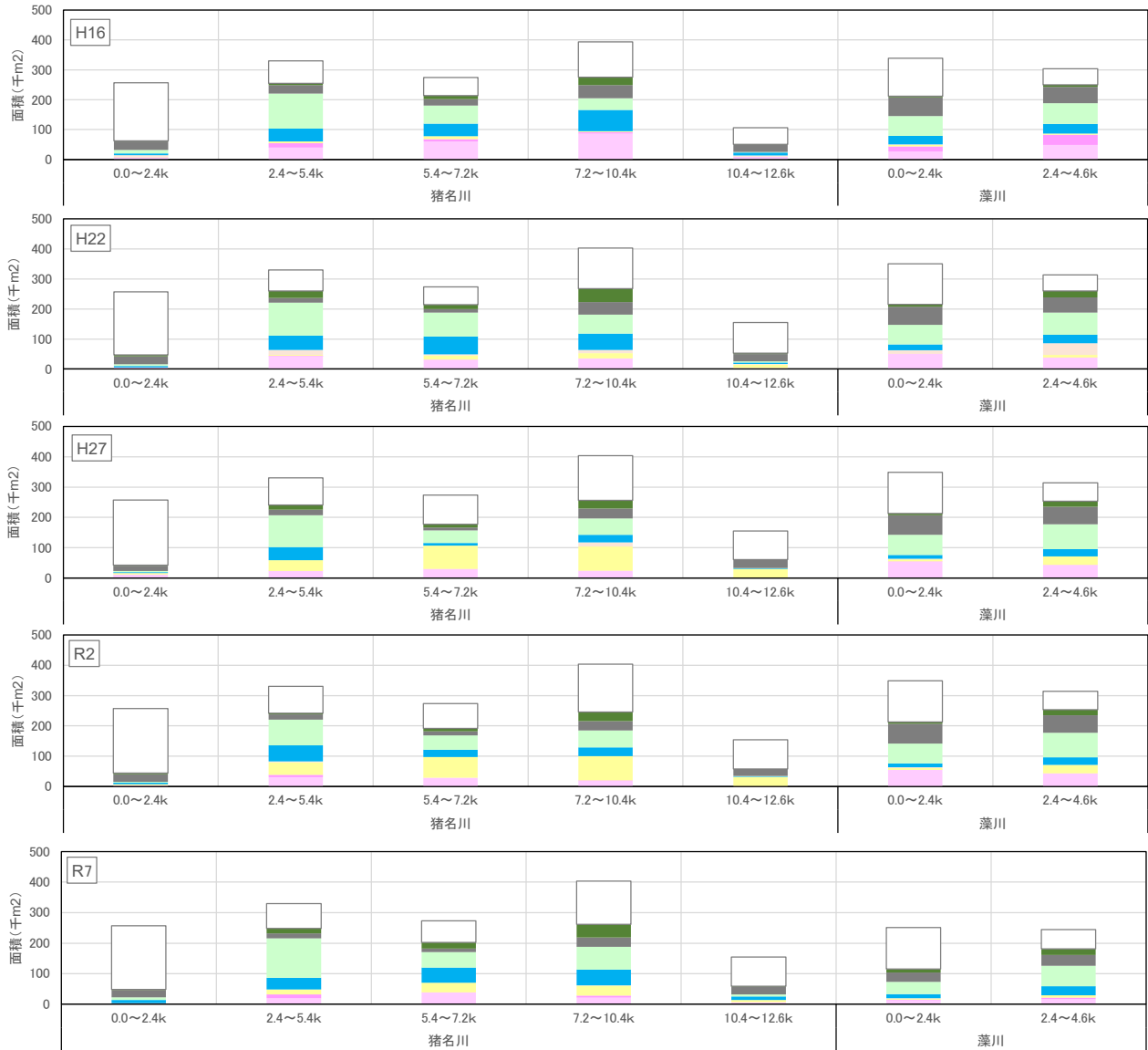
H16	距離	外来種	外来種(特定外来)	自然裸地	湿地	その他草本	構造物	樹林	開放水面	人工裸地
	(k)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)
猪名川	0.0~2.4k	7,076	64	2,658	5,906	11,987	28,893	1,256	194,844	4,172
	2.4~5.4k	39,344	14,764	6,578	42,194	117,787	28,824	5,079	75,124	0
	5.4~7.2k	60,350	7,256	10,276	41,422	60,790	21,275	12,379	59,893	0
	7.2~10.4k	86,806	5,246	2,231	71,796	38,800	44,598	25,382	118,662	0
	10.4~12.6k	7,810	1,306	1,296	10,059	1,614	24,155	1,335	56,070	2,875
藻川	0.0~2.4k	26,989	16,671	4,594	28,484	66,351	63,338	3,272	127,414	1,820
	2.4~4.6k	48,558	34,266	3,331	32,607	69,008	55,026	6,883	53,366	0

H22	距離	外来種	外来種(特定外来)	自然裸地	湿地	その他草本	構造物	樹林	開放水面	人工裸地
	(k)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)
猪名川	0.0~2.4k	5,305	0	0	4,817	5,569	25,954	4,913	210,385	0
	2.4~5.4k	43,495	537	2,939	47,773	109,662	15,583	23,631	69,614	16,766
	5.4~7.2k	30,129	834	13,836	58,761	80,392	10,856	14,914	59,425	4,522
	7.2~10.4k	34,966	0	18,141	53,939	63,509	41,912	44,932	134,712	10,938
	10.4~12.6k	3,595	0	11,309	5,331	3,762	24,450	2,224	102,544	1,546
藻川	0.0~2.4k	50,822	152	793	19,531	64,368	60,485	8,165	135,233	10,962
	2.4~4.6k	38,373	178	8,535	28,420	73,557	51,167	20,935	54,301	38,779

H27	距離	外来種	外来種(特定外来)	自然裸地	湿地	その他草本	構造物	樹林	開放水面	人工裸地
	(k)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)
猪名川	0.0~2.4k	11,804	0	5,056	2,911	3,731	17,602	1,857	213,926	56
	2.4~5.4k	22,548	59	35,872	43,674	104,995	17,738	15,779	89,224	0
	5.4~7.2k	29,051	137	77,861	7,671	41,808	10,468	9,950	96,601	121
	7.2~10.4k	23,130	1,479	79,733	24,978	54,553	32,471	27,049	146,720	12,936
	10.4~12.6k	983	0	28,979	1,664	1,479	27,396	513	93,744	0
藻川	0.0~2.4k	55,120	152	5,876	12,916	65,508	64,866	5,766	135,948	2,503
	2.4~4.6k	42,957	664	27,434	24,657	81,640	57,417	18,710	60,377	0

R2	距離	外来種	外来種(特定外来)	自然裸地	湿地群落	その他草本	構造物	樹林	開放水面	人工裸地
	(k)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)
猪名川	0.0~2.4k	4,050	0	4,175	4,379	3,377	24,743	3,603	212,434	56
	2.4~5.4k	31,644	7,398	40,837	52,548	85,016	16,838	3,635	88,330	3,492
	5.4~7.2k	28,821	0	69,021	23,333	47,609	12,510	10,517	81,693	126
	7.2~10.4k	19,047	1,588	79,487	28,872	55,556	30,386	30,253	157,940	140
	10.4~12.6k	219	109	31,455	1,426	1,103	23,594	372	96,467	0
藻川	0.0~2.4k	55,120	152	5,876	12,916	65,508	64,866	5,766	135,948	2,503
	2.4~4.6k	42,957	664	27,434	24,657	81,640	57,417	18,710	60,377	0

R7	距離	外来種	外来種(特定外来)	自然裸地	湿地群落	その他草本	構造物	樹林	開放水面	人工裸地
	(k)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)	(m ²)
猪名川	0.0~2.4k	3,274	142	223	10,200	8,283	24,587	1,815	208,347	73
	2.4~5.4k	19,582	12,155	17,103	37,952	129,054	16,378	16,350	81,326	0
	5.4~7.2k	38,315	131	32,120	49,820	50,443	11,552	19,807	71,478	0
	7.2~10.4k	21,593	6,783	33,081	51,767	74,833	30,055	43,170	141,464	304
	10.4~12.6k	6,122	170	7,773	11,631	6,929	24,767	1,334	96,032	0
藻川	0.0~2.4k	13,528	1,425	4,056	13,537	40,087	30,276	11,588	136,053	863
	2.4~4.6k	17,253	4,458	7,600	29,711	67,371	35,060	19,775	63,749	0



生息場環境の変遷

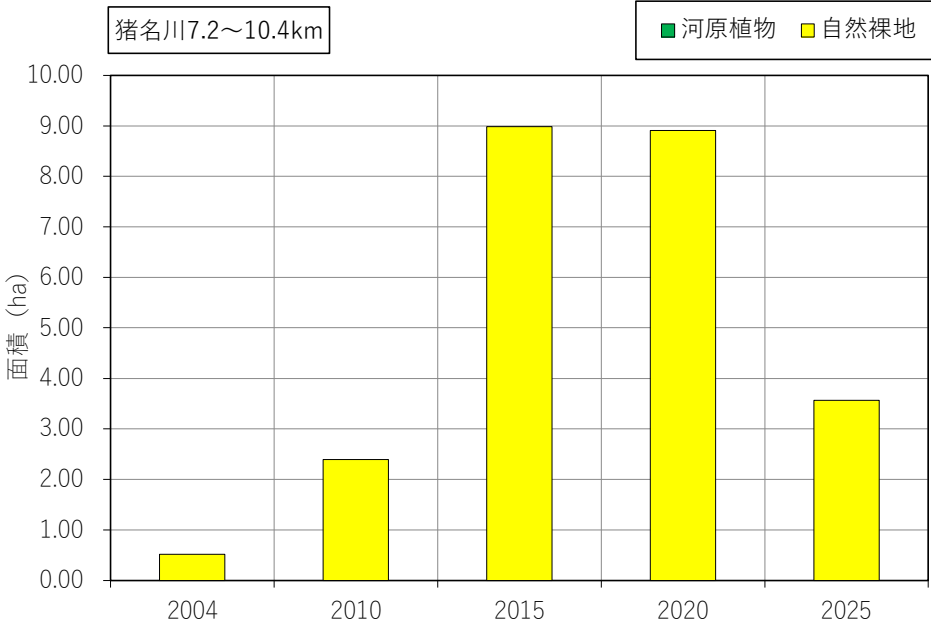
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

猪名川様式(基)-2

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2020

単位：面積(ha)

猪名川 7.2~10.4 k	河原植物	自然裸地
2004	0.00	0.52
2010	0.00	2.40
2015	0.00	8.98
2020	0.00	8.91
2025	0.00	3.57



河原環境面積の変遷

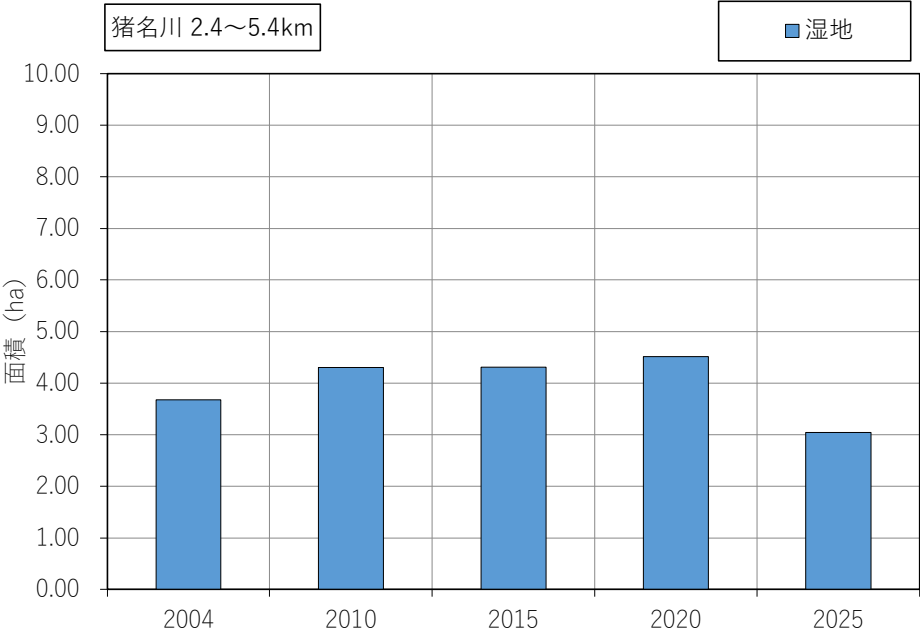
1
2
3
4
5
6
7
8

猪名川様式(基)-3

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2025

単位：面積(ha)

猪名川2.4k~5.4k	湿地
2004	3.68
2010	4.30
2015	4.31
2020	4.52
2025	3.04



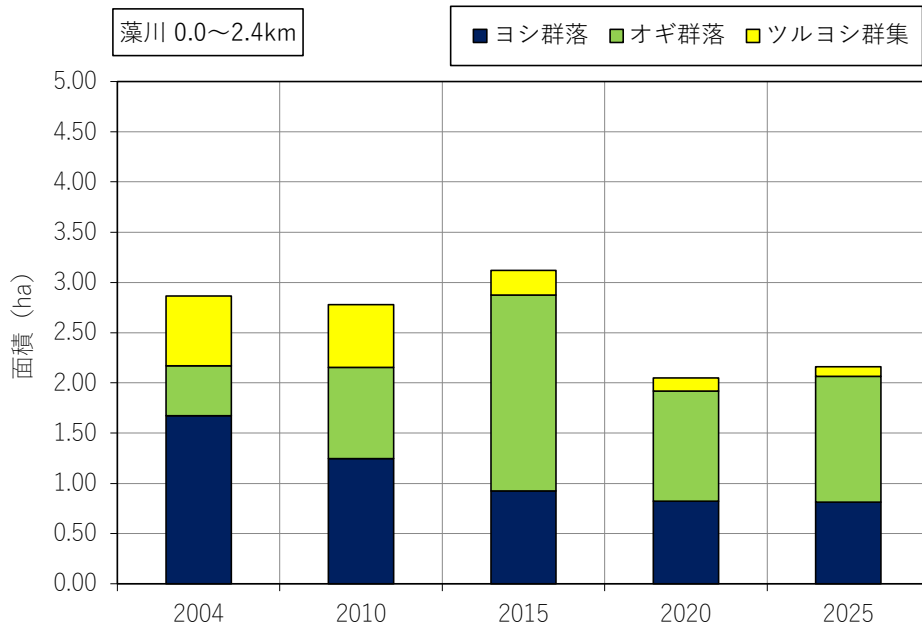
湿地群落面積の変遷

1
2
3
4
5
6
7
8

猪名川様式(基)-4

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2025

藻川0.0k~2.4k	単位：面積(ha)				
	2004	2010	2015	2020	2025
ヨシ群落	1.67	1.25	0.92	0.82	0.81
オギ群落	0.50	0.91	1.95	1.10	1.25
ツルヨシ群集	0.70	0.63	0.24	0.13	0.10



ヨシ群落・ツルヨシ群集・オギ群落面積の変遷

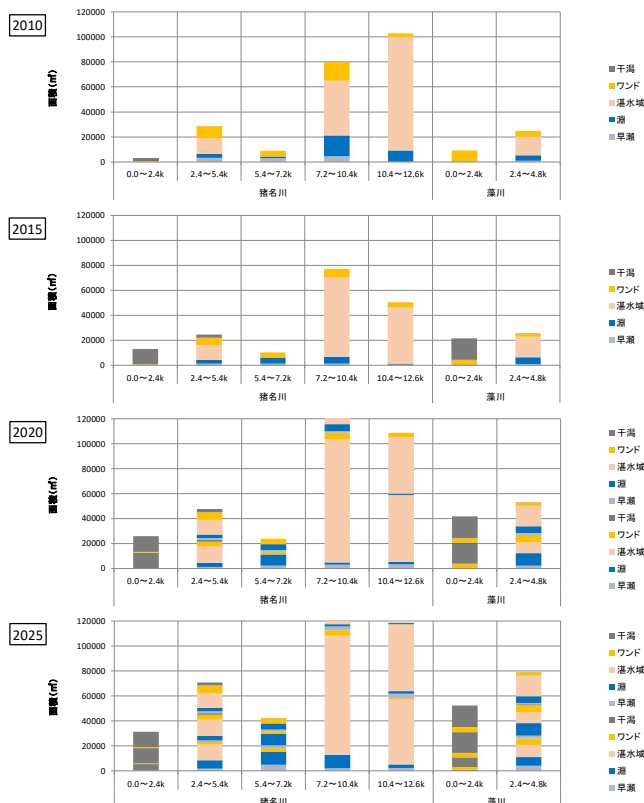
1
2
3

猪名川様式(基)-5

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2025

年次	距離(k)	単位:面積(m ²)				
		早瀬	淵	湛水域	ワンド	干潟
2010	猪名川 0.0~2.4k	0	0	0	682	1854
	2.4~5.4k	3286	3111	12584	9803	0
	5.4~7.2k	2915	1475	0	4576	0
	7.2~10.4k	4568	16712	43824	14957	0
	10.4~12.6k	297	8878	90517	3248	0
藻川	0.0~2.4k	0	119	0	9018	0
	2.4~4.8k	1038	4293	14894	4552	0
2015	猪名川 0.0~2.4k	0	0	0	776	12333
	2.4~5.4k	1342	2983	11790	6005	2458
	5.4~7.2k	1499	4701	0	4292	0
	7.2~10.4k	1361	5455	63526	6896	0
	10.4~12.6k	667	846	45227	3707	0
藻川	0.0~2.4k	0	391	0	3927	17316
	2.4~4.8k	1057	5471	16359	2539	221
2020	猪名川 0.0~2.4k	0	0	0	334	12396
	2.4~5.4k	1355	3489	13152	3680	1441
	5.4~7.2k	2268	9235	0	1872	0
	7.2~10.4k	3156	1692	98552	5413	0
	10.4~12.6k	3414	1989	52698	339	0
藻川	0.0~2.4k	0	380	0	3587	16207
	2.4~4.8k	2437	9957	8688	5682	671
2025	猪名川 0.0~2.4k	0	0	0	398	5177
	2.4~5.4k	1809	6697	12692	1960	0
	5.4~7.2k	4953	10448	0	2917	0
	7.2~10.4k	2150	10849	95070	4295	0
	10.4~12.6k	2438	2710	52300	1013	0
藻川	0.0~2.4k	0	620	0	2518	7391
	2.4~4.8k	4076	7161	9462	5153	0

4
5



水域環境面積の変遷

6
7
8

1

2

猪名川様式(基)-6

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2025

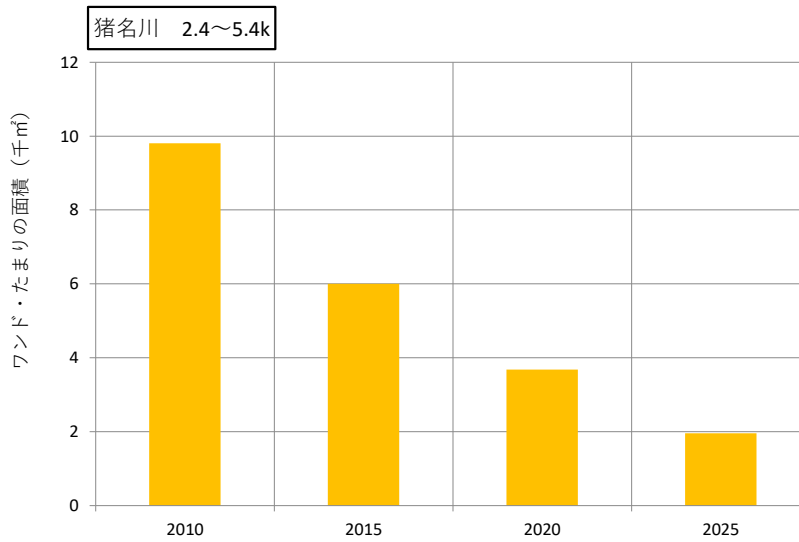
3

単位:千㎡

河川名	距離	2010	2015	2020	2025
		ワンド・たまり	ワンド・たまり	ワンド・たまり	ワンド・たまり
猪名川	0.0~2.4k	0.7	0.8	0.3	0.4
	2.4~5.4k	9.8	6.0	3.7	2.0
	5.4~7.2k	4.6	4.3	1.9	2.9
	7.2~10.4k	15.0	6.9	5.4	4.3
	10.4~12.6k	3.2	3.7	0.3	1.0
藻川	0.0~2.4k	9.0	3.9	3.6	2.5
	2.4~4.8k	4.6	2.5	5.7	5.2

4

5



6

7

ワンド・たまり面積の変遷 (猪名川様式(基)-6)

8

地方整備局等名	事務所等名	水系名	河川名	調査年度
近畿地方整備局	猪名川河川事務所	淀川	猪名川	2020

堤防植生区分

堤防植生区分	群落名	基本分類	
1 シバタイプ	シバ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
2 チガヤタイプ	チガヤ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
3 外来種タイプ	コセンダングサ群落	一年生草本群落	
	ヒメムカシヨモギーオオアレチノギク群落	一年生草本群落	
	セイタカアワダチソウ群落	多年生広葉草本群落	
	セダムsp.群落	多年生広葉草本群落	
	セイバンモロコシ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
	タチスズメヒエ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
	ネズミギ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
	オニウシノケグサ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
	シナダレスズメガヤ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
	アメリカスズメヒエ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
4 広葉タイプ	オオイヌタデーオオクサキビ群落	一年生草本群落	
	ヨモギーメドハギ群落	多年生広葉草本群落	
	イタドリ群落	多年生広葉草本群落	
	カラムシ群落	多年生広葉草本群落	
	クズ群落	その他の低木林	
5 オギ・ススキタイプ	オギ群落	単子葉植物群落(オギ群落)	
	ススキ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
	オガルカヤ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
6 ツルヨシタイプ	ツルヨシ群集	単子葉植物群落(ツルヨシ群集)	
7 在来イネ科タイプ	メシバーエノコログサ群落	一年生草本群落	
	オセシバーアキメシバ群集	一年生草本群落	
	ジュズダマ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
	ギョウギシバ群落	単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	
8 樹林	ジャヤナギーアカメヤナギ群集	ヤナギ高木林	
	ジャヤナギーアカメヤナギ群集(低木林)	ヤナギ高木林	
	メダケ群集	その他の低木林	
	ノイバラ群落	その他の低木林	
	アキニレ群落	落葉広葉樹林	
	スルデーアカメガシワ群落(低木林)	落葉広葉樹林	
	ムクノキーエノキ群集	落葉広葉樹林	
	マダケ植林	植林地(竹林)	
	センダン群落	植林地(その他)	
	植栽樹林群	植林地(その他)	
	シナサワグルミ植林	植林地(その他)	
	9 その他	果樹園	果樹園
		畑地(畑地雑草群落)	畑

【更新履歴】

- 令和元年度（令和 2 年 2 月版）：「河川水辺の国勢調査を行う上での猪名川における補足事項（案）」（以下、「補足事項（案）」）について、令和元年度猪名川自然環境委員会を通じて指導・助言をいただきながら作成し、令和 2 年度から運用することとなった。但し、各分類群の詳細な内容については今後も協議していくことし、当該年度の自然環境委員会では、次年度の分類群に対する内容について指導・助言をいただき、必要に応じて更新していくこととなった。
- 令和 2 年度（令和 3 年 1 月版）：令和 3 年度の河川水辺の国勢調査の分類群である両生類・爬虫類・哺乳類について指導・助言をいただき、カエル類・カメ類、アカネズミに関する事項を追記した。また、令和元年度に委員より指摘を受けた「1.1.1 猪名川・藻川の代表区間ごとの重要な環境」について、猪名川・藻川で感潮区間の汽水環境から淡水域へ連続していること、人との関わり合いや横断連続性に関する特徴について追記・更新した。
- 令和 3 年度：令和 4 年度の河川水辺の国勢調査の分類群である魚類について指導・助言をいただき、指標の考え方やその他着目する種に関する情報を追記・更新した。その他、止水環境や指標種等の表記の統一を行うとともに、縦断連続性の指標種にヌマエビ科を追加した。
- 令和 4 年度：令和 5 年度の河川水辺の国勢調査の分類群である底生動物について指導・助言をいただき、湿地群落の表記及び補足地区①の位置を変更するとともに、魚類調査についても関係する箇所を整合させた。
- 令和 5 年度：令和 6 年度の河川水辺の国勢調査の分類群である陸上昆虫類等について、調査結果とりまとめにおいて、シルビアシジミに関する情報を追加した。
- 令和 6 年度：令和 7 年度の河川水辺の国勢調査である河川環境基図作成について確認を行った（修正・更新無し）。
- 令和 7 年度：令和 7 年度に行っている河川水辺の国勢調査の「猪名川・藻川全体調査計画（6 巡目）」の結果を基に、「補足事項（案）」の更新版を作成した。その他、委員のご指摘に基づき、ゴキヅル確認時の留意点を補足するとともに、河原環境の指標種（植物）にカワラケツメイを追加した。